

746

雲々々々、相見ることなくして十年経過。新生日本最初の建設的施策としての教育制度の大革新。当時先生は、小樽経済専門学校の校長であられた。母校の、小樽商科大学への単独昇格については、いまは触れまい。すべては、建学以来の緑丘学園の学風、緑丘会々員の熱意、地域社会の変らざる支援、そしてこれを統合し万全の針路を設定してすべての者にこの道を歩ませた大野先生のリーダーシップ、誠実、柔にして剛なる行動、いっさいの賜物である。昭和五十六年夏某日、昭和十一年卒業の諸氏の全国大会が小樽で開かれた。招かれて参列、行事はてゝ宿る銀鱗荘の一室、枕をならべて大野先生は言う、「大谷君、君は、昇格のときの話、ちっともしないが、死ぬまでに一度きかせろよ。」私の答え、「いえ、たまたま、なにかと情報に接するところにいたゞけ。申しあげたことはみんな、先生が皆さんと相談しておやりになったんですよ。」翌朝、先生は珍しくも朝食の前に、八十名の参会者に向って、「言い残しておくこと」の長広舌をふるわれた。翌昭和五十七年一月三十一日午前十時半、先生忽然としてご他界。噫。先生、あのタイプしたGHQ担当官からのメモ、RECOMMENDED GUIDING PRINCIPLES FOR ORGANIZATION OF NATIONAL UNIVERSITIES IN JAPAN や、() Main Principles for the Establish-

ment of New National Universities, それから日本側から提出された(と思われる) Reports on the Progress and Request (on が on になっている)など、どこにファイルなさいましたか。

(大10年卒、元小樽高商教授、元東京外国語大学教授)

大野学長を悼む (緑丘会弔辞)

中 田 乙 一

緑丘会一万人の同窓生を代表して、故大野学長の御霊前に謹んで弔辞を捧げます。一昨日先生の突然の訃報に接したのでありますが、余りに突然のことではし絶句してしまいました。我々同窓生一同は深い悲しみに沈んでいるのであります。

先生は同窓生の会合にはよく御出席頂いておったのでありますが、去る一月二十一日のサンシャインシティ五十七階の緑丘会館に於いて緑丘会新年恒例会が盛大に開かれた際に

経営における人と組織

「人は城、人は石垣、人は濠」という言葉は、戦国時代の名将の遺した名言として、広く人口に膾炙しているところである。

権謀に明け、術数に暮れた狂乱の世上に、一門郎党、数十万の命運を一身に背負っていた戦国武将が、その最後の抛り所を「人」に求めた心情は、今日、各種企業の経営の責にある人びとには、ひとしく深い共感を呼ぶところであろう。

近代経営は、さまざまな組織の共働によって動いている。けれども組織そのものは、畢竟するに「人」の共働以外の何物でもない。

「有能なセールスマンがほしい」「優秀な経理の担当者がほしい」あるいはまた「立派な支店管理者をもっとほしい」という嘆きには、組織を動かしているものは「人」であるという認識がこめられている。

ことに銀行業の場合には「人」その組織が持っている人的な資産の優劣が、企業の将来

をさだめる極めて大きな要因であるといわれている。

しかし、私は企業の発展のためには現在もっている人的資産の上にもう一つ重要なものが加わらなければならぬと思う。それは、その組織が人的な資産の資質の向上、引上げに、どれだけの努力を払っているかということ、絶えずそのような努力の下に前進がなされているかどうかということである。こうした組織の努力こそ企業の進展に決定的な要因となるのである。「もう一人優秀な得意先係員がいたら……」「もう一人優秀な貸付係長がいたら……」というまえに、その発言者自身が手持の係員、係長の能力向上にどれだけの努力を払ったかどれだけの助言と支援を与えたかについて反省してみるべきではなからうか。たとえば、得意先係長は、A社担当の係員にその意見を聞き、自分の考え方や判断を話して、A社との取引向上について、どれだけ具体的に、また的確に、指示を与えてきたであろうか。支店長は、次長や貸付係長に対して、B社への融資に関し、どれだけそれぞれの意見と自分の意見とを出し合って討議をしたであろうか。下位のもは、このような具体的な実戦例を素材とした討議の中から成長して行くのである。

某銀行では、毎週一回、得意先係員と支店長の時事問題に関する勉強会のほか、各係長

以上かかったわけである。不吉なニュースがきていなければ良いがと念じつつ、店の中央部を見ると、すでに支店長は出勤していて、私の顔を見るや否やカウンターの出入口まで迎えてくれて、応接間に導き、静かに―ことさら静かに「学校から今朝電報がきている。どうして連絡しようかと考えていたところだ。たいしたことはないが学生ホールの一部が燃えたようだ」といって私を驚かさぬよう気を配ってから、電報を渡してくれた。その後連絡で学生ホールが全焼したこと、他に被害なかったこと、原因調査中、ということがわかったので、私は即日文部省とホールの寄贈者栗林徳一氏にお詫びと報告にまわってお許しを願った。帰校後調べたところによると、ホールの番人がまだ消え切らない藁灰をみかん箱に入れて物置に入れたのが、夜中に再燃しだして大事に至ったものである。

私は今でも木造校舎の責任者には心から同情すると共に、日本中の学校を一日もはやくコンクリート建てにしてもらいたいと念願している。さて、この事件があつてから私は、奇跡の信奉者となった。ホールの火事が発見されたのは夜中の十二時頃であり、私が夢の中で警告を受けた二時半頃は盛んに燃えていたのである。偶然というにはあまりに符節が合いすぎる。私はこの科学万能の時代にも私なりの理屈をつけて奇跡を信ずるものである。

いかに科学万能の時代といえども科学がまだ解明できない分野がたくさんある。否それがあればこそ将来における科学の進歩・躍進が期待されるのである。この世の中には科学がすでに到達した分野と、未だ到達しない分野とがある。科学の到達した領域において、その結論に反することを信ずるならば、それは迷信であり頑冥であるといわれても仕方がない。未だ科学の到達し得ない領域について、ある判断を下し、これを信ずることは、科学的ではないが、しかし迷信や頑冥として一笑に付することはできない。私の見た夢と火災との関係は必ずしも偶然や迷信ではなく、科学のまだ手のとどかぬところにある奇跡であると信じている。

(北洋相互銀行内報『行友』第二七号、昭和三十八年三月、「随想」より、四二―四三頁。)

私共がまだ若い小樽高商の講師の時代に、校長の伴房次部先生が出張中旅先から学校あてに「火の用心たのむ」という電報を打ってきたことがある。私共のん気な若者は親爺あたりまえのことに、なにを取り越し苦労しているのだと思つたものである。帰校してからの話によると、在京中先生は学校が燃えた夢を見たので、心配になつて打電したのであつた。

その後二十数年をへて終戦直後私自身学校の責任者となつた。当時学制改革のため頻々と上京しなければならなかつた。そのたびごとに親友・横浜高商の校長宅の居候となつた。東京はまだ焼野が原で、私共を泊めてくれるような適当な旅館がなかつたのである。当時の交通事情からみて、同君宅から文部省までは少なくとも二時間半はかかつた。校長官舎は横浜でも郊外に近い磯子にあつたから。昭和二十四年四月のことである。いつものように公務で上京し、同君宅に数日厄介にな

つていたのであるが、二十五日の夜中に不思議な夢を見た。どんな場面でそうなつたのか当時からハッキリしなかつたが、夢の中で誰かが学校から重要な電報がきているから第一銀行三輪支店へ行け、というのである。この言葉を聞いてからはパツと目がさめてしまつてねむれない。枕元の時計を見ると二時半過ぎである。当時学校と上京中の私との連絡先はこの支店長方にしてあつたのである。支店長は東京における同窓会の役員としてこまめに世話をしてくれる人であり、かつ当時私は東京の同窓会支部と頻々と相談しなければならぬことがあつたからである。私は夢を見てから一刻も速く三輪へ飛んで行きたかつたのであるが、今のようにはイヤーもタクシーもない時代である。

私はただ焦躁の感にかられて一番電車の動き出すのをジツと待っていた。ようやく五時半過ぎになつたので、ソツと床から抜け出して、机の上に「急用ができたので上京してきます」と書きおいて、静かに玄関の戸をあけて外へ出た。そして、市電の停留所で一番電車の来るのをまって飛び乗った。桜木町まで約一時間を費し、そこから国電にすし詰めにされてようやく上野駅についた。そこからまた満員の都電に乗って三輪まで行つた。銀行の支店の扉が開くのをまって玄関から転び込むようにして中に入った。磯子から約三時間

それを期待されてはかえって失望されると思いますから、この点は諒承しておいて下さい。」ともっともなことを言うのであった。

H君はこれであろうやくストレートの敗戦ではなくなったと考えたのか、「それではよろしく頼みます。」と言って立ち上り玄関を出た。私は外へ出てやっとホッとして、額や首筋の汗をふいた。しかし、H君は、「もう一軒頼むところがあるから行ってみよう。」というので、「こんどはどこだ」と聞くと、「大隈侯に頼んでみるつもりだ」というのである。後に知ったのであるが、当時都下の大学生間に「アジア学生連盟」なるものがあり、大隈さんが総裁で彼は学生役員の一人数であったため、ときどき二人は顔を合わす機会があったらしい。

しかし、私はもうこりこりしたので今日はもう結構だから一応休ませてくれと頼んで、バスケットをさげたまま牛込若松町の下宿屋へ連れて行ってもらった。

さて、それでは私の大学時代の身元保証人は誰になったか、という結局Hの口ききで下宿の近所の下駄の齒入れ屋さんに決まった。そして保証人問題はハッピー・エンドに終わった。上京の折牛込若松町を通るたびに注意して見るが、下駄屋らしいものは見当らない。

その後H君は大学卒業後永井柳太郎の世話で読売新聞の記者になったが、総選挙のたびに社から飛出して永井さんの応援演説に歩き回るのでトウトウ新聞社にもいたたまれず、永井柳太郎の秘書になった。そして、終戦後は一度郷里の石川県から代議士に出たが、次の選挙には辻政信が圧倒的人気で立候補したので彼は出馬を断念した。今はかつて区会議員もつとめかつ四十年以上も住んでいる世田谷区の人々のために、いろいろ世話役をつとめているようである。

彼とライバルの関係にあった辻政信はご承知のとおりどこかに潜行して、いまだに行方不明である。辻政信とH君といずれが議員になった方が石川県のため、国家のために良かったか問題である。先日私が定年で学校を退いた旨を通知したところ、葉書に筆太で三行程書いてきた。

いわく、「大野、貴様はまだ学校にいたのか、からだをたいせつにしろ。一度出てこい」と。明治、大正の学生にはヤンチャなところはあったが、ノンビリとしてユーモアに富んだところがあった。それからみると、今の学生はあまりに利口すぎるのではないか。

(北洋相互銀行行内報「行友」第二七号、昭和三十八年三月、「随想」より、四〇―四二頁。)

る。私は前述のように親戚はあるが、うっかり保証人などになってもらうと時々お伺いして窮屈な思いをしなければならぬので、「そんなところはない」と答えた。「それでは俺が頼んでやる」といって、行き先も告げず、そのまま駅前から市電に乗せられて二、三回乗り換えして到着したところは立派なお屋敷の前であった。表門の標札をチラリと見ると「前田利為」と書いてある。その大門のわきのくぐり戸をあけて小玄関へ入って行くので、私も彼にしたがって後からついて行った。彼は受付の書生に、「殿様にちょっとお会いしたいから、とりついでくれたまえ」と言って、自分の名刺を渡した。

そこで応接間に案内されてしばらくすると、相当年輩の家令風の人が出てきた。お互いは顔見知りのようであった。彼はH君に「なんのご用ですか」と尋ねた。Hは私を彼に紹介して、「実は殿様にこいつの身元保証人になってもらいたいのです。ご在宅ならお会わせ下さい、お留守ならあなたから頼んで下さい」というのである。私はびっくりしてしまった。前田利為といえは加賀百万石の大名の子孫で現に公爵である。この訪れた屋敷は今から考えれば本郷の彼の有名な赤門内の旧邸であったのである。それからH君と家令氏との間の問答がたいへんである。

家令、「殿様はかねてからこの方とお知り合いですか。」H君、「いや初めてである。」家令、「それでは無理でしょう。」H君、「しかし、大野は石川県人である。しかも小松中学の出身である。あなたはかつて小松中学校長をされたことがある。その時卒業生に渡した卒業証書は一人一人に対するあなたの人物保証の書である。もっとも今はあなたは校長でないが、あなたが学校を去るときにバトンを渡した人はこれなら小松中学を托して大丈夫と信頼した人である筈だ。歴代の校長は皆こうして間接にあなたの信頼を受け継いできているのである。そうしてみるとあなたの後輩の校長の卒業証書といえども、あなたが人物を保証したと同じ意義がある筈だ。しかるに、その人間の身元保証を殿様に取次がぬとは誠に怪しからぬことだ。」

私はしばらくこの会話を聞きながら啞然としていたのであるが、秘かに私は彼の袖を引いて、もう帰えろう、という表情を示すと、豪傑のH君は大きな声で、「貴様、だまっておれ。」といってなかなか腰をあげない。やむなく家令は、「石川県人であり、小松中学の卒業生であるということだけで殿様が一々身元保証をなさっては限りないではありませんか、あなたがそんなにおっしゃるなら一応お殿様の耳には入れておきましょう。しかし、

くうなずかれたようである。そこで漸く皇后陛下の御質問に対して「多くの官庁や銀行、会社は午後五時迄が執務時間のようですからこちらは六時から始めて九時に終ることにしております」と御答えしたのであった。すると皇后さまは「それでは昼働いて十分休むひまもなく勉強ですね、仲々感心な人々ですね」と申された。私は「はい、ほんとうに感心な青年達で御座います。今頃の気候ですとまだ良いので御座いますが、冬季になりますとあの坂道の両側には一米以上も雪が積っております。吹雪の夜などは二、三米先さえ見えないことも度々御座いますが、そんな時でも彼等は熱心に通学して参ります。私共教える方でも頭の下る思いをすることもありません」と申し上げたところ、皇后様は「ほんとうにそうですね」と学生のために仰言って下さったのである。

今日でも私は就職先等で短大の学生が賞められるのを聞くと殊更に嬉しくなると同時に昭和二十九年八月十九日を思い出して、世が世であったら陛下の御靴をふむとはけしからん無礼者めと打ち首にでもなったかも知れないと、冷やりとする。それにもかかわらず、こうして、のん気な生活が続けられるとは誠に有り難い世の中ではある。

(墓目英三編『緑丘』第二九号、昭和三十八年一月、一〇一―一二頁。)

私の身元保証人

私は大正八年に小樽高商を終えてから、さらに東京高等商業学校の専攻部(今の一橋大学)に進学した。東京には二、三親戚もあったが、そんなところに顔出しするのめんどろ臭いので、当時早稲田大学政治学部在学中の中学時代の級友にあらかじめ下宿捜しを依頼しておき、東京着の日時をも知らせておいた。三月末私は緋の着物に袴をはいて、バスケットをぶらさげて上野駅に着いた。(あけびで編んだ四角な籠で今のスーツ・ケースに該当する。当時としてはハイカラな物入れであった。)彼H君はホームで迎えてくれた。彼と私は同級同年齢であるが、中学時代から私に対しては一段上の兄貴分であるらしく、いつも私を呼ぶのに「大野、貴様」というのである。互いに六十歳を過ぎた今日でもたまに会うと「大野、貴様」である。

このH君が上野駅のホームで開口一番発した言葉は、「大野、貴様東京に身元保証人になる人がおるか」というのである。昔も今も同様新入学生には身元保証人が必要なのであ

著書論文等を中心に二つの部屋に陳列し、各室の壁間には同窓越崎宗一君の秘蔵のアイヌの風俗絵を掲げて、御覧に入れることとした。

当日、教職員、学生及び教職員家族一同は分担に従って校舎の内外で御待ちした。私は玄関で御迎えし、定刻御着と同時に二階の主事室に御案内して、同学部の概況を御説明申上げた。そして、御説明の最後に、「彼等勤労青年の向学心に十分むくいるよう私共一同努力する覚悟でございます」と結び、次の部屋への御案内のゼスチャーをしたのであった。ところが、意外にも、陛下は「今述べたような決心で今後共大いに努力して下さい」と激励の言葉を賜ったのである。私は咄嗟に、「有り難う御座います」といつてからだを前にかがめておじぎをした。後から考えて見れば、この「有り難う御座います」は誠に変な答えであったと思う。「はい、かしこまりました」か「はい、承知いたしました」位が適当な言葉でなかったかと、今でも思う。やはり少しあがったのであろう。

私は時間を気にしながら、陳列の第一室を御説明申上げた後、第二室目へと急いだのであった。小さい部屋の中程へ御先導した頃、天皇陛下は「昼間の教官が夜間にもこちらへ出て講義するのは大変ですね」と労わりの言葉を下さったので、私は「理想といたしまし

てはこちら専任の教官を出来るだけ多く揃え度いので御座いますが、国家財政窮乏の折柄でもありますので、夜間の教官定員が充実いたしますまでは本科の全教官がこちらへ参りまして応援いたしております」と申上げたのであった。陛下は「ほんとうに御苦労ですね」と仰言って教官の労に対して温かい気持を示されたのであった。

こうした御話が終って、室内を数歩あるいたとき、陛下のすぐ後にしたがっておられた皇后陛下から「こちらの学校は何時に始まって何時に終るのですか」という御質問が出たのであった。御答えは勿論皇后陛下の方に姿勢を正して申上げるのが礼だと思って、私は急に廻れ左をしたのであった。ところが、そのとたんに、私の動かした右足が何かにコツンとあたって一寸高いものの上に乗ったのである。ハッと下を見ると天皇陛下の御靴の先に私の右足の靴が乗っかっているのである。私はその瞬間何と御詫びを申上げるべきかとまどったのであった。またたく間の出来事ではあったが、二つの案が私の頭の中に閃めいた。一つは「御許し下さいませ」であり、一つは「御免下さいませ」であった。瞬間の判断ではあったが「御許し下さいませ」はあまりにかたすぎると決めて、即座に「御免下さいませ」と陛下にだけ聞える程度の小声で御詫びを申上げたのであった。陛下はかる

き判断力と同時に道徳的な勇気を兼ね備えて貰わなければならぬ。

私はかかる考えから機会ある毎に、判断の自主性を堅持し、道徳的勇気を涵養することを終戦後の学生諸君に、繰り返し繰り返し要望した。私はかかる要望を今日の学生諸君に對しても訴えたいのである。

(小樽商科大学『緑丘五十年史』、昭和三十六年七月、二二六—二二八頁。)

世が世なら打首にでもなった話

小樽の母校には、昭和二十七年以来三年制の夜間短期大学部がある。これは勤労青年のための教育機関を是非設立して欲しいという地元市民や道民の熱意に応えて出来上ったものである。古い卒業生にはあの馴染深い正門前の工藤ミルクホールがあった附近だといえれば大体場所が想像して貰えるだろう。また新しい同窓諸君には栗林会館の跡地と考えて貰えば見当がつくであろう。道と市が三千万円近くを投じて建てて呉れた二階建の瀟洒な建築である。年々百名位の青年がこの門を出てわが緑丘に一勢力を加えつつある。

さて、昭和二十九年の秋北海道で国民体育大会が催されたときのことである。天皇皇后両陛下は小樽市にも御立寄りになることになったのであるが、その御視察箇所の一にわが短期大学が指定されるの光栄に浴したのである。それは同年八月十九日のことである。宮内官の話によれば、両陛下が短期大学に御成りになるのはこれが初めてのことであった。文科系の学校としては特に珍しい施設もないので、短大の学生の研究作品や、教官の

据えておいたストーブで暖をとるようにした。しかし、石炭不足が深刻になるに従って、止むを得ず冬季休暇を二か月に延長し、その代わりに暑中休暇を短縮することにした。

他方寮では最小限の共通の食事は賄いで作って一様に食べるのであるが、それでは到底彼等の生活を支えることが出来ないのも、その外に各自が部屋毎に自炊と称して色々の食物を用意して腹をみたしていた。この自炊には各部屋で半ば公然と電気コンロが木炭や石炭の代わりに使われていたようである。火災予防危険があるので、各自が賄う代わりに寮費の引き上げをして共通の食事もっと増してはどうか、という勧告もしてみたが、個人毎に学費の負担の点でも、食糧調達能力にも差があるので、それは実現困難であった。この部屋毎の自炊は危険を伴う外に大きな欠点があった。それは食物に関して利己主義的な気風が自生して、寮の団結に面白からざる反面をもたらしたのであった。こんな環境では落ち付いた勉強など出来るものではない。学園は恰も引揚寮か何かの感じがあった。

一日も早く学園を学園らしくしなければならぬ。それには学生諸君に先ず向うべき目標を求めさせねばならない。彼等はいくつか月前迄は戦うことが彼等自身と国家との理想の花園への道であるということ教えられ、純情な彼等は一途にその道を邁進して来た。

この彼等の信条は八月十五日の終戦と共に裏切られた。理想の花園への道と信じていたものは実は暗黒の谷底への道であったことを、身をもって体験した。一般国民同様に虚脱状態に陥った。それと同時に、従来の権威や価値に対して不信を抱き、疑いをもってそっぽを向くようになった。これは或る程度無理からぬことであった。

しかし、過去の歴史を担い将来の歴史を開拓して貫かねばならぬ青年学生は、いつまでもこうした状態に止まってはならない。その為にはわれわれ戦争に直接責任ある成人が、自ら反省し、告白し、再びかかる失敗を繰り返さねよう彼等に自覚して貰うより外に道はない、と私は考えた。

顧みれば、昭和の日本人には二つのタイプがあった。一方は正しき判断力はあっても勇氣を欠くもの（インテリの多くがそうであった）であり、他は勇氣はあっても正しき判断力を欠くもの（軍部、政治家の多くである）である。昭和に入ってから日本は後者の蛮勇の前に前者は沈黙し、国家の運命は猪突のみ知って識見なき人々の手に握られて、みすみす日本を戦争に導き、国民を敗戦の悲運に引きずって行ったのであった。ここに思いをいたすならば、新たな国家の再建に向かって、将来国の運営に当たる青年学徒は、正し

ありますが、ここしばらく米の粥をたべたことがないので、本を読んでも身が入らないので困っています。すみませんが米があったら一合か二合貸して頂けないでしょうか」というのである。私はとっときの米一升と缶詰二、三個を渡して「これは上げるのだから、大いに勉強なさい」と断わっておいた。こんなことをすっかり忘れていた九月に、休暇あけで帰って来たこの学生は、再び拙宅を訪ねて袋に入れた米を持って来た。多分二升位もあったかと思う。私は辞退したのであったが、彼は自分の家は新潟の農家であって、今度はチッキで夜具の中にどっさり米を入れて持って来たから、心配せずにとっておいて欲しいというのである。あの内地米で炊いたまぶしい許りの銀めしの味は今でも忘れられない。

さて、下宿の学生でもこんな具合であるから、大勢いる寮の学生の食糧問題には寮監をはじめ学生部、学校当局は随分と頭を悩ましたものである。大部分代用食の僅かの配給だけでは彼等の胃の腑はどうてい満たされはしない。何度も何度も教官会議を開いて見たものの、名案としてはあろう筈もなく、結局市役所や道庁に泣きついてみるより仕方がなかった。しかし、そこでも無い袖は振れないとて特別配慮はして貰えない。止むを得ず授業は

午前中に打ち切り、寮生には戦時中の援農先に行って馬鈴薯や澱粉を買い出すことを黙認し、その為の欠席は公務に準ずることとした。寮生がカイホウ麵とか称して海草と寒天よりのもので造ったうどんみたいなものを四斗樽に入れてリヤカーで地獄坂を運んで来るのに時々出逢ったのもこの頃であった。

かかる食糧難の折、一寮出身の青森の渡辺泰助君は度々自家で製造している味噌や醤油を寮生の為に送って呉れた。又地元では早川昌三君が何かと寮の食糧の心配をして呉れた。有り難いことであった。

つぎに困ったことは学校や寮の石炭不足である。それは予算の面と現物の面とでやりくりの工夫が必要であった。予算の割り当てはあっても適当な買い入れの時にまだ資金が来ないことがあった。こうしたことは石炭代だけではなく教官の年末手当ですら間に合わないこともあった。こんな時には寿原九郎君に頼んで一時資金の融通をして貰ったこともあった。資金はこうして予算さえあれば何とかやり繰りは出来たが、現物の絶対的不足はどうにもならなかった。最初学校では授業時間中だけ僅かにスチームを通した。勿論教室内で外套手袋も許可しなければならぬ程のかすかな暖かさであった。放課後は各事務室に

海道経済研究所の主管として、調査論文に応募する学生の指導に、お忙しかったのである。いつも図書館の横の赤煉瓦の商品館内の一室に、助教服部政一氏とおられた。お姿は、しょうしやながら、寡黙、ドイツ風の謹厳なかと、お見うけしていた。

後に昭和十二年頃、北海道庁で、はじめて緑丘の同窓鈴木義雄氏（大正十年卒）が商工課長になられた。そして地域貿易の振興のため北海道貿易協会というものをこしらえて、大野さんが常務理事、私たちも手伝いということになった。いままでの輸出品の、青豌豆や除虫菊、薄荷の取卸油、檜のインチ材やかんば、乾するめや昆布・なまこ・ふじこのほかに、毛がにの缶詰や精製魚粕はどうかということであった。とりあえずの統計や調査の報告の編集調整、月報の刊行は、大野先生が主幹、編集に昭和八年卒の森正明氏。先生のてきぱきしたご指導で、魚粕の方は、北海道大学の農学部水産学科大島幸吉博士の研究室で、立派なフィッシュ・ミールができ、マーケティングは、緑丘で苔米地先生指導のもと、木曾氏や私が、調査研究して、米国へ輸出の途が開けたようであった。大野さんのマネジメントである。

このころ一度、高橋次郎氏、服部政一氏と、最上町の外人官舎のお近くのご新宅へ、お

伺いしたことがある。木の香の漂う、青いたゞみのお部屋で、ドイツで集められたビールのジョッキ（？）を幾つか見せてくださった。そして、なんのきっかけからか、飾り棚からおろされた立派な布帛の袱紗に包んだものを取りおろされた。その包みからとりだされたのは、美しい模様ちらしの塗ぬりの小函、中に梅・松・桜の花骨牌、真白く細かい計算棒、おやっと思つたことであつた。奥様、お嬢さまにも、この時はじめておめにかゝつたのである。（のちに知る、かつて、コントラクト・ブリッジは紳士の遊び、それは英語の勉強にもなるとて、浜林生之助先生宅に、ファーマインジャー教師を招き、木部林二先生を交え、私も陪席した月に一度の清閑の夕べ、のちにはとつくにその人を失つて大野さんも交えられたとか、思えば東洋の諸君子、菊を束籬のもとに採るかわりに、雪・月・花を、あの立派な骨牌に争われたのもあろうか）。

先生の学問上のご業績など、私の頭のそと。商学討究創刊の委員、引きつゞく編集委員のおひとりとして、怠け者の私を奨励し、いくつかの拙稿を採択載せてくださった学恩に感謝するばかりである。

やがて昭和十三年、先生応召、翌十四年、私の東京外国語学校教授への転出。そして戦

が、ただ一つ気にかかることがある。それは中央政治の混乱を見せつけられた国民の中から時々、「偉大な政治家が出ないかなあ」という声が聞えることである。もしもこのよ
うなさげびが国民の中にびまんし、一人の偉大な野心家はその国民感情を利用するよう
なことが起きたならば、折角の民主政治も根底から覆されることになるからである。われわ
れは一人の偉大な政治家より良識ある大衆の出現を念願しなければならぬ。

（北洋相互銀行行内報『行友』第一八号、昭和三十五年九月、六二一―六三頁。）

戦後の学園風景

終戦の年の九月十三日に私は二度目の応召から帰って来た。学園は戦争末期頃から在学
期間が二年六か月に短縮されており、校門から営門へと若い学徒を送り出していた。又在
校生も工場や援農に出動し、僅かの残った学生に対してはいわゆる集中講義によって短期
間にエッセンスだけの授業が行なわれていた。

終戦と共に死を免れたものは戦場から、銃後にあったものは軍需工場や援農から、学園
にポツポツ帰って来た。又軍関係の学校に在ったものには無条件で短期専門教育を施すよ
う通達があり、これらの諸君も入学して来た。小樽にも米軍が進駐することになり、校舎
の約半分北側、寄宿舎、学生会館、研究所等は彼等の接收するところとなった。尤も
進駐軍は二十年の暮れまでには学校施設は返還した。

この頃学園の運営に当たって最も悩まされたものは、食糧難と石炭不足であった。確か
二十一年の六、七月頃であった。一人の学生が私宅を訪れ、玄関先で、「明日臨時試験が

後の日本に参考になるのではないかと思う。

その会議でドイツの代表が数字や資料を整えてドイツの支払不能の理由をドイツ式に秩序たてて説明したところ、F国の代表が、「君はもっともらしく述べるが、君の国へ行つて見るとカフェーやダンスホールは徹夜のドンチャン騒ぎであり、劇場映画館は連日満員の盛況ではないか。国民の生活にあれほど余裕があったならそれを賠償にまわしたらどうだ」と反駁するのである。これに対してドイツの代表は、「いや、国民がほんとうに豊かな余裕ある生活をしているならば、あのような現象は生じないはずである。むしろ逆にインフレや重税に悩まされて明日に光明がなければこそ、ああして刹那の享樂を求めて辛うじて生き続けているのである。いま国民からこれを奪ったならどんな偉大な政治家も国を治めていくことはできないであろう。この点、了承してもらいたい」と額に汗して陳弁これつとめたのであった。ところがF国代表は隣のI国代表の方を向いて、「国民から享樂を奪つては政治ができないというなら、あなたの国のムツソリーニ君をしばらくドイツに貸してドイツに勉強させてはいかがですか」と冗談半分にいうのである。I国の代表はこれに対し、「ムツソリーニ君を貸すわけにはいかないが、彼の政治を学びたければ弁当で

も持って習いにいらっしやい」とこれまた冗談半分に答えたそうである。

その後賠償額はドーズ案、ヤング案等々によって次第に減額されたのではあるが、それでもドイツ国民はインフレ、重税、借金等々のため希望のない生活を続けなければならなかった。

この国民の生活苦と国民感情とを巧みに利用してナチス党は一九三〇年の総選挙にベルサイユ講和条約の破棄、賠償の不履行、ユダヤ人排撃等々をキャッチ・フレーズとし極端な国粹主義をかかげて一躍十二名の少数党から百七名の多数党にのしあがったのである。かくて天下の実権を握ったヒットラーは皮肉にもムツソリーニ以上の独裁政治を行なつて、ついにドイツ国民を再び第二次大戦にまで引っぱっていったのであった。

さて、戦後の日本をかえりみると、何々祭り、何々観光等生活面における娛樂要素が驚くほど多くなってきた。終戦後の数年間は前述のドイツと共通な原因から、こうした現象が生じたものと思われるが、幸いにして日本経済は年と共に成長してきたために次第に国民の生活にゆとりができて、いわゆるレジャー消費時代が訪れつつあるのである。この意味において今日の日本人の生活における娛樂的要素は決して不健全なものではない。

を托するのに些かの不安も感じなかった。こうして、『緑丘』の第一号が漸く世に出ることになったのである。

今道庁の商工課を牛耳っている木下君は馬車馬の様に働いた。青山学院のヘーゲリアン金巻君は毎号健筆を揮った。富士元君は二人の後をジッと見守っていた。そして、この三人の名コンビは、ときどき揃って奇襲には来たが、私に誓ったあの言葉を最後まで守り終えた。

附記―その後いま函館商業にいる三浦君が部員となった。私はよく同君と太陽舎通いをやっていたものだ。

〔小樽高商緑丘新聞』第一〇〇号、昭和十二年六月、第一面。〕

昔ばなし

大分古い話である。第一次欧州大戦後、連合国は敗戦国ドイツに対して天文学的数字の賠償金をいや応なしに課した。即ち一九二一年のロンドン協定で千三百二十億金マークを四十二年間に支払うことに決った。戦いに疲れて破れたドイツがこんな莫大な賠償を支払い得ないことは冷静に考えれば当然のことである。しかし当時は敵愾心に燃えている連合国のことであるから、シャニムニ調印させてしまった。

そしてドイツは最初の一年半は年度の割当額を支払った。しかし、それは対外借金とインフレと重税によってであった。が一九二二年の後半に至って為替暴落等のため到底支払うことができなくなった。そこで何回か国際会議が開かれて、「払え」「払えない」の談判が繰り返された。当時日本も連合国の一員であったため、賠償金総額の七厘五毛を受けとることになっていた。会議ごとに日本の代表も参加したのであった。その何回目かのオランダ・ハーグの会議に出席した日本代表の一人から聞いた話はいろいろの意味で、戦

新聞にしたらどうかと思います。新聞は第一に、短い記事でも載せられますから雑誌のように原稿難に陥ることがありません。第二に問題になるような軟文学が自然に影をひそめます、第三……第四……」彼は理路整然と新聞案を一わたり説いてから、「部長の御意見は如何ですか」というのである。

私は、その一、二か月前、部長になると同時に出了た校友会誌の一小説が問題となつて、しこたま校長に御目玉を頂いた後でもあつたので、彼の主張はいちいち尤もとうなずくことが出来た。殊に、新聞が学校と同窓会との密接な連絡機関になることを考えた。が、ただ一つ彼の雄弁をもつてしても尚私を納得せしめ得なかつたことは、果して定期的に出し得るかどうかという点であつた。そこで私はこう答えた。

「成程、君の言うことは良くわかつた。しかし、君の新聞案の第一論拠はどうも薄弱である。新聞ともなれば少なくとも毎月一回は定期的に出さねばならぬ。そうすると年に十回だ。今君達が一年かかつてさえ、僅か百五十頁か二百頁の原稿を集めるのにあんな苦勞をしているじゃないか、どうして毎月原稿を集める積りかね。君今少しこの点を熟慮してから決めたら良いだろう。僕は必ずしも不賛成ではないが」

正直で素直な同君はしばらく考えてから、「それは確かに心配です。じゃ一つ明日は金巻、木下両君とも慎重にこの点を再検討してからまた参ります。先生もどうか学校当局の意向を確かめて下さい」こうしてその夜は大分更けてから彼は帰って行つた。

翌日は学校で教官会議があつた。私は途中の休憩時間か何かに折を見て、校長に新聞案のあること及びこれに対する意見を聞いた。校長も不賛成ではなかつた。この時二人の傍にいた村瀬教授は盛んに新聞案を支持された。そこで三人の間で新聞案が決まつた。「緑丘」という名も確かこの時の三人の座談のうちに決まつたのである。

教官会議の終るのを待っていた富士元君は、その日もまたおそく訪ねて来た。「三人協議の結果、もし万一原稿難にでもなることがあれば、われわれだけでも毎月四頁は填める覚悟が出来ました」という固い決心を誓つた。私は三人の平素からその言葉を信ずることが出来た。

「それでは断行することにしよう。われわれの新聞は単なる現実の鏡であつてはならない。それは同時に現実をリードするものでなければならぬ。この意味において諸君の責任は絶大だ。慎重を期して貰いたい」しかし、私はこの三人に関する限り現実リードの重責

将来学校を担われる方々に、学校の発展は人材と図書その他の設備の充実とともに、地元・同窓会の精神的・物質的な熱意があればこそ、今日この大学がここまで来たのだということとを申し上げて、将来の参考にしていただきたいと存じます。

母校は六十周年に、大学院という記念碑が出来ましたが、このあと七十周年あるいは六十五年かも知れませんが、それ迄にもう一つ大きな記念碑、博士課程の大学院を是非実現していただきますことをお願いする次第です。そのためには、地元の皆様や全国の同窓の皆様のご後援なくしては実現し得ないことと存じますので、くれぐれも今迄と変わらず学校のためご尽力下さいますよう、心からお願い申し上げます。

（創立六十周年記念講演、昭和四十六年七月七日小樽商科大学講堂において。藁目英三編『緑丘』第八〇号、昭和四十六年九月、一〇—一三頁による。）

あの頃の話—『緑丘』第一号の思い出—

私は元来過去を語ることの嫌いな人間である。たまには誘われて映画を見に行くが、滅多に西洋物は見ない。それは過ぎ去った欧州の生活を思い出させるからである。思い出を楽しみ得る人間は幸福である。私はその出来ない不幸な人間である。

こうした私にも『緑丘』の思い出だけはほほ笑ましく浮んで来る。緑丘新聞ももう第百号を記念するようになった。して見るとあれからも十二年を経たことになる。速いものだ。私が宮崎力蔵君の後を受けて編集部を引受けて間もなくのことである。ある晩、おそく、今は明石で心豊かな生活をしている富士元君が住之江町の私宅を訪ねて来た。あの頃はよく学生諸君の奇襲を受けたので、例によってそば食いにでも連れ出されるのだろうかと思った。出てみると、「先生、今日は部のことについて相談にまいりました」というのである。今日に限って同君は真面目である。

「実は従来のような雑誌では常に問題が起こるので困ります。それで私はいつそのこと

ろ、「こんな祝辞では駄目だ。僕が今晚原稿用紙に書くから、明日早く庶務の者を取りに寄越してそれを巻紙に書かせなさい」といって、高瀬さん自身の筆で原稿を書いて、学校のために祝ってくれたのであります。それは鉛筆書きの原稿であります、私が大切に保存しております。

こうして先ずこれからは、内容充実——立派なスタッフすなわち立派な先生と、立派な図書に重点を置かねばと考えているとき、昭和二十五年に、今ここに出席になっておられる安達市長と、今は亡き新谷専太郎さんのお二人が、私の自宅へおいでになり、勤労青年のために短期大学の設立の運動を起してくれということでした。私はまたかという気持でありました。

しかし地元の意向を文部省に伝えねばならぬと思い、文部省に行きましたところ、文部省は経費の問題なら大蔵省へ行きなさい、ただし大蔵省で文部省担当の石動氏は横柄な男だが、喧嘩しては損だから黙って話して来いとのことでした。(長崎高商の校長は石動氏と会って口論し、文部省へ来て涙を流して憤慨した。あんな俗史がわれわれに対して無礼な発言をしたというのです。)石動氏は、「とてもこんな終戦後に、いま大学になったばかり

りの大学が短期大学を造るなんて、財政的余裕がない。」それでは、「地元で財政的援助をするというなら許可するか」というと、「財政以外のことは文部省だ」と、こういうことを言っていました。

そして文部省へ行くと、「短大を造るのに二千八百万円ぐらいは設備・建物にかかる、それを地元で達成する自信があるか。」「それは分からぬが、教育長など熱心にいるのだから、恐らく可能であると思う」といって帰り、安達市長さんにその旨を話したところ、「よろしい、二千八百万円引受けて建物を建ててあげるから、文部省へOKと回答を出してよろしい」というので、文部省に行きましたら、「文部省はよいのだが、大蔵省の石動氏のところへ行つてその話をするように」とのこと、石動氏のところへ行くと、「何処の地方でも、出来るまでは何千万円でも出しますよというのが普通だ、われわれはそんな手に何回も乗っているのだ」というのです。

次に市長と共に、文部省や大蔵省などあちこちへ行き、確かにこれだけを用意すると説明して、ようやく昭和二十七年、短期大学が出来上ったのであります。来年度のこともこのような過去の古い話を思い出して、今日お集まりの皆様方への感謝の意と同時に、

当時の市長さんは寿原英太郎さんでありましたが、会頭の松川さん、成人教育の卒業生をもって構成していた公民会、学生代表の諸君および先生方に集まってもらい、あの旧校舎の会議室でイールズを迎えて、小樽は他の学校と違うのだということを主張してもらいました。同時に、札幌から帰った八月九日の夜、木曾先生に頼んで大学昇格の立案書を英文タイプで打ってもらい、こんなに厚いプリントを作ってイールズに渡した。その時苦米地先生が、これだけ説明したら小樽を単独で昇格させるでしょうとイールズに聞きましたところ、イールズは東京へ帰って上司の判断をまつより他に方法がないんだといって、はっきりした返事をいたしません。その晩に、寿原市長、松川会頭、同窓の諸君や学校の主なる人と、銀鱗荘でイールズを囲んで一席を設けた訳であります。イールズは道内の各地を見て歩いて、すぐ東京へ帰りました。

そのあと学校で教授会を開いて、「もうわれわれのやるべき事は尽きたのではなからうか、他に案があったら……」と申しましたところ、ここにいる麻田君だったと思います。が、「ここで黙っていても駄目です。もう一度上京してGHQと文部省へ行かねば駄目です。」というので、リュックサックをかついで、米と身欠鯨を持って上京し、GHQに行

ったところ、イールズは休暇をとって軽井沢に行っているというので、一寸がっかりしました。しかし、それから文部省へ廻りましたところ、米原という当時専門学校担当の局長をしていて、あとで大学の教授になった人ですが、米原君は、「大野さん、GHQから小樽は単独差し支えないという返事が文部省へ来たので、安心してよい。」「本当ですか、何時も文部省はわれわれにGHQがこう言ったああ言ったといっって、あとでくつがえるが、本当ですか。」

三つの理由で昇格してもよいということになったのであります。(その三つの理由は『緑丘五十年史』にありますので省略します。)それからすぐ学校へ、「アメリカシヨウチンタオオノ」の電報を打って、帰って来たような次第でした。これが、商科大学という看板を掲げられるようになったいきさつであります。

昭和二十四年の七月七日の十時に、開学式が行なわれたのであります。この開学式のために高瀬荘太郎文部大臣がお見えになり、大臣には和光荘に泊っていただいたのですが、着くと同時に「文部省から祝辞が来ているか」、「来ております」といいますと、「すぐこっちへ取り寄せて、見せてもらいたい。」それを庶務に連絡してお見せしましたとこ

年間ゆっくり勉強してもらった先生が今も何名かおられて、学校のため努力されておられるのであります。

二十一年から二十二年にかけて、幸いに内容充実のための資金が出来たのであります。が、今度は翌年の二十二年になって、全国の国立学校に驚きをもたらすようなGHQの命令が、文部省を通してなされました。それは全国の府県に大学は一校のみ、ただし人口百万以上の所は例外とする、こういう指令が出されたのであります。その際北海道には大学を三つだけ、北大、畜産大学、函館の水産大学だけ認めるということになり、商大の準備をしている小樽高商の影がどこかに没してしまつた。

それで、同窓会長飯川文三氏とすぐ上京し、東京在住の同窓生諸氏に、われわれだけの力ではどうしてもGHQの方針は動かせない、同窓各位が分担して、この三大学案を訂正させるように運動してほしいとお願いし、GHQ係、文部省係、資金係等々の分担をきめてGHQにあつた。当時はGHQの命令に対しては文部省は一言も反抗ができず、われわれが反対運動を文部省へもって行つても、GHQがきめたのだからGHQに直接行つてくれと、常にそんな態度をとっていました。

昭和二十三年八月突然、GHQの大学担当の局長で有名なイールズが北海道の直轄学校を視察しに来ることになりました。視察の前に北大で会議をやりたから直轄学校の校長は全部集まれというので、北大は伊藤誠哉さんが学長であったが、全学部長がそこへ列席し、直轄専門学校の校長が集まつたのであります。一体今日はどういう会議をやるかと思つていたところ、イールズ氏は今日は普通の会議と違つて諸君に質問するから答を聞きたいと言います。まず第一に、小樽の校長はじめ学校当局は三大学案に反対していると聞か、小樽と札幌の間は一時間の距離ではないか、しかも小樽高商は名門校だということを聞いている、他方北大には文科系の講座は一つもない、この両者が合併するのは合理的である、それなのに何故小樽の校長は反対するのか、理由を説明せよというのです。私は咄嗟の質問にやや驚きましたが、日頃の考えを六つ程述べて、最後にアメリカは世論の国だというのにGHQは何故世論を無視するのかと、質問に対する答を結びました。ところが彼は他の反対理由には一つもふれず、「小樽の単科昇格が世論だということは何をもつて証明するか」というので、市民大会の決議、同窓会の決議、全道商工会議所の決議等々を述べましたところ、彼は黙つてただ一言、明日君の学校へ見に行くといつたきりでした。

と、そういうことを言い真剣になって反対したそうです。そこで中央から、たしか文部次官の沢柳政太郎さん一行だと思いますが、現在地を見に来て、堺小学校の話をして反対するものに対し、「そんな小さな考えで小樽の都市計画を考えているのか、あの緑が丘（当時）はそうは言わなかったでしょうが）は将来小樽の中心になるべき所だ。あそこに設けることは至極適切な選定であると思う」という一言をもって、此処へ緑丘学園が設立されたのであります。

こう考えてみますと、この小樽高商が第五高商として北海道の僻地に出来たということは、地元の人々の熱意、精神的・物質的な熱意がもたらしたものと思ひ、われわれは故人に対して大いに感謝しなければならぬと思ふのであります。

次に比較的新しい終戦後の話で、市および皆さんに感謝申し上げます。二十一年五月に、苦米地先生が衆議院議員に出馬されたのでそのあとを継ぐように文部省から命ぜられ、その任にあらざる私でありながら、あとを引き継ぐことになったのであります。ところが二十一年の十二月二十日、旧北海ホテルで同窓会総会が開かれ、その席上で私にとって驚くべき決議

がなされました。それは小樽高商を大学にしようという決議でありました。その後間もなく市民大会が開かれ、満場に市民が集まって小樽の高商を大学にすべしという決議が出来たのであります。

しかし大学昇格ということは簡単に出来るものではないので、学校内部で相談して、必要なことは先ず人材を集めること、次は研究施設特に図書の実充をはかること、そのためには資金を用意しなければならぬが、学校創立当時のあの意気込みをもって市民と同窓の方々に協力して頂くということになって、当時小樽商工会議所会頭並びに北海道商工会議所連合会頭で、今ここに出席の松川さんに相談申し上げましたところ、松川さんは自ら小樽商科大学期成会の会長になって全市の人に呼びかけ、同窓会の方は飯川文三氏が駆けずり廻って、一応五百万円（昭和二十一年当時の五百万円）を目標にして基金を集めようということになり、それを立派に一年以内に果たしてもらったのであります。その中から鬼頭（一橋大学教授）文庫も購入しました。あらたに小樽に赴任してくれる若手教官に対しては、任官と同時に一年間東京で元の大学の先生について勉強してもよろしい、こういう条件を出したのであります。当時の五百万円が集まったればこそです。その当時一

味において学校のプラスになると思う、自分が機会を作るから是非会い給えといわれ、北海ホテルの一室を借りて、その頃相当お年をとっておられた金子元三郎さんと山本厚三さん、浜林教授と私と四人でお話を承ったのでありますが、それはどういういきさつでこの緑が丘に小樽高商が出来たかという、私共のまだ学生になる以前の話であります。この金子元三郎さんは小樽の区長（今の言葉でいえば市長）をされ、衆議院議員や貴族院議員にも出られた方です。明治三十年代には、日本に高等商業学校は四つよりなかった。一つは東京高商、次は神戸高商、山口高商、長崎高商でした。明治三十九年に、東京以北にも一つ高商を設けるべきであるという提案がなされ、それが議会を通ったのであります。そして東京以北の各地で誘致運動が行なわれ、最も強力に行なったのは仙台、函館、小樽の三つでありました。

その時に、ただの陳情ではとても津軽海峡を越えて北海道で高商が出来そうにもないと考え、金子さんは当時の樺区長を東京へ呼んで、区議会の決議は後にして独断で思い切った招致運動をやるから承知してくれといわれた。それはどういう運動かという、他の土地ではただ設立を要望するだけでありましたが、金子さんは、もしも小樽に高商をもって

来るならば敷地一万二千坪を全部市民が寄附をする、更に本校舎の建設費は当時二十七万円の予算であったが、そのうち二十一万五千円を小樽市では寄附するのだ、ということをし出したのであります。ところが他の土地ではそれだけの熱意をもって招致は出来なかったのであります。

当時小樽の年間予算は三十万円でありました。区長と金子さんが独断で二十一万五千円と敷地を全部寄附すると申し出たところ、文部省はそれでは小樽へ設置しようと結局なつたのだそうでありました。区長と金子さんは帰ってから議事に提案しました。そして地主を説いて敷地を寄附するように説得したのであります。

こうしてこの高商を小樽に造ることに決めたのですが、何処に造るかが問題になった。その時六か所ほど候補地を挙げたそうでありました。今の奥沢、潮見台、天狗山の下、熊碓、長橋とこの現在地を比較し、結局ここが良いだろう、その他は辺鄙過ぎるからということであります。これに対し地元の一部では猛烈な反対がありました。水天宮山の麓の方に塚小学校がありますが、そこに通学する生徒さえ吹雪の時は行き倒れになるのに、あの高いところへ高商をもって行っても通学に大変だ、場合によっては熊が出ないとも限らない

て、実業界ばかりでなく、学問の研究教育の分野でも、こうした俊秀を生みだすにいたったとある。心おどる嬉しさであった。なかで大野さん、専攻は貨幣論、校友会では編集部長、しかも新聞『緑丘』の顧問、若手の花形格で、つゞいて発行された『緑丘』新聞によると、当時教官のあいだで開かれた月例の研究会、なんとかいう集りで、報告討論はもちろんながら、会が果てゝののち、きつとうまいもの喰べようとのを言いだし兵衛で、そのなかでも、そのころの小樽にはまだ珍しかったそば、寿司がお好み、それをまた室谷賢治郎先生がお得意の三十一文字にうたいこんだなどと、あった。

新聞ができあがり、発送のために、顧問先生が先頭にたつて、部員が校舎玄関さきの守衛室で新聞を折りたゝみ、発送の帯封を糊つけしていると、その当時、学校の会計課の窓口配属されて、学生の授業料納入をして魅力あらしめた麗人たちが、かならず、すゝんで手伝いを申し出てくれたのも先生のおかげと、当時の部員某教授が伝えておられる。やがてご結婚、大野純一ご夫妻えんごうご家庭のことは、申すもかしこし。

昭和二年の四月、思いもかけず母校によびもどされて、緑丘を登った時、大野先生は海外研究のため、二月ご夫妻でドイツへ発たれて、もうおられなかった。貨幣論の講義は、

東京商大から高垣寅次郎先生が来られて、例年行われた。私は、苦米地英俊先生の指導のもと、英語の勉強をしながら、本科で商業英語、付設の第十四臨時教員養成所（英語）で、英語の授業を担当した。そして、研究室で、高島佐一郎先生・南亮三郎先生ご監修の大西猪之介経済学全集の編集に、南先生のお手伝いをしていた。仕合せであった。そして図書館には、いつも手塚寿郎先生がおられた。なにも仰しゃらないが、お姿をみると勉強しなくてはと心がしまる。昭和初めの緑丘の教官室の炉辺はたのしかった。あるじはいつも浜林生之助先生、お昼どき、きまって現われる中村和之雄、手塚寿郎、椎名幾三郎の諸先生、それに来樽中なら高垣寅次郎先生、お宿の越中屋からのサンドイッチにチーズ、そこえスミルミッキー、キャメロン、モリソン、フィギス、エバンス、大黒マチルド夫人、交わされる言葉は、英語、そしてフランス語またドイツ語、私と前後して緑丘人となった三筒清、松尾正路、高橋次郎、井上紫電、木村重義といった面々も、入れ替り立ち替り参加した。たゞ大野純一先生を欠いていた。

大野先生は、昭和六年一月ご帰朝、四月から講壇に立たれたが、この炉辺の閑話にはあまりお姿をおみせにならなかった。ご講義と演習のご指導のほか、学校に設けられた北

にだけ頼っていては百年河清を待つようなものではありません。

この困難な仕事を前に加茂先生と緑丘会とがしっかり手を握って建設の槌の音を高らかに響かせておられることは誠に心強く感ずる次第であります。

私は安心していま緑丘を去ることが出来るのであります。終りにのぞみ、私は学園を離れるにあたり名誉教授の称号を頂き学園との縁りの糸を与えられたことを無上の喜びとして感謝いたしますと共に、退官に際し緑丘の諸兄から御親切なる言葉の数々を頂きましたことに対し厚く厚く御礼申し上げます。(墓目英三編『緑丘』第二六・二七号、昭和三十七年八月、一頁。)

小樽商科大学の設立

母校が六十周年を迎え、ますます盛んに繁栄しつつあることを心から嬉しく存じます。特に私は、この記念すべき年に母校があらたに大学院の課程を設置されたということに対して、これは六十周年の何よりも偉大な記念碑であると感じ、心から嬉しく存ずる次第であります。そのために努力せられた学長はじめ教官諸君、事務官諸君の協力一致に対して、感謝と敬意を表する次第でございます。

私が申し上げることは昔の古い話ではありますが、これは同窓諸君、新しい先生方に覚えておいていただきたいことを、私の体験したものの中からピックアップして申し上げたいと存するのであります。

私が昭和二十一年経済専門学校の校長を拝命しましたその年に、ある会合が旧北海ホテルで催されたのでありますが、そのとき山本厚三さんが、是非一度金子元三郎さんから学校創立の話を聞き給え、あなたがこれを来たるべき人々に伝えておくことは、何らかの意

精神を体得した真摯な学生の向学心に裏づけられてこそ可能となるのである。

(創立四十五周年記念式辞、昭和三十一年七月七日小樽商科大学講堂において。「小樽商大緑丘新聞」第二七八号、昭和三十一年七月、第一面。)

このように、専門で習得した世界の歴史を突進せよとするものがある。歴史がどうしてか人びとに与えるか、歴史の進歩はどの国の中にも人々の生活の発展に貢献するものである。歴史がどうしてか人びとに与えるか、歴史の進歩はどの国の中にも人々の生活の発展に貢献するものである。歴史がどうしてか人びとに与えるか、歴史の進歩はどの国の中にも人々の生活の発展に貢献するものである。

論議の大半は過去である。しかし過去の大半は今日を築き出すための礎である。過去の大半は今日を築き出すための礎である。過去の大半は今日を築き出すための礎である。過去の大半は今日を築き出すための礎である。過去の大半は今日を築き出すための礎である。

母校を去るにあたって

小樽商大短期大学の設立

私このたび停年により母校を去ることになりましたが、大正十一年から丸四十年間楽しく仕事をさせて貰いました母校の先生、同僚、学生諸君に先ず第一に感謝の念を捧げておきます。と同時に恐らくは他の大学等では見られない同窓諸兄の学園並びに学内の者に対する温かい心根に頭の下がる思いをいたしております。

母校が戦後独立を保ち単科大学になり得ましたのは、専ら、同窓の熱望と地元民の応援と学内諸君の努力の賜物であり、昭和二十一年から二十四年までのこの三者一体の協力は私の終生忘れ得ない感激の思い出であります。

自由な身となった今もあの当時の人々の激励、援助をしばしば思い出して独りで感涙にむせぶことがあります。

小樽商科大学は独立性を保持いたしましたでしたが、それはいわば大学の看板をかかげたのでありまして、真の大学の建設は今後にあるのであります。それには総合大学尊重の文部省

創立四十五周年を迎えて

本学の母体たる小樽高等商業学校は明治四十四年にわが国第五の高等商業学校として呱呱の声を挙げた。今年はその創立以来四十五年に当たる。

顧みれば、小樽高等商業学校は創立以来最高の専門学校となることを理想として幾多先輩教職員が全魂を傾けて育成して来たのであった。そしてその努力は立派に成功した。現に六千有余のその卒業生が今日各方面において要職を占め華々しい活動をなしているのは何よりの証明である。この学園の後を継ぐわれわれは先人の識見と努力に対して深甚な敬意を表すると共にその責任の重大さをあらためて痛感する次第である。

小樽商科大学は今その看板を掲げたばかりである。真の大学が確立されるまでには少なくとも三十年ないし五十年の歳月を要することは、内外諸大学の歴史が示している。

しかし、われわれは今日既に大学の生命の省察と自覚に基づいて数十年後の緑丘学園のオリエンテーションを持たねばならぬ。

人は「駅弁の有るところ大学在り」と称して、わが国の大学の過多なることを非難する。また、日本の経済力に比して大学は余りに多いと言う。しかし、わが国では大学そのものが多過ぎるのではなく、同じ鑄型の大学が多いのである。また日本は貧困なればこそ大学育成に力を注がなければならない。科学もまた貴重な資源だからである。

七十有余の国立大学がことごとく、一、二の総合大学の模倣をもって理想とするならば確かに大学は過多である。しかし個々の大学がそれぞれ特異性を發揮しているならば多数の大学も存在の意義がある。

従って、徒らに学部、学科の増設や人数の大をもって大学の発展と考えるべきではない。間口は狭くとも奥行きのある大学、量より質を備えた大学こそわれわれの進む目標でなければならない。現に数少なきわが同僚の中にも前人未踏独自の研究に黙々と精進しつつあるもの、専門分野において世界の現水準を突破せんとするものがある。私はこうした人々の活動に大きな期待をもつと共に十年、二十年後の小樽商大を夢に描いて心強く感ずるものである。

しかし、このような大学の建設は母校愛に満ちた同窓の絶えざる協力、援助と真に緑丘

永遠の生命を有する小樽高商

明治四十四年に創設された小樽高商すなわち後の小樽経専は去る三月三日の第三十八回卒業式とともに開校以来六千有余の同窓を世に送り一応四十年の歴史の幕を閉じることになった。

新卒業生諸君は卒業式当日盛大に閉校式を挙行することを希望していたようであるが、私の気持はピッタリとそれには賛成することが出来なかった、ささやかな宴をはってそれに代えることにした。

私には小樽高商（経専）が官制上はどうであろうとも——今ここで閉鎖されてわれわれの周辺から無くなってしまふ、と言うことは考えるに忍びなかったのである。私は小樽高商は永遠に存続すると信じたい、否信するのである。

そして、それは二つの意味からである。

その一は、小樽高商は決して廃校し死滅したのではなく、自己の産んだ長子小樽商科

大学に自らのバトンを譲ったに過ぎないのである。小樽高商は閉鎖されたのではなく発展したのである。緑丘永遠の生命の担い手が父から子へと移ったのである。若き子は父からの絆を断って自らの道を歩み得ると勇み立つかも知れない。しかし、歴史を離れて人類を考え得ぬ限りかかることはあり得ない。小樽高商の生命は新たに誕生した小樽商科大学のうちにいよいよ醇化されて健やかに成長するであろう。

その二は、小樽高商は決して過去の学園ではなく、なお将来の学園である。小樽高商は閉校によって使命を達成しその活動を停止したのではない。今まさに小樽高商の名の下に六千の同窓が財界に学界に官界に活動しつつある。小樽高商がどんな学園であるかの最終の断定は、この同窓諸君の活躍によって将来はじめて下されるのである。小樽高商の名に連なる人々は今自己の社会的活動を通して小樽高商を創り上げつつある。小樽高商は過去によって決定づけられた学園ではなく将来において完成される学園である。

それ故に、人類の歴史においてもものを考え世界の全体のうちにものを観ることを学んだわれわれには小樽高商は閉校したとは信じられない。その生命は緑が丘に永遠に輝かしく持続するのである。（小樽商科大学『緑丘新聞』第二二七・八合併号、昭和二十六年四月、第二面。）

開学記念論文集序文

光陰は矢の如く過ぎ去り、小樽商科大学開学の第一年度もはや終らんとしている。おもえば本学は去年七月二、三、四日の三日にわたって開学記念の日本経営学会大会を開催し、七月七日には文部大臣高瀬荘太郎博士の臨席の下に開学式を挙行して、華々しく第一歩を踏み出したことである。古き歴史ある国立高等商業学校中で、商科大学としていわゆる昇格の宿願を達したのは東京・神戸についてわが小樽であるが、新学制の上から単科の国立商科大学として現に存在するのはわが小樽商科大学のみである。そこでわれわれの現在の目標は商科大学の在るべき姿において最も充実したものを造り上げることにあらねばならない。第一年はあわただしく経過した。来たるべき二、三年の間に本学は一応、充実・完成したものとしなければならぬが、この間われわれは真に重大な多くの問題を解決しなければならぬ。徒らに旧制単科大学の跡を追うことも、諸専門学校が寄合ってきた新制総合大学の行き方に従うこともなすべきでない。小樽商科大学はその独自の存在と発展とに如

何に特異な困難があろうとも、これを克服して、その設立において目標であったところの重き使命を達成し、更に新しい分野の開拓にまで踏み入らなければならない。それは本学教職員・学生・後援者の一致した努力によってはじめて可能とされる。単独昇格において母校がそのまま残ったわが緑丘の出身者各位がますます相互のそして本学との親和を厚くし、変わらざる後援の労を惜しまれないことは私の最も感謝していることの一つである。學術の研究と経済人の育成こそ大学の使命であるが、其処においての學術の発展について、直接の責に任ずるのはその教官である。本学教官諸君が、種々の障害を排して、學術の発展に貢献されつつあることは、これまた私の最大の感謝である。本学将来の地位はかかって優秀な研究者たる教官が学問的情熱によって互いに結合し協力するか否かにある。本論文集第二分冊は、先の上梓した一般教養学科担当者の論稿を集録した第一分冊に引き続き、本学専門講座関係教官諸君の労作を収めたものであるが、これも右にのべた一致協力のささやかな表われである。これら諸論文が幾分でも学界への貢献となると同時に、執筆者自身の研究の進歩の一道標となることを衷心望むものである。

『小樽商科大学開学記念論文集 第二分冊』、昭和二十五年三月、序一—二頁。

って重視せられるのであります。すなわち大学における職業教育は職業の担い手たる人間そのものを全人格的意味において育成することから始められなければならないのであります。本学が商科大学であるにもかかわらずその学科編成において二十講座のうち人文、自然、社会に関する五つの講座を設けましたことはかかる意図に基づくのであります。

本学の将来に關しましては本学の成立に熱援を賜りました文部大臣閣下はじめ、市民、同窓各位の御厚意に真にこたえ得る発展をもたらしたいと深く念願いたしております。これにつきましては、特に本学が日本にただ一つの国立単科の商科大学であるという点に格別の責任を感じざるを得ないことを強調しておきたいのであります。万一それが微弱にして諸大学の水平線にすらも達することが出来ないといえますならば、それこそ独り学園関係者の恥辱たるばかりではなく、日本の名誉をも傷つけることになるが故であります。私共は今日以後専ら内容充実に邁進し誓って日本一の単科大学たらんことを期する次第であります。

最後に本日御臨席の各位に対し重ねて心からなる感謝の意を表する共に今後の一層の御後援を切にお願いいたす次第であります。

大（昭和二十四年七月七日小樽商科大学講堂において。小樽商科大学「緑丘五十年史」、昭和三十六年七月、一〇七一—一〇八頁。）

面的改革の一環として実現せられたものであります。しかもこの制度は昭和二十一年來朝せる米國教育使節團の勸告に基づいて採られたものでありまして、いわば外から与えられたものであります。故に新制度の外貌のみに捉われて、学校看板の塗りかえをもって事成れりとするが如き安易な考えに陥るならば、それはむしろ大學昇格ではなくして大學への転落となるのであります。名のみ大學の末席に加わり微々たる喘氣を保たんがときは本學の希望ではありません。また徒らに旧制大學の模倣的再生産をもって新大學の建設はなし得るものとも考へてはならないのであります。われわれは敗戦の冷厳なる事實を直視して、何故わが國の教育制度は改革せられねばならないか、何故旧制大學は刷新せられねばならないか、という大學の内的生命についての深き省察と自覺に基づいてのみ、新大學の使命と性格とは把握せられるのであります。

國家を今日の悲境に陥れ人類最大の罪を犯したものは視野狭きかたくななる日本人の島國根性であつたことを反省するならば、自ずから新教育制度の目標は、自己を世界の全体のうちを意識し、自己を人類の歴史のなかに思考する人間、新たなる価値を受け容るるに敏であると共に常に自主的判斷を有する人間、敢然たる道徳的勇氣を有する人間を創り上

げ、もつて將來の日本の運命を托することに在るのであります。しかしてかかる内的生命を有する新教育制度の中における大學の使命は、真理の探求と人間育成とに在り、しかも兩者には同等の価値が与えられなければならないのであります。従つて過去のわが國の大學に見るがごとく、大學の使命は學問の蘊奥を究めるに在りと自称しこれをもつて青年の全人格的育成を放擲するの遁辭としてはならないと同時に、徒らに功利的な會社員や教員を大量生産し、真理への限りない愛とその探求精神とに欠くるところがあつてはならないのであります。今日以後の眞の大學は知的探求の場所であると同時に人間育成の場所でもなければなりません。世に誇る本學の図書館及び研究室のごときも將來は必ずや、こういう大學における真理探求の道場としての眞価値を發揮し、大學附屬の研究所並びに大学院の温床たらしめることを期している次第であります。他面新制大學の人間育成の使命は二つの範疇に分けて意識せられるであります。その一は高き教養を有する社會人の育成であり、その二は優れたる技能を備へたる職業人の訓練であります。從來の專門學校は學術技芸を教授するところなりとして技術教育、職業教育に重点をおいたのであります。新たなる大學にあつては職業人の訓練と同時に社會人の育成が同等の關心をも

式が何年も続いたのでありますが、この苦しき期間において先生は春風駘蕩たる温容の下に毅然として本校の伝統精神を堅持するに努められたのであります。この時期における先生の御苦心は到底筆舌のよく尽すところではありません。しかしこの不況のさ中に社会に投げ出された当時の学生は逆境に磨かれた不屈不撓の精神をもって今社会の各方面に重要な地位を占めているという事実はわれわれの見逃してはならぬことでもあります。

昭和十年四月伴先生が功成り名遂げて退官せられるに及び苦米地英俊先生が第三代校長として就任せられたのであります。先生は俊敏なる御才幹をもって鋭意校運の発展に精進されたのでありますが、今から回顧いたしますとこの時代は全く戦争に終始した結果となりました。この間世の多くの学校は軍国主義の嵐の下に学園の自治、教育の自主性を失わんとしたのでありますが、先生は終始一貫教育家の節操を堅持し一身を顧みることなく身を挺して緑丘学園の輝く伝統と学問の自由とを守り抜かれたのであります。先生はまた教官並びに学生の激しき向学心を燃え立たすべく十有余年常に研究施設の拡張、整備に専念せられ内外文献の蒐集、研究室の新設等に尽瘁せられたところ甚大でありました。

かくて小樽経済専門学校は相次ぐ三代校長の下、創立以来三十有五年を経て内に熱誠真

摯なる教授陣容を擁し外に六千になんなんとする人格学識共に異色ある卒業生を送り北方文化の開発者たる世の付託に副いつつあったのであります。ローマは一日にしてならず、歴史は飛躍せずと称せられます。本田ここに小樽商科大学が発足するに至ったことは偏えにその母体たる小樽経済専門学校の権威によるものであり、小樽経済専門学校をして小樽商科大学の母体たらしめたものは実に三代に及ぶ歴代校長の遠見とその経営苦心の賜物であります。三先生の御功績は石に刻して永遠に伝うべき偉大なものであります。

終戦後苦米地先生が衆議院議員の選挙に立候補せられるに及び、不肖図らずもその後任の命を受け過去三か年間徒らに衣鉢を継ぐに過ぎなかつたのであります。もしもこの間大過なかりしとするならばこれ偏えにわが親愛なる同僚諸君の感謝に堪えざる協力一致の賜物に外ならないのであります。しかもこの度の小樽商科大学の創設と共にその学長の重職に補されたにつきましては、浅学菲才到底その任にあらざることを万々承知いたしておりますが、母校を愛する念において決して人後に落ちざる熱情を自負とし国に捧ぐべかりし命を緑丘学園に捧ぐる覚悟をもってお引受けいたしました次第であります。

小樽商科大学の発足は既に申し上げましたように、戦後におけるわが国の教育制度の全

小樽商科大学開学式式辞

本日小樽商科大学開学の式典を挙げるに当たり、文部大臣並びに来賓各位の臨席を辱なうし、かく盛大にして光榮ある式場となり得ましたことは、誠に感激に堪えないところであります。

本学の創立は形式的にはいわゆる六、三、三、四の教育制度の全面的改革の一環として実現せられたものでありますが、実質的には三十有八年の歴史を有する小樽経済専門学校を母体として誕生したものに外なりません。この機会に少しく往時を追懐すると共に将来の構想を披瀝して各位の御批判を仰ぎたいと存する次第であります。

顧みますれば小樽高等商業学校が呱呱の声をあげたのは明治四十四年四月でありました。当時わが国は日露戦役の後をうけ国力とみに増進し高等実業教育促進の急務が痛感せられたのでありますが、北方文化開発の要望と相俟って本道有力者、なかんずく小樽市先覚者の熱烈なる提唱の下にわが国第五の高等商業学校としてこの地に設けられたのが本校

であります。

初代校長渡辺竜聖先生は高遠なる理想と該博なる職見とをもって経営劃策に全力を傾注せられ、本校に盤石の基礎を据えられたのであります。すなわち先生は学園の興隆は人材に在りとの信念の下に日夜若手教授の招聘と養成とに心を砕かれ、常に十年、二十年後の学園の担い手を育成しておられたのであります。後日、伴、苔米地、大西、手塚の諸先生が教育界において、学界において華々しき活動をせられたことはこれらの人々自身の天分と努力によることは申すまでもありませんが、渡辺先生の庇護と指導にまつところが甚だ大であります。また先生は当時既に将来におけるわが国の化学工業の発展を予見せられるるばる歐洲より専門の外人講師を招聘せられ、わが国教育界に初めて商品化学の学科を導入せられたのであります。更に先生は学生を遇するに青年紳士の礼をもってせられ今日のいわゆる自治的精神の涵養に努められたのであります。かくて御在任十有余年絶えず理想の実現に邁進せられたのでありますが、大正十一年乞われて再び高等商業学校の創立のため名古屋に転せられるや、伴房次郎先生がその後を継がれたのであります。時あたかもわが国経済界は未曾有の不況時代を迎え学校もまたその渦中に巻き込まれ誠に憂うつな卒業

この意味において、学生諸君は十分なる自覚の下に責任ある行動をとらんことを、日本の現状に照して特に要望する次第であります。

第二に諸君に要望することは、学校はどこまでも学問を中心とする共同体であることを忘れてはならないことでもあります。工場は生産を中心とする共同体であり、宗教宗派は信仰を中心とする共同体である。学校が工場や教会と異なる点すなわち学校の学校たる所以は、実は学問を中心とする点に在る。学校に入って学問を忘れ学問を軽んずるものは、自ら学生の資格を失うものである。資格なきものはまたその待遇も受け得ないのであります。故に学生諸君は諸先生方の学問的努力と併行して、学問的雰囲気には充ち満ちた学園の建設に努めなければなりません。戦時中はあらゆる文化的なるものは戦争の犠牲に供せられていたのでありますが、学校もまた学校たる本質を失い邪道に陥っていたのである。しかし今日は最早戦争は終わったのであります。われわれは一日も早く学校を本来の姿にとり戻さねばならぬ。そしてほんとうに学問研鑽の聖なる道場たらしめなければならぬのであります。

第三に、学生諸君は学友会の活潑なる運営によって、趣味を豊かにし身心を錬磨するこ

とに努めなければならぬ。人間の生活は理屈のみでは律することは出来ないものであります。人間は働くためには寝る時間も休養する時間も必要なのであります。これと同様、学問に精進するためには他面スポーツ、趣味、娯楽に熱中する時間も必要なのであります。学問と学友会の活動とは決して相反するものではなく、否むしろ両者は相俟って効果が揚るのであります。学校においてスポーツの盛んな時は同時に学問熱も旺盛な時であります。この意味において、学友会の活動は学校本来の使命を達する上においても重要な役割を占めるのであります。

ここに述べた第二、第三の要望は要するに良く学び良く遊ぶ学生たれということでもあります。以上私は学生諸君に要望すると共に私自身も実行に努めます。全校一致この目標に向って邁進いたしますならば、やがて平和にして明朗な緑丘学園が建設されるのであります。

『小樽経専緑丘』第一九九号、昭和二十一年六月、第一面。

りと残っている。先生が最後の最後までお心に掛けておられた事柄について、事態はその後もしばらく具体的な進展をみせなかった。

しかし、大野先生が亡くなられてから半年後、緑丘会の執行部は交替し、やがて特別基金委員会も発足して、果実の三分の一は目減りを防ぐため基金に積み、三分の二は大学の研究助成に使うという方針が決定し、それにより若手教官の海外派遣が、五十八年度から実現をみるようになった。

泉下の先生もこれで、ご満足いただけるところまではまだゆかぬとしても、どうやら及第点をつけて下さるのではなからうかと思うのである。

(昭19年卒、小樽商大学長)

大野純一先生の横顔

大 谷 敏 治

緑丘の学生時代、私は、大野さんを存じあげなかった。二年上のクラスにいらしたのだ

が、私は入学当初から、有幌・入舟町の倉庫街の親戚に寄寓して通学していたから、山手の寮生活の上級生は、雲のうえの存在であった。それに、すぐ上のクラスに菅谷重平さんという豪傑がいらして、上級生全体を代表しておられたからでもあった。

母校の教官陣に、大野純一先生の名を知ったのは、大正十四年の夏、緑丘新聞の第一号がでた時であった。大正十年三月、学校を卒業直後、生れてはじめての内地への旅先きで、おくればせのスペイン風邪にかゝり、命はやっととりとめたものゝ、そのまゝ湘南の療養所、つゞいて北海道の田舎の自宅で、うき世とのいっさいのかゝわりを絶った闘病生活のなかに、七月、村瀬玄先生が、こんど学校で、編集部で、キャンパス・ペーパーをだしたからと、『緑丘』第一号を送ってくださいました。むさぼるように読みふけると、大正十一年四月に、大野純一、糸魚川祐三郎という先生、翌十二年に、南亮三郎、室谷賢治郎先生が経済学・商業学担当として着任、大正十一年春、大西猪之介先生の急逝、手塚寿郎・椎名幾三郎先生の海外留学、大熊信行先生は病気がち、ほかにお歴々の先生がたはおられても、とかく淋しい緑丘の教官室が、賑やかになったとある。新任の先生がたはいずれも東京商大のご出身、しかもそのうちお三人は、緑丘の先輩で、母校も、創立十年をけみし

に危険な社会組織でありました。果して指導者の恣意の為に国民は今日の破局に陥れられてしまったのであります。この苦き経験を経た今後の日本は、本来の人間性に基礎を持つ民主主義を封建的な諸制度に代えて運営して行かねばならないのであります。民主主義の下においては最早上からの命令はなくなりました。国民は各個人の手によってその社会的機構を運営して行かねばならないのであります。しかし今日の日本人の多くには未だにこの機構の運営の資格が十分習得されておりません。資格に欠けたるものが徒らに物珍らしげにワイワイと機構をいじくり廻しているのが、日本の現状であります。それはあたかも暗礁に乗り上げた和船の船頭達が、これに代って与えられたディーゼル・エンジン船の中で目新しい機関にアチ、コチと手を触れて、船をグルグル旋回させている様と何等異なるところがないのである。彼等は折角優秀船に乗り移りながら、その運転の術を知らざるために一步も前進出来ずにいるのであります。彼等は先ず落付いて新船の性能を勉強しなければならぬ。先ずその運転の資格を自ら養わねばならない。しかる後に進路に向かって前進せしむべきであります。将来の日本を背負って立つ学生諸君はこの点を良く理解して、デモクラシーの本当の運営者たる資格を自ら養成することに努めなければならぬのであ

ります。資格なしに機関をいじくるならば、再び船は暗礁に乗り上げるでありましょう。それではデモクラシーの運営に必要な資格は何であるか。デモクラシーの根本思想は言うまでもなく自由と平等であります。平等の機会を得て自由に各人が天賦の才能を發揮することを、デモクラシーは要求するのであります。自由は自分の意志以外の何物にも強制されざることであるが、何千万の日本人がおの自分の意志に従って行動したならば、社会の秩序は破れ混乱が生じはしないであろうか、という疑問が生じて来る。しかし眞の自由は決して社会秩序を乱すものではありません。放縦こそ社会を混乱せしめアナルキイの状態をもたらすのであります。それでは自由な行為と放縦な行動とはどこに相違があるであろうか。結局それは各自の自覚の有無にありと確信しています。人は小我に立ってその意志に基づいて行動するならば、万人万様の行動が現われそこに混乱とアナルキイが生じて来る。しかるに自覚によって小我を捨てて大我の立場に立つならば、何千万人の自由なる行動といえども相衝突するがごときことはなく、同一方向に向って社会は秩序整然と進行してゆくのであります。私は小我を捨てて大我に着くの自覚こそ、デモクラシーの運営者に最も必要な資格であると考えるものであります。

まうのが常であります。教室におけるこの毎日の靈感こそ、緑丘における私の生活の光明であったのであります。しばらく学校を離れていた私は昨年九月終戦とともに、この学園生活の光明を胸に描いて母校に帰って参ったのであります。そして私は人生の後半を再び静かな学園生活の中に送り得ることに、限りなき幸福を感じると共に深い感謝の念を抱いていたのであります。

しかるに、去る四月上旬招電により上京し、直接文部大臣より校長の内命に接したのであります。私はその瞬間当惑いたしました。校長就任は、私にとっては同時に描いて帰った憧れの生活の放擲を意味します。そしてそれは誠に苦しいことです。しかも今日の母校には国家の運命を反映して種々解決すべき重大問題が山積しております。その解決には非常の決断が必要であり、決断の実現には、場合によっては職を賭し生活を賭してかからねばなりません、私は暫時返答に窮したのでありますが、人生意気に感ず、母校がこうした難局にあつてこそ母校再建の捨石とならなければならぬ、それが母校への感謝であり報恩であると、私は気付きました。今日まで私は二度応召しております。そして多くの同僚は戦死いたしました。再度私は死を免れたのであります。この免れた命を母校のために捧

げることは容易であります。無駄に捨てなければならなかった命を母校再建のために、文化国家建設のために捧げることは学徒の本望であります。私はこうした決意の下に、大臣に回答をお任せして帰ったのであります。その後五月三十一日発令を見たのであります。

私は躊躇いたしました。しかし今日腹を決めております。大任を引受けた以上、常に當時の決意を新たにし、母校再建のためには今日でも明日でも自ら飛込んで人柱となる覚悟であります。私は校長の職に就きましても学園生活の光明は失いたくありません。常に学生諸君の中に飛込んで、母校の運命を諸君と共に歎き共に喜んで行きます。学生諸君もまた悲しい時嬉しい時私の懐に飛込んで来て戴きたい。

なお就任に際し、特に学生諸君に要望することを三つだけここに述べておきます。まず第一に諸君に要望することは、日本の現状に鑑み民主主義の眞の運営者たる資格を自ら養成することに努めよ、ということであります。

日本人は従来、上からの指図命令によって始めて行動する封建的、ナチス的陋習に囚われ切っております。従つて国民全体の運命は二、三指導者の手に握られているという誠

によって自発的貯蓄の額に相当する投資が可能となろう。しかし、自然利率なるものは一つの抽象的概念であって、これを具体的に捕え得ない。

これを要するに、従来の通貨政策の目標は、準備比率から一般物価の安定に推移し、さらに一般物価主義から中立貨幣へと向かってきたのであった。しかし、それら唯一つを通貨政策の目標とすることはできない。それぞれの欠点がある。現今なお学者の間にはいろいろの提案が行なわれているが、それらについてはまた稿を改めて紹介しよう。ただしここで言い得ることは、いかなる通貨政策の目標も真正直にただそれ一つを固執し通すことは危険であって、その時々々の客観情勢に応じて適宜運営の妙を發揮すべきである。

（北洋相互銀行行内報『行友』第二二二号、昭和三十六年十一月、一四一—一八頁。）

学生諸君に望む

凶らずもこのたび母校校長の命を受けましたので、目下の心境と所懐とを述べて学生諸君への挨拶といたします。

私は大正八年第六回卒業生として本校を卒業し、その後東京高等商業学校専攻部すなわち現在の東京産業大学（昭和二十一年当時、現在は一橋大学）に学び、大正十一年同校卒業と共に本校に奉職いたしましたのであります。顧みれば赴任以来二十四年、それに在学時代の三年を加えて二十七年間、私の人生の大半は緑丘学園の生活でありました。私は緑丘で育まれ緑丘で成長して来たのであります。緑丘は私の産みの親であり育ての親であります。誠に感慨深いものがあります。思えば母校就任当時から常に変わらざりし私の念願は、清新潑刺たる学生諸君と日夜学問的連繫を保ち、終生青年学徒の純情の中にこの身を浸して行きたいということでありました。一步教室に足を踏み入れ、そこに真理の探求に燃ゆるがごとき数多聰明なる瞳を見出すとき、私はいかなる煩悶苦悩もその瞬間雲霧消散してし

るのである。これに反し、彼等によれば、強制的節約に基づく投資は、いったん生産期間の延長をもたらすはするが、後に生産参加者の所得が増加し、強制節約の現象が消滅するならば、高度化した生産機構は再び低下しなければならない。この時に必然的に不況または恐慌が生ずる。したがって、彼等は通貨政策の目標は貨幣の側から生産関係を攪乱しないような貨幣、すなわち中立貨幣の実現にありとし、この中立貨幣は全然貨幣量の増減を行わず、ちょうど自発的貯蓄の額だけ投資を行なうならば実現し得る。このことは言葉を換えていうならば、貸出利率が自然利率に一致するならば実現せられるというのである。

六

中立貨幣の思想は物価主義の通貨政策の弊から脱出せんとして考案せられたものではあるが、この思想にも大きな欠点がある。

その一は彼等のいうように、経済の発展が自発的節約のみに委ねられたとしても、なおそこに景気の変動、経済の不安定が生ずる。中立貨幣主義者によれば、経済の発展が自発

的節約に基づく限り、それは何等の摩擦もなく円滑な成長をもたらされるというのであるが、かかる主張の中には資本蓄積の程度がいかに大であっても、これに應ずる生産の迂回段階が存するということが前提されている。しかし、生産の迂回段階は経済の要求にしたがって任意に延長されるものではなく、そこには技術上の制限がある筈である。故にも、経済関係の要求する迂回段階に比し、技術的に可能な段階が短かいならば、いずれかの生産段階に過剰生産、不況が生ずるのである。したがって、中立貨幣は必ずしも摩擦なしの経済の成長をもたらすものではない。

その二に一步を譲って自発的節約による経済の発展が円滑に行なわれるとしても、私は通貨量を一定に保つことが、必ずしも自発的節約に相当する投資を保証するものではないと考える。何となれば、一国の通貨に対する需要は単に産業的流通のみから発するものではなく、金融的流通からも生ずるのである。しかも後者は一定不変なものではなく、動揺極まりないのである。したがって、通貨総額が一定であるということは、決して産業的流通のための通貨量が一定であるということの意味しないからである。もっとも自然利率を具体的に把握することができ、貸出利率をこれに一致せしめることができるならば、それ

この物価主義の通貨政策の運営を誤った顕著な例は、一九二九年に破局をもたらしたアメリカの通貨政策である。アメリカは一九二五年以後産業の合理化に力を注ぎ、著しい効果をあげたのである。生産の技術的、組織的改善の結果、生産費は著しく低下し、また生産高も当然増加したのである。元来ならば、これに依じて物価水準が下落して始めて経済界の安定は保たれたのであるが、連邦準備銀行は物価主義の通貨政策に囚われていたため信用の膨張を策し、もって下落すべき物価の安定に努めたのである。したがって生産費を切りつめた多くの企業は莫大な利潤を獲得することができたのである。これが安定せる物価の下に生じたかのいわゆる「万年景気」であった。しかしながらこの万年景気の裏では、与件の変動に適應せんとする経済の流れの人為的妨害が行なわれつつあったのである。そしてついにこの政策は不知不識のうちに生産を誤った方向に導き、その結果かの一九二九年の株式恐慌をきっかけとして、全世界を不況に陥れたのである。

〔註〕三年つづきの好況を謳歌しつつある日本経済と当時のアメリカの万年景気の経済とを比較

検討してみるとは誠に興味ある問題ではあるが、ここではこの問題には触れないこととする。

五

そこで一部の学者の間に物価主義の通貨政策を捨てて、通貨政策の目標を他に求めようとするものが現れてきた。それは中立貨幣の思想である。

〔註〕ここにいう中立貨幣とわが国の金融制度調査会等のいわゆる金融政策の中立性とは同じ概念ではない。後者は主として金融機関、特に中央銀行の政策形成の際における個人的利益、党派的利益はもちろん圧力団体および政党政治等からの中立を意味する。

これらの学者によれば、均衡状態の下にある経済を発展に導く内部経済的要因は、消費の節約に基づくところの自発的貯蓄と、通貨の造出に基づくところの強制的節約との二つである。

そして彼等によれば、自発的貯蓄によって投資が行なわれ、生産の迂回期間がこれに依りて延長されるならば、換言すれば、経済が高度化するならば経済は安定的に発展成長す

物主主義と名づけるならば、物主主義にあっては、「物価の騰貴は景気の上昇を、その下落は下降を意味する、したがって物価安定を目標として通貨の管理を行なうならば、経済は常に安定的成長を遂げることが出来る」というのである。

しかしながら、私の考えをもってすれば、この物主主義は常に必ずしも経済の安定的成長を促がすとは断定できない。物価は安定していても経済の本体そのものは不安定なこともあり、また逆に経済の安定のために物価の変動すら認めなければならぬこともある。

経済が安定的な成長をなすためには、経済の各部門間に均衡が保たなければならない。換言すれば、各部門間の生産物価格や所得の間に、大きな格差が生じてはならない。換言すれば、各部門間、特に生産財部門と消費財部門間の価格相互の関係、すなわち相対価格が均衡を保ちつつ成長することが望ましいのである。しかし、物価の安定は必ずしも相対価格の安定を保証するものではない。というのは、物価なるものは諸価格の平均であるから、安定せる物価の下にあっては相対価格の変動はあり得るものであり、したがってまた経済の不安定もあり得るからである。

また逆に、物価の変動は常に必ずしも経済界の攪乱を意味するものではない。場合によ

つては経済の進歩を意味するところの与件の変化に適應するためには、物価の変動が必要である場合すらある。いま技術の進歩その他によって生産要素の能率が増進したために、ある産業部門において生産費が低下し、したがってまた価格が下落したとする。この場合、他の事情に変化がないとすれば、時の経過と共に物価水準は当然下落するであろう。しかし、この際の物価の下落は経済界に何等重大な攪乱を起こすものではない。何となれば、能率増進のあった産業部門では、生産物の価格は下落しても、生産費がこれに應じて切り下げられているのであるから、利潤には何等の関係もない。また他の産業部門についても、生産費および商品価格に何等の変化もないのであるから、その利潤に変化はない。したがってこれら産業間に生産要素の移動を生ぜしめるような誘因は存しない。しかるにもしこの際、通貨を増発してこの物価の下落を防ぎ、その安定を計ったとするならば、かえってそれは経済界に新たな不均衡を招く。かかる処置は生産費低下の他にさらに通貨の増発という二重の刺戟を生産に与えて不当の拡張を招き、その行き過ぎを結果するからである。

から世人の注意を喚起し既に十九世紀の半ば以来実施されてきたのである。しかし通貨政策の目標として掲げたものは決して一定ではなく、その時代時代によって変わっているのである。そこで、私はここに従来最も有力なしかもポピュラーな目標として世人が認めてきたものを三つだけとりあげて検討してみることとしよう。

二

まず最初に初期の通貨政策、すなわち十九世紀の通貨政策がその向うべき目標として選んだものからみることにしよう。当時のそれは、中央銀行にあっては金準備率、民間銀行にあっては支払準備率の擁護ということであった。すなわち、準備率が一定限度を降れば金利を引上げて通貨の縮少を行ない、準備率がその限度を超えれば金利を下げて通貨の増加を計ったのである。そして、その念じたところは銀行または一般金融界の安全と利益ということであった。

この種の通貨政策は、金融界の安全と利益とが同時に一般国民経済の安全と利益に合致する限りは、是認せらるべきであり、ここに目標を据えて通貨の管理を行なうことは誤り

ではなかったのである。ところが、この両者の合致は世界の主要諸国が金本位制を採用し、金が各国の経済力に応じて国際的に配分せられており、かつ国際間の商品および資本の移動が自由であった時代には実現されたのである。しかるに第一次大戦後の世界からはこの二つの条件が奪われてしまったのである。すなわち、一方において戦債賠償は世界の貨幣用金の大部分を米仏二国の手に収めしめ、他方において関税為替管理等の障碍によって通商、資本の自由な国際的移動がはなはだしく制限されるに至ったのである。かかる情勢の下で準備率を唯一の目標として通貨政策を営むことは、金融資本の利益のために生産資本を犠牲にするという結果を招くのであって、この世界情勢の変化に応じて通貨政策もまたその目標を変更しなければならなくなったのである。

三

それでは、次に通貨政策はいかなる具体的目標をもって運用せられるようになったであろうか。その目標として大部分の論者によって支持せられ、また事実諸国がそれに向かつて進みつつあるものは、物価水準の安定ということである。いま仮りにこの通貨政策を物

Bd. 44, S. 671. Die Positionen der und die Kreditsysteme. (Wupp. V. Statistik)

(19) J. M. Keynes, *A Treatise on Money*, 1930, Vol. I, p. 133-132.

(20) J. M. Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, p. 292.

塩野谷九十九氏訳三五三頁。

(小樽商科大学『商学討究』復刊第一二巻一・二号—創立五十周年記念論文集、昭和三十六年八月、三一—一五頁。)

- (1) F. H. Fisher, *The Purchasing Power of Money*, 1933, pp. 20-41.
- (2) J. M. Keynes, *A Treatise on Money*, Vol. I, pp. 20-23.
- (3) A. Sauerhoff, *Die Quantitätstheorie der Währung für V. Wagner*, S. 343.
- (4) 塩野谷九十九氏訳『貨幣論』、中央経済社、1947年。
- (5) K. Knauer, *Die Quantitätstheorie der Währung*, S. 13.
- (6) K. Marx, *Das Kapital*, herausg. von F. Engels, I Bd., 1867, S. 84.
- (7) Diehl und Mosler, *Wohn Geld*, I, S. 1.
- (8) Jan St. Feinzeck, *Money, Credit and Prices*, London, 1933, p. 34, 1934, S. 1.
- (9) A. Michels, *Die Quantitätstheorie als Grundlage der Konjunkturalrechnung*.
- (10) K. Bieder, *Die Geld- und Kapitalmarkt*, S. 164.
- (11) Ernst Wicksell, *Allgemeine Geldlehre*, 1883, S. 130.

この通貨政策の目標について

経済の世界では、二つの数量すなわち財貨の数量と通貨の数量とが互いに相対し、あるいは平行して流動している。その中財貨の量は概して自然的、技術的条件によって限定せられてゐる。たとえば、米の産額や数量は毎年ほぼ何千万石というように耕作面積や農業技術によって限られてゐるのであって、短期間にこれを二倍三倍に増すということはできない。ところが、通貨にあってはこれと趣を異にする。厳格な金本位時代は別として、いわゆる預金通貨が通貨として重要な役割を営むようになってからは、通貨の数量は全体としての金融機関、特に銀行の方針によってある程度任意に増減することができる。そこで、通貨量は何を目標として決定しかつ管理統制すべきであるか、ということとは實際界においても学界においても重要な問題なのである。したがって、計画的な通貨政策は比較的古く

とも一致する。彼はいう、「経済学者達は彼らが価値の理論と呼ばれるものを取扱っている場合には、諸価格は需要供給の状況によって支配されるものであって、特に、限界費用の変化と短期供給の弾力性が支配的な役割を演ずる、と教えるのを常として来た。しかし彼らが第二巻とかあるいは別個の著作とかにおける貨幣及び諸価格の理論に移ると、われわれはもはやこれらの素朴なしかし平明な概念を聞かず、別の世界に引き入れられる。ここでは、諸価格は貨幣数量により、所得速度により、取引量に対比するものとしての流通速度により、退蔵により、強制貯蓄により、インフレーションとデフレーションとにより、その他等々によって支配されるものとされ……以前の観念に関連せしめようとする企ては、殆どあるいは全くなされて⁽²⁰⁾いない」と。そこで彼は『一般理論』において両者の総合を企てたのであった。しかし、それは果して成功したであろうか、最初に述べたように、この問題については別の機会に検討することとしよう。

- (1) J. M. Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936, pp. 292—375, 塩野谷九十九氏訳三五五—三七五頁参照。

- (2) Ernst Wagemann, *Allgemeine Geldlehre*, 1923, S. 130.
(3) K. Elster, *Seele des Geldes*, 1923, S. 164.
(4) A. Michaelis, *Die Quantitätstheorie als Grundlage der Konjunkturforschung*, 1929, S. 3.
(5) Jan St. Levinski, *Money, Credit and Prices*, London, 1929, p. 74.
(6) Diehl und Mombert, *Vom Geld*, I, S. 7.
(7) K. Marx, *Das Kapital*, herausg. von F. Engels, I Bd., 1922, S. 84.
(8) K. Kirmaier, *Die Quantitätstheorie*, Jena, 1922, S. 12.
(9) 高田保馬『経済学新講第三巻』貨幣の理論』二一九頁。
(10) A. Spiethoff, *Die Quantitätstheorie*, festgaben für A. Wagner, S. 249.
(11) J. M. Keynes, *A Tract on Monetary Reform*, pp. 80—83.
(12) I. Fisher, *The Purchasing Power of Money*, 1922, pp. 56—71.
(13) A. Marshall, *Money, Credit and Commerce*, p. 43.
(14) A. C. Pigou, *Essays in Applied Economics*, pp. 177—178.
(15) I. Fisher, *op. cit.*, p. 14.
(16) K. Wicksell, *Gedzins und Güterpreise*, 1898, S. 46.
(17) J. S. Mill, *Principle of Political Economy*, 1921, pp. 494—495
(18) J. Schumpeter, "Das Sozialprodukt und die Rechenpfennige", *Arch. f. Sozialw.*,

われは一定時間内に貨幣によって遂行された購買の数を時間それ自身と比較すべきではなく、その時間内に売却された財と比較すべきである⁽¹⁷⁾と。そして彼は、かく時間概念を除いて規定した流通速度を *The rapidity of circulation* の代りに *The efficiency of money* と名づけるのである。しかし、この種の流通速度の概念は、他の目的に対しては如何に有用であっても、貨幣数量説の中ではこれを採用することは出来ぬはずである。何となれば、価値水準の変動要因を探求しようとするところでは、*Mill* の定義は *Tautologie* を構成するからである。一定の商品の売買を仲介するために一定の貨幣が何回手を替えるやは、あらかじめ該商品の価格が与えられていなければならぬ。従って、それは貨幣の流通速度によって発見しようとするものを既に前提しているのである。故に、*Mill* の意味における *Die Effizienztheorie* を数量説は採ることが出来ない。

しかるに、*J. Schumpeter* は *Mill* 同様貨幣の流通速度を能率と名づけはするが、その概念の内容は趣を異にする。彼にあっては、「同一貨幣単位が、経済過程の完了する一期間において、消費の領域から再び消費の領域へ循環していくその度数をあらわす事実、換言すれば、貨幣所得の要素となりかくの如きものとして支出せられる度数をあらわす事実」⁽¹⁸⁾

をもって流通速度と解し、その平均の大きさを彼の基礎方程式において u をもって示したのである。従って、ここでは *Mill* の場合と異なり時間概念が不可欠である。この解釈は *Mill* の能率に放たれた批判から免れると同時に、*Die Händewechseltheorie* におけるような財の流通速度の付随物を含んでいないのである。人々はこの種の流通速度を称して *the income-velocity of monetary circulation* という。数量説における流通速度の概念はこの意味に解して始めて価格水準決定の一要因として問題とすることが出来る。*Keynes* がその『貨幣論』で指摘したように、われわれの最も関心をひく貨幣の購買力は、*The power of money to buy the goods and services on the purchase of which for purposes of consumption a given community of individuals expend their money income* である⁽¹⁹⁾。経済学上最も根本的な価値水準は消費財のそれである限り、数量説における流通速度は当然 *the income-velocity of monetary circulation* でなければならぬ。

以上私は一つの学説としての貨幣数量説の概念を整理し、そこで重要な地位を占めている流通速度の概念にも触れたのであるが、数量説をかく解することは *Keynes* の数量説観

教官宿舍と土地の登記について、所有者の名義がなくなってしまふということである。苦心の策として、緑丘会の名前を借りることになった。この宿舍に住む教官は、他の官舎とほぼ同等の家賃を支払うものとし、それを固定資産税の支払いと家屋の修理に当てた。こうした事務はすべて大学でおこない、緑丘会を全く経由せず、したがって、緑丘会は登記における名義上の所有者にすぎなかった。

昭和五十年五月、中田理事長と藤原副理事長が、永井文部大臣を訪れ、前記の最上町宿舍にかかわる土地および家屋を、国で買いあげてほしいと要望し、大臣は早速事務局に検討させ善処しようとして約束された。これはまさに、異例の快挙であった。ただし大臣が善処を約束したからといって、すべてが円滑に処理されるとはかぎらない。異例のことだけに、その事務処理は文部省にとっても大学にとっても、決して容易でなかった。実方学長と伊藤学長の、そして小村事務局長の大変な努力があったことを、私は記憶している。

大臣の約束をとりつけた前者の功績は、しばしば声高に喧伝されているが、それを成就させるための後者の苦勞は、ほとんど語られていない。事実の正確な認識と評価のためにも、あえてそれを付言しておきたい。

このようにして生まれた八千六万五千三百円は、昭和五十三年度の緑丘会一般会計収支計算に、土地建物売却収入として計上され、五十四年度では前期繰越収支差額の中に含まれている。ひところ、それが緑丘会館に投入されそうな気配もあったという。大野先生は、「緑丘会館は大学の研究・教育のための施設ではないのだから、拡充資金本来の目的に反する」と、強く反対された。

会館に使われることは避けえたが、それは緑丘会の一般会計収支計算において、いわば繰越収支差額の中に埋没してしまい、元金も利息も、一見してそれと確認できない状態のまま引き継がれてきた。五十六年三月の理事会でようやく、西野嘉一郎氏の提言によりこれを特別基金会計として一般会計から分離し、その運用について審議すべき基金委員会を設けることが決定された。しかし基金委員会はいっこうに設置されず、大野先生のご心配は、日に日につのるばかりであった。

あの日も、先生は繰り返し繰り返し、「それはもともと緑丘会のものではない」、「大学の研究施設の充実と学問水準の向上のために使うのが、資金本来の目的にかなう」とおっしゃった。はからずも遺言となってしまったその一言一言が、今も私の耳にはつき

さて、本題に戻って、流通速度なるものの意義を検討することとしよう。

元来、貨幣の流通速度なる概念は数量説において最も論難の多いところのものである。すなわち、貨幣の流通速度なるものは貨幣の数量と相並んで貨幣価値すなわちその購買力の大きさを決定する要素と見ることが出来るや否や、また貨幣の流通速度は商品の流通速度から独立した貨幣価値決定要因たるや否や等に関しては何くの説がある。しかし、われわれの考えをもってすれば、かかる異論の存在する所以は主としてその概念に盛られた内容の多様性にある。

貨幣の流通速度に関する最も一般的な解釈は Die Händewechseltheorie のそれである。Fisher, Wicksell はその代表的なものである。ここでは流通速度を The average number of times a year money is exchanged for goods または Die Anzahl male, welche die vorhandenen Geldstücke im Wege des Kaufs und Verkaufs (also nicht etwa im Wege des Darlehens) während der gewählten Zeiteinheit, z. B. eines Jahres durchschnittlich die Hände wechseln と解する。⁽²⁵⁾しかし、このように流通速度を解釈するならば、それをもって直ちに独立の価値水準決定要因と見ることが出来ない、というのは、貨幣の

Händewechsel のうちには貨幣自身の流通速度とみるべきでなく、むしろ財の流通速度の反映と見るべきものが含まれているからである。例えば一企業によって一貫的に経営せられていた財の生産販売が技術上または経済上の理由から数個の独立企業によって経営せられることになったとするならば、この説によれば、貨幣の流通速度は増加しその結果貨幣の購買力の大きさないし価値水準に変動を来たさねばならぬはずである。しかし、事実上はこの場合の貨幣の流通速度の増加は、Fisher の記号をかりてすれば、Tの増加に伴って生じたものであって、貨幣の購買力価値水準に対しては何らの意義をも有しないのである。故に、数量説における貨幣価値ないし価格水準決定要因たるためには、貨幣の流通速度の概念からその中に混在している財の流通速度を分離してしまわなければならない。

そこで他方の論者はいわゆる Die Effizienztheorie を主張する。例えば、J. S. Mill の考えはこれに属する。彼はいう、「それ（貨幣の流通速度——大野註）をもって一定時間内になされた各貨幣片による購買の数を意味するものと解すべきではない……時間は考慮すべきではない……肝要なことは同一貨幣が一定時間内に何回手を替えるかということではなく、それが一定量の取引を遂行するために何回手を替えるかということである。われ

おける「社会の人々が保持する即時の購買力の大きさの変化」なるものとは、同一現象を異なる側面から捉えたものである。この点に関し Pigou は自[1]の公式と Fisher の公式とを比較して次のように述べている。すなわち両者の関係は「貨幣の存在量が厳密に確定している社会に business confidence の衰微が生じた場合を想像して見るならば、実際に表わすことが出来る。Fisher の分析によれば最早将来に楽観的な空気を感ぜないために人々は法貨に対する要求権を退蔵することを選ぶといわなければならぬ。この退蔵は流通速度の減退を意味し、流通速度の減退の結果は貨幣に対する要求権に数量が不変なるにもかかわらず物価が下落する。同様の分析をより実際的な事情に拡張するならば、次のようにいふべきであろう、すなわち、法貨に対する要求権の数量もまた減少する場合でさえ退蔵の傾向は著しいであろう、従って、不景気の時期には物価は流通場裡の法貨に対する要求権の数量の割合以上に下落するであろう、と。ところが私の分析によれば、次のようにいふべきである。人々は確信が少ないので彼らの資源より大なる割合を法貨に対する要求権の形態で保持しようとする、このことは何人もそれらの要求権を得るためにより多くの品物を提供せんと欲するということを意味する、それはまた法貨に対する要求権のものと量

が新たな物価水準で人々が法貨に対する要求権の形態で保持しようとするところの——彼らの real resources の新比率を代表するに至るまで物価は下落する、下落し続ける、ということの意味する。もしも同時に法貨に対する要求権の実際の数量が減少するならば、物価はそれとの比例以上に下落しなければならぬ。何となれば、もしも物価が比例的に下落するならば、人々が法貨に対する要求権の形態で保持する彼らの資源の割合は以前と同じ割合であつて大なる割合ではないということになるであろうから。かくの如く、私の公式と数量説の公式との間には何等の矛盾もないということが明らかである¹⁴⁾と。故にいわゆる流通速度とケンブリッジ数量説の社会の富または所得を意味するところの real resources に対する即時の購買力の比率なるものは、同一現象を異なる角度から問題にしたものである。ただし、前者は客観的数の世界から流通速度なる概念を持ち来たって機械的に価格水準を説明しよう試みるのに対し、後者は同じ問題の解明のために主観的基礎を啓示し、人間意志との関連のもとに価格水準の現象をもたらさんと努力しつつあるのである。後者の接近の方法は Keynes の『貨幣論』の基本方程式に発展し、さらに『一般理論』への萌芽をなしているのである。

る。すなわち、貨幣数量説とは貨幣の数量とその購買力との間に第三の価値を介在せしめずして、両者の間に因果の連鎖を主張する貨幣理論である、と。かくの如く、貨幣数量説は貨幣の購買力または価格水準の説明に当たり一般経済価値論を追放せんとするところに特徴があるのであって、数量説における因果関係の特殊性は実にここに存する。

ただし、ここに誤解をさけるために、一言付け加えよう。それは、ここに規定した貨幣数量説は決して Kirmaier のいう Die mechanische Quantitätstheorie に限定するものではないということである。後者は貨幣と物価（購買力）との間にあらゆる意味の中間項を排撃せんとするのに対し、前者は中間項として第三の価値のみを排するのである。従って、貨幣数量と物価との因果の鎖の中に人間意志をもたらそうと、流通速度を挿入しようと、あるいはまた消費性向、流動性選好、利子率等々を付加しようと一向差支えないのである。

二 貨幣の流通速度の意義

多くの貨幣数量説は価格水準決定の要因として、貨幣ないし通貨の他に、流通速度

(The velocity of circulation) を並列するのが常である。I. Fisher の交換方程式における $V_1 V_2 V_3$ 、G. Cassel の金数量説における $V_1 V_2 V_3$ 、R. G. Hawtley における circuit velocity of money, J. Schumpeter の所得数量説における n 等々がそれである。

もっとも、ケンブリッジ数量説にあっては、「社会の人々が通貨の形態で保持しようとするところの一定量の real resources」をその理論の礎石とし、この大きさを通貨総量と等置することによって貨幣単位の価値すなわち価格水準を導き出そうとする。従って、取引数量説や所得説が観察の視野を一定期間に拡げているのに対し、この説はこれを一時点に集中している。それ故に一方は流通速度を持ち来たるのに対し、他方はこれを無視しているように思われる。

しかしながら、両者の立場を一步突き込んで検するならば、いずれも同一の現象を問題としていることを知るのである。Marshall も言ったように「考慮をめぐらす時は、貨幣の流通速度の変化なるものは、それ自身、一国の住民が自ら保持するのを有利なりと考へるところの即時の購買力の額の変化に付随して生ずるものであるということが、明らかとなるであろう。」⁽¹³⁾従って前述の諸数量説における流通速度なる概念とケンブリッジ数量説に

はいいえない。われわれはその特殊性をもつと本質的内面的なものに求めなければならぬ。

そもそも価格水準の逆数を意味する貨幣の価値ないし購買力を説明しようとする学説は古来無数に存在したのであるが、それらはその根本的立場から見ても二大別することができ、その一は貨幣に購買力以外に内的または主観的価値を認め、個々の貨幣に一般経済価値論を適用することによって、後者から前者を誘導しようとするものである。この際、客観的価値論の援用者は次のように考える。貨幣の交換価値または購買力（価格水準の逆数）は商品の内的価値と貨幣の内的価値とが比較対立せしめられることによって成立する。換言すれば、貨幣は商品同様交換以前に独立、絶対のそれ自身の内的価値を有し、交換過程に入るに及んで商品のそれと相互に比較せられて、ここに交換価値すなわち購買力、物価現象が生ずる、と。また主観的価値論を適用しようとする者はいう。貨幣の客観的交換価値は一般物価の逆数である。しかるに、主観的貨幣価値は個々の価格を規定し、さらにこの個々の価格は一般物価を規定する、故に貨幣の客観的交換価値は間接にその主観的価値によって決定せられる、と。それ故に、両説は共に、購買力すなわち貨幣価値の成立以前

にあるいは内的あるいは主観的価値を貨幣に認め後者によって前者も説かんとするものである。しかも、彼らはこの内的または主観的価値に対するその数量の意味を無視するものではないのであるから、この立場における貨幣数量と物価との関係を見れば、貨幣数量↓内的または主観的価値↓交換価値（物価現象）となる。すなわち、貨幣数量とその客観的交換価値との因果関係のうちに中間項として内的または主観的価値を挿入するのである。従って、ここでは貨幣数量と価格水準との因果関係は間接的である。

しかるに、購買力の意味における貨幣価値説明の第二群の学者はその根本態度において前者と異なる。第二群の学者は貨幣にただ一つの価値すなわち購買力のみを認め、その大きさの決定要因を貨幣と商品との数量関係のうちに求めんとするのである。従って、ここでは貨幣数量と貨幣価値との間には第三の価値を介在せしめない。貨幣数量↓交換価値または物価現象となって表われる。それ故に、ここでは交換以前に個々の貨幣に価値を認めず、従って上述の意味の一般経済価値論の適用は行なわれない。しかして、このような立場に在る価格水準の説明の理論こそ本来の意味における貨幣数量説であると私は解する。以上の所論の後われわれは今や貨幣数量説なる学説を次のように規定することができ

すればそのものの交換能力も一割だけ減少するという限界利用学説上の論拠もないからである。しかし、因果関係における比例性の導入は、他面、数量説の概念規定に貴い代価を要求する。もしも、われわれにして「因果関係についての個々の解釈の特殊性」をその比例性に求めるならば、一般に数量説の代表的なものと認められている諸学説がその概念範囲から逸脱してしまう。ケンブリッジ数量説の代表作『貨幣改革論』における Keynes の所論を見るに、彼はその方程式 $n = p(k + rk)$ における n すなわち貨幣量と p すなわち価格水準との因果関係について次のように述べている。「 n はこれらの数量に関しては『独立変数』であるという仮定の下でしばしば解説せられて来た。それ故に、 n を任意に倍加してもそれは k 、 r 、 k' に影響しないというのであるから、その結果として以前の二倍になるよう p を騰貴せしめなければならなかった。数量説はしばしばそのようにまたはこれに類似の形式で述べられるのである。『結局においては』それは多分真理であろう。——しかしながら、この『結局』なるものが実際の事情については誤解を生じやすいものである。『結局においては』われわれは皆死亡する。もし時化の最中嵐が過ぎてしまえば浪は再び静まるだろうというに過ぎない如きものであるならば、経済学者の任務たるや余りに

容易でありかつ無用であるといわねばならぬ。…… n の価値の変化の前後途中……を通じて k 、 k' 、 r に多少の反動があるであろう、その結果 p の値の変化は、少なくとも一時的に、また恐らく永久に……厳密に n の変化に比例しないであろう。⁽¹¹⁾ 故に、比例性を求める限りケンブリッジ数量説は貨幣数量説から除外される。否さらに比例性の語によって恐らく何人も想起するであろうところの I. Fisher にあってすら次の言があるのである。⁽¹²⁾

If the quantity of money were suddenly doubled, the effect of the change would not be the same at first as later. The ultimate effect is,……to double prices; but before this happens, the prices oscillate up and down……we shall consider the temporary effects during the period of transition separately from the permanent or ultimate effects……. These permanent or ultimate effects follow after a new equilibrium may be said ever to be established. Periods of transition are the rule and those of equilibrium the exception.

故に、数量説における因果関係の特殊性を比例性に求めようとすることは、数量説の単なる形式外見に囚われた誤った見解であって数量説的因果関係の本質を描き出したものと

すなわち、貨幣数量の増減と価格水準の高低との間に何等かの意味において、一方的な因果関係を主張する学説はすべて数量説である、と。Kirmaier は次のようにいつている。「もしもこの因果関係についての個々の解釈の特殊性を無視するならば、数量説なる名称は一つの集合概念を意味するものであって、そのもとにわれわれは、貨幣の数量といわゆる貨幣価値、換言すれば、価格水準との間の関係について、貨幣の増加が一般に物価を騰貴せしめ、その減少が物価を一般に下落せしめる——と主張するが如き一切の理論を理解しなければならぬ」と。さて、それではわれわれは、この概念規定で満足し得るであろうか。貨幣の数量とその価値との間に、何等かの意味において一方的因果関係を認める学説を「この因果関係についての個々の解釈の特殊性を無視」して数量説のもとに包括して誤りないであろうか。一方的因果関係だけでは不十分である。数量説をかく解するならば、貨幣価値や価格水準の説明に当たり、通常貨幣数量説と相対立するものと見られる貨幣商品学説たる金属主義的生産費学説や貨幣限界利用学説までも、そのもとに解しなければならぬ結果となる。というのは、高田保馬博士の指摘せられるように、如何なる貨幣生産費説といえども「供給増加に伴う価値の下落を前提とせずしては構成せられ難く、また限界利

用説はこの関係を是認しながら、進んでそれを限界効用の概念によって説明せんがための理論を組立てる」⁽⁹⁾からである。それ故に、ただ漠然と一方的因果関係の要素だけを掲げてはならないのであって、更に進んで「この因果関係についての個々の解釈の特殊性」に着眼すべきである。

この点に関し一部の学者は比例性の要素を加えることによって、数量説の特性を見出そうとする。比例的因果関係の存在をもって、数量説の特徴と見る。たとえば A. Spiethoff は、「数量説は、貨幣の価値は他の事情にして変化せざる限り、その流通量に依存するとなすものである。すなわち、流通量が増加すればその価値は下落し、流通量が減少すれば価値は上騰する、しかも流通量の増減と価値の変動とは同一割合を保ち、物価の高低はその当時の貨幣事情の下に一割増加すれば、貨幣価値は丁度それだけ低落し、一般物価は同一の割合で騰貴する」⁽¹⁰⁾と称する。数量説をかくの如きものとして把握するならば、ここにはじめてわれわれは、前述の意味の生産費説や限界利用説からそれを分離せしめることができるであろう。何となれば、生産費の低下による金属貨幣の一割の増加は物価の一割の上騰をもたらすであろうと主張し得る根拠は生産費説自身にはなく、また供給が一割増加

を見出すかは、一つに読者の判断に委ねなければならなかったのである⁽³⁾。また Alfred Michaelis も、『数量説』は何等確定した概念ではない、数量説論者の数ほど数量説は存在する⁽⁴⁾』と述べている。更に、中には Jan St. Levinski のように、「果して貨幣数量説なるものはあるであろうか⁽⁵⁾」と極言するものさえある。

このように、如何なる学説が数量説であるかについては学者の解釈は区々であるが、これ等多様の解釈の中にも自ずから広狭数群の区別がある。

例えば Diehl 並びに Mombert は最も広く解釈し、貨幣量の増減と価格水準すなわち貨幣価値との間に密接な関係の存在を主張する学説をすべて貨幣数量説のもとに包含しようとする。曰く、「人々は数量説なる名称のもとに貨幣の数量と商品価格の高さとの間に密接な関係を主張するところの学説を把握する」と。しかし、貨幣の数量と貨幣価値（価格水準の逆数）との間に、漠然とただ密接な関係を認める学説をもって数量説の本質と解するならば殆どすべての貨幣価値学説や価格水準の理論は、数量説なりという矛盾に陥る、何となれば、古来貨幣価値、水準を取り扱った学説で何等かの意味で、両者の関連を認めなかったものは一つもないといって差支えないから。また、数量説をかくの如くに解する

ならば数量説をもって、「馬鹿馬鹿しい仮説に根底を有する」一つの Illusion であるとして、⁽⁷⁾猛烈に排撃した K. Marx の説さえ、その中に包含せしめなければならぬことになる。というのは、彼ですら「諸商品の価格総額」を「等しき名目の貨幣片の流通速度」で割った商は「流通手段として作用する貨幣の量」に等しいとなし、 $\frac{\text{諸商品の価格総額}}{\text{流通速度}} = \text{流通手段}$ という方程式の成立を認め、 $\frac{\text{流通手段}}{\text{流通速度}} = \text{流通手段}$ という方程式の成立を認めているからである。すなわち彼は貨幣数量の諸商品の価格総額従って価格水準との間に密接な関係を見出すのであるから、Diehl-Mombert の概念規定によれば当然 Marx 説をも数量説に数えなければならぬ。しかし、それは言うまでもなく間違いである。元来数量説は貨幣の数量とその価値との間に単に密接な関係を認める許りでなく、実に一方的因果関係を認めようとするところに、その特徴がある。貨幣側を原因と見、価格水準ないし貨幣価値を結果と見るところに特色がある。従って、諸商品の価格総額を原因、貨幣量を結果と主張する Marx 説や、方程式における財貨側を原因としそこから貨幣ないし通貨の需要量を導き出そうとする Banking School の立論は数量説ではあり得ない。ここにおいて、一方の論者はこの点を考慮して数量説を次のように規定しようとする。

貨幣数量説と流通速度の概念について

36

Keynes の『一般理論』が学界に送られてから、久しい間有力な学説として金融学界を支配していた貨幣数量説は金融経済理論の一隅に押しやられて、多くの学者から興味を失うにいたつたのであるが、それにもかかわらず、実際の経済界にあっては今日なお最もポピュラーな経済学上の概念として通用し、かつ諸々の国における中央銀行はその政策の主なる目標の一つとして通貨価値の安定を掲げ、しかもその実現の手段として貨幣数量説の理論を適用しようとするものが少なくないのである。それ許りでなく、Keynes 自身といえども貨幣数量説を無価値なものとして捨て去つたのではなく、厳しくあるが一定条件のもとでは、それは妥当することを認めている。すなわち彼は正統派の理論一般に対するように、貨幣数量説は特殊の場合にのみ妥当するものと考えていたのである。⁽¹⁾これらの点について探究を行なうことは学問的に興味あることではあるが、それは他の機会に譲り、ここでは、先ず貨幣数量説とは如何なる学説を意味するものか、またそこで従来重要な要素

の一つであつた貨幣の流通速度とは如何に解すべきか、の二つの問題についてのみ考えて見ることにしよう。

一 貨幣数量説とは如何なる学説か

Wagemann によれば、数量説という名称を学界に最初に導入したものは Adolf Wagner である。⁽²⁾ 彼は *Die Geld-und Kredittheorie der Peelschen Bankakte, 1862* のなかで Ricardo の貨幣価値理論にこの名称を与えたのであつた。

その後、学界にも実社会にも貨幣数量説なる名称は一般に普及するようになったのであるが、学問上においてはこの概念ほど規定が曖昧なものには他に多くはないであろう。それ故に Karl Elster は「一体数量説とは何であるか」という問題を自ら提起して、これに次のように答えている、曰く「それは一個の名称である、しかしながら、それはその保持者を個別化するというあらゆる名称の目的を実に不十分に果すところの名称である。それ故に Joseph Schumpeter のような当該学説史の権威さえその概念の明細な規定を断念し、彼自らの説いた文章の中から『数量説の否定』を見出そうとするか——それともまた擁護

37

言うまでもなく金銀兩本位は金貨と銀貨に自由鑄造を認め両貨の間の比価を法定するのであるが、もしも一国のみがこの制度を採るならば、世界市場における金銀比価の変動毎にグレッシャムの法則が行なわれ、騰貴した金属が国外に流出して結局兩本位制そのものが自壊作用を営む恐れがある。そこで兩本位が成功するが為には世界の有力な諸国が共同してこれを採用しなければならぬ。しかるに、この國際兩本位制は実施上において誠に至難な問題に突当たる、すなわち金銀比価の決定がそれである。金産国と銀産国、金保有国と銀保有国とは互いにこの比価決定に際して利害が相友するのであるが、二、三国間の一時的為替協定さえ困難な現状において、この至難な比率の協定が多数国間に実現されるということは考え得ない事に属する。故に金銀兩本位制もまた実現の望みはない。

一一 結論：結局は金本位制へ復帰

以上観て来た様に今日最も有力な代案にして実現が覚束ないものとするれば、将来に残された通貨制度はただ金本位あるのみと結論しなければならぬ。ただし来たる可き金本位は決して過去のものと同一ではあり得ない。それは馬鹿正直に金を主と仰ぐ通貨制度ではな

く、多分に管理的色彩を持った新たな金本位であろう。(その理由等の詳細については東洋経済新報社発行『通貨制度研究会報告』第一輯内における拙稿を参照されたい)

これを要するに、今後世界幣制の上に来たるものは先ず金本位ブロックの崩壊であり、次は世界幣制の混乱為替戦争の激化であり、この動乱を経た後に初めて新たな國際的金本位制が樹立せられるものである。故に逆説的な表現ではあるが、金本位ブロックの崩壊が早ければ早い程金本位の復帰が早められると私は考えるものである。

〔小樽高商緑丘新聞〕第八八号、昭和十年六月、第一面、および同第八九号、同年七月、第一面。

それでは、その時に各国が採るであろうところの新たな国際貨幣制度は如何なるものであろうか。

この問いに対しては、与えられたる情勢の下において金本位に代る貨幣制度が果して実現され得る可能性ありや否や、を考へることによって答へることにしよう。

九 金本位代案の検討——管理通貨制批判——

従来金本位の代案として提唱されたもののうち、労働貨幣やテクノクラシーの幻想はさておいて真面目に考慮に値するものは二つある。その一は純然たる管理通貨制であり、その二は金銀両本位制である。

ここに純然たる管理通貨制というのは全く金属から解放された貨幣制度である。従つてなお金に重要な役割を認めるところのケインズのいわゆる管理通貨の如きは、一種の修正されたる金本位制としてそれから除外するのである。

例えばリーフマンやベンディクセン等によって提唱せられる貨幣制度がこれに属する。この種の論者によれば、貨幣はそれ自身価値ある財から構成せられる必要はない、それに

もかかわらず金本位の下で貨幣を金に結び付けておくことは為替相場安定の為に国内物価を犠牲に供するものである。故に貨幣は宣しく金の絆から解いて人為的統制の下に立たしめなければならぬというのである。

勿論吾々といえども理論上一枚の紙片が良く貨幣たるはたらきをなし得ることを否定するものではない、が本位政策上紙幣が果してヨリ良き貨幣たりや否やは大なる疑問とする者である。成る程国内物価は貨幣を金の束縛から離しても、適當なる統制によつてある程度まで指導し安定せしめることは出来るであらう。しかしながら世界経済がますます発展せんとする将来において各国の幣制に共通なる比較の基準を欠く純粹管理通貨が永続的に存続し得るものとは考へることが出来ない。

一〇 金銀両本位制批判

それでは第二の金銀両本位はどうか。この問題は既に前世紀において討論済み実験済みのものであるが、最近再び金不足銀価下落の対策として提案されつつあるが為に、簡単に触れておく必要がある。

煩惱、お二人のお孫さんも目に入れても痛くないほど可愛がっていらした。先ず勢津ちゃんもが昨年の四月十日、続いて志津子ちゃんが今年の六月五日、嫁がれた。私はそのつどお祝いのスピーチをさせて頂いたが、白無垢の幸せそうな晴れ姿をみるにつけこの日を楽しみに待っておられた先生のお氣持が偲ばれてならなかった。私はご挨拶の中で「おじいさまの大野純一先生は小樽商科大学の初代学長でありまして……」とさりげなく言葉を選びながら先生のお名前をご披露することによって先生の思いが届くことを願った。

これが今なお深い私の先生への追慕の氣持の一瞬であった。

(昭29年卒、日比谷ビルディング(株)取締役)

小樽商大拡充資金のこと

長谷部 亮 一

振り返ってみると、公私にわたり実にさまざまなことがあり、まことに不思議な縁と

いうほかはないが、大野先生の思い出をとりまとめるためには、私にとってもう少し時間が必要と思われる。したがってここでは、『さっぽろ緑丘』誌に発表した一文を、補足し再掲させていただくことにしたい。

大野先生から最後の電話を頂戴したのは、亡くなられる四日か五日前のことであるが、先生は、小樽商大拡充資金について繰り返し述べられ、氣掛かりでならないというご様子であった。

昭和二十四年の秋、大学昇格後間もない母校を充実強化するため、大学関係者と松川嘉太郎氏など地元有志が發起人となり、拡充期成会を結成し、目標金額二千五百万円の募金運動が企画された。当時はまだ、緑丘会が全国的にまとまっていなかったため、大野学長を先頭に大学の教官が各地の支部を訪れ、協力を要請して廻ったのである。募金そのものは目標額に達しえなかったが、戦時中欠けていた外国図書を購入整備したり、最上町に教官宿舎を建設するなど、大学の内容充実に大きな役割を果たして、拡充期成会を解散する運びとなった。

ところが、期成会の解散にあたり、ひとつの厄介な問題が発生した。それは、最上町の

理由を述べることにしよう。

「仏国の財政は一九三二年まではとも角収支の均衡を保つことが出来たが、一九三三年以後は——矢継ぎ早の増税や経費の緊縮を強行しているにもかかわらず——いわゆる赤字財政に転落し、昨年度辺りは四十億フランからの赤字が現われ、今年度もまたそれを降ることはないであろうと言われている。もしもこういう状態が続くならば、いかに国民や政府当局が忌避しても財政インフレは不可避となって来るであろう。しかるに財政インフレを実行するが為には金本位制の停止が必要である。」

また一九一三年の全物価を基準一〇〇とするならば、一九三四年の十月における仏国の指数は九七であるが、英国は七七、アメリカは六七である。従って仏国商品の国際価格は非常に高いのであって、到底世界市場において英米と太刀打ちをすることは出来ない。

この事實はまたハッキリとその貿易にも反映して、クォーターシステムや為替附加関税の設定にもかかわらず輸出は年々減少している。例えば一九三〇年には輸入金額に対する輸出金額の割合は八割以上であったが、昨年度は六割位にまで減少している。最後に世界各国の景気指数を見ても、一九三一年すなわち英国の金本位停止の年までは各国はほぼ同

様の歩調をとって来たのであるが、その後には通貨の下落国と金本位国との間に大きな開きが生じ、概して通貨下落国の方が不況の打撃の少ないことを知るのである。これらの点から判断するならば、金本位ブロックは到底このままの状態を続けることは出来ないのであって、遠からざる将来には落城の悲運に遭遇するものと見るのが至当である。

八 崩壊の後に来たるものは幣制混乱と為替戦争

それでは金本位ブロック崩壊の後に来たるものは何であろうか。いうまでもなくそれは世界幣制の混乱、為替戦争の激化である。金の拘束から放たれた各国の為替は恐らく国民主義の嵐の中に、激動を生じ、一時は世界経済の危機にまで達するものと覚悟しなければならぬ。何となれば、こうした状態をもたらす為にこそ各国は金本位を離脱するのだからである。

しかしながら総ての経済機構が国際化している今日、ただ独り貨幣制度のみが永く国民主義的たることは出来ない。従って世界は一端為替戦争の火蓋を切りはするが、間もなく戦い疲れて再び新たな国際的貨幣制度が確立せられずにはおかぬであろう。

めこれらの国々の多くは戦争直後の悪性インフレーションの苦い経験を未だに忘れ切らない為に、少々のデフレーションは忍んでも二度と再びインフレーションの危険は犯したくない、その為には自国の貨幣をしっかりと金の手綱で縛って置かねばならぬというのが国民多数の意見であること、その二は、これらの国民の多くは公債、預金、恩給等で生活するところのいわゆる金利生活者である、従って彼等はインフレーションすなわち貨幣価値の下落を極度に忌避するのである。こうした訳から金本位ブロック諸国は敢然金本位確保に努力しつつあるのである。

しかるに、この金本位ブロックにとって誠に憂鬱な現象が昨年末から現在にまで起こって来た。それは英国ポンドの下落である。英国は元来輸入超過国であるが昨年度のそれは余りに多かつたこと、社会政策不況対策等のための財政的支出が増加し今年辺りから多年誇った財政上の黒字が赤字に変化し、結局インフレーション政策に転向するの止むなきに至るのではないかという一般の懸念が生じたこと、さらにまたファンシーレートすなわち外国よりの預金利子の引下げが生じたこと等のため、ポンド売りが生じ次第にポンドの相場が下って来た。

このポンドの下落は英商品の海外市場における価格の引下げを意味するのであって、それは為替の高い金本位ブロックにとっては相手が貿易国の英国の通貨であるだけに一大脅威をもたらしたのである。ことにベルギーは輸出工業国であり、かつ戦後の疫病が大なるためにその蒙る打撃もまた多いのである。ここにおいて金本位ブロックの最も弱い一環たりしベルギーが三月三十一日にブロックの誓いを破って脱退し、ついで翌四月一日ルクセンブルグがまたブロックから脱落した。そして現在においては残るフランス、スイス、オランダ、ポーランドの四か国のみが金本位の城を守っている。

七 何故金本位ブロックが近き将来に崩壊すると見るか

以上が金本位国及び金本位ブロックの辿って来た過去の道程である。それでは今後金本位ブロックは何処へ行くであろうか。まず結論から言うならば、恐らくはベルギー同様の運命を辿るであろう。しかして金本位ブロックの崩壊は最早単なる時期の問題に過ぎないであろう。今その理由をブロック各国について述べる余裕はないが、ブロック中の最強の一環たる盟主仏国のみについて見ても容易にこの結論に到達することが出来る。以下その

じられてしまった。そしてその後は止むなく金に対する最も非合理的な態度、すなわち流入する金を徒らに金庫の中に仕舞って置くという態度を取るに至った。そしてそれは尚今日まで続けられつつあるのである。

かく言うならば、その金でアメリカはどんな外国から商品を買って豊富な生活を営んだらいいではないか、ここに今一つの使途が残されているではないか、という疑問が出て来るかも知れない。しかしそれは個人の金持には出来るが、遺憾ながら国家には不可能である。何となれば、国内にはたださえ生産過剰に悩む多くの産業があるのだから、外国品をその上輸入しては到底それらは立ち行かない運命にあるからである。

かくてアメリカは使い得ない金を抱いて不況に喘がざるを得ないのである。故に黄金の波打つアメリカが不景気に苦しむということにも何の不思議もない筈である。

そこでアメリカは窮余の一策に自国の為替を下げ、輸出を増進し以てこの不況を打開せんとして、他国並みに金本位を停止するに至った。

六 ベルギーの離脱と共に迫りくる金本位ブロックの危機

以上述べ来たった様な理由から、一九三一年以後大部分の金本位国は金不足国も金過剰国も共に多年採用し来たった金本位と別れを告げるに至った。そして最近まで実質上金本位を維持する国は僅かにフランス、スイス、オランダ、ベルギー、ポーランド、ルクセンブルグの六か国である。なおこの他ドイツ、イタリーは自称金本位国ではあるが、極端な為替管理を実施し金の輸出入を甚だしく制限しつつあるが故に、實際上金本位国とは言ふことが出来ない。

これらの六か国はロンドンの国際経済会議決裂後において、パリイ会議（一九三三年）やブラッセル会議（一九三四年）で互いに金本位擁護の共同宣言を行なって、その支持に死力を尽して来たのであるが、それ以来これらの諸国を称して人々は金本位ブロックというのである。

世界の金本位諸国が自国の利益のために金本位を捨てた今日、何故に彼等だけが熱心にこれを死守しているのだろうか。それには二つの理由がある。その一は、フランスを初

かれていますのである。いわばアメリカは経済的な禁治産者の様なものである。従って黄金を山と積んでも不況の嵐に吹きさらされねばならないのである。

今日までアメリカはいろいろの方法で金を使って見たが、いずれも故障が出来てうまくなかった。まず最初には外国から流入する金の用途を国内に求めて見た、すなわち一種のインフレーションによって金を国内にばら撒いた。そのため既存産業の拡張、新産業の樹立が行なわれた。その結果一時原料の需要は増し重工業は栄え物価は騰り労働者の就業率は増した。これがいわゆる戦後の好況であって、大戦直後から一九二五年までのアメリカの経済状態であった。

ところが、さて拡張または新設された諸産業からいよいよ商品が造り出された場合に、果してその捌け口があったかというに仲々そうではなかった。大戦中に拡大された生産設備だけでさえ戦時異常の需要がなくなったため過剰生産を来たす恐れのあるところへ、さらにインフレーションによって新産業が簇出しそこからどんどん商品がはき出されたのであるから、生産過剰はさらに生産過剰となり、到底これらの商品は国内で販路を求めることは出来なかった。

五 米国の悩み 輸出不振—投資の閉塞—消費力の減退

それでは過剰商品の輸出はどうであったかというに、これもまた不可能であった。というのはアメリカが生産拡張に使った金は、元来アメリカの商品を買ってくれる欧州諸国から戦債として取り立てた金である。御得意の金を巻き上げて客に品物を売ろうというも、それは無理な話だからである。かくしてアメリカは自国内で集まった金を使うという途が閉ざされてしまった。

そこでアメリカは一九二五年以後同二九年頃まで金の第二の用途を選ぶに至った。この第二の用途というのは外国に対する貸付資本たらしめるということである。この間において米国は欧州、ことにドイツに盛んに貸付を行なった。ところがこの用途にもまたやがて厄介なことが生じて来た。それは一九二九年秋頃から漸く抬頭し始めた欧州の狂気じみた国民主義の勃興である。ことに最大の債務国ドイツでは、この頃からベルサイユ条約を廃棄し対外債務を踏み倒そうというヒットラー一派のナチストが勢力を持ち出した。そこでアメリカはこの欧州政局の不安に駆られて、一九三〇年以後はこの第二の金の用途をも封

は一国における金の増減と取引量の増減とが足なみを揃えて進行するものとすれば、通貨の供給と需要とが合致して、そこには通貨の側よりするさしたる経済の攪乱は生じない訳である。

これに反しもし両者の進行が平行しないならば、あるいは通貨の不足—物価の下落—失業軍の簇出等の過程を経て不況が襲来し、あるいはまた一時的インフレーション—生産過剰—販路停滞—金退蔵を経て結局また不況に陥らねばならないのである。しかるに欧州大戦後は一方において金の世界的生産高は次第に減少し、他方世界の取引量は依然として増進したのである。しかも戦後新たに金本位国の仲間入りをした国も一、二には止まらない。これらの為には金の需要は増加しその供給は減少し、ここに世界的通貨不足が生じて来た。そこで大部分の金本位国は先に述べた第一の過程を経て、デフレーション不景気に苦悩せざるを得なくなった。

そればかりではない。もしも金不足のみが問題であるならば、金本位諸国はお互いに連携して金節約の方法も講ずる事が出来るであろうが、戦後には戦債賠償という大なる禍根が世界の経済界に植えつけられた為に、たださえ不足な世界の金の大半が米仏二国に集中

されてしまった。そこで爾余の諸国はますます金不足—通貨の縮小—デフレーションに呻吟するに至った。従って多くの金本位国はこのデフレーションに耐えかねて、通貨を金の拘束から解き金本位を停止するのやむなきに至ったのである。

四 経済的禁治産者……米離脱の真相

ところがここに一つの疑問が生じて来る。成る程以上の説明によって金不足国の金本位離脱理由は一応納得出来るかも知れない、がしかし金を多分に有する米國が何故金本位を離脱したかは説明し得ないではないか、というのがそれである。アメリカもまた不況打開の一策として金本位を離脱したのである。かく言うときはさらに次の疑問が生ずる。有り余る金を有するアメリカが何故不況に苦しまねばならないのであるかというのがそれである。しかしそれは少し退いて考えるならば何の不思議もないことである。

一体貨幣や金は使って初めてその効用が生ずるのであって、仮りに使い得ない貨幣や金があったとしたならば、それは何の役にも立たない瓦石にも等しいのである。しかるにアメリカは折角沢山の金を集めては見たものの、経済上これを使うことの出来ない立場に置

英国は十七世紀から十八世紀にわたって金と銀とを共に本位貨幣としていたが、十八世紀の末頃から銀価の暴落が生じ、ためにグレッシャムの法則が行なわれんとした。ここに於いて英国は銀の自由鑄造を停止して純然たる金本位制を採るに至った。しかるに當時はその植民地を初め欧州における多くの国々は、英国の投資を俟って自国の経済的發展を計っていたのであるが、この英国の投資を迎えるにはそれと同一の貨幣制度を採ることが得策であった。けだし同一金属本位のもとでは為替相場が安定し、英国の投資家に安心を与えることが出来るからである。さらにまた、当時はいずれの国の貿易も英国またはその属領との取引が大部分を占めていたのであるが、この英国との貿易を順調に發展せしめる為にも英国と同じ金本位制を採る必要があった。

かかる事情に基づいて、次第に金は世界的貨幣たる地位を占めるに至った。故にもしもの一八一六年に、英国が金本位ではなく銀本位もしくは白金本位をとっていたとするならば、今日の世界的貨幣は銀または白金から成っていたかも知れない。かつて有名なクナ

ップが、金本位が世界的に普及したのではなく英国の本位が世界に普及したのだと言ったのはこの間の事情を簡明に表わしたに過ぎないのである。

三 金本位ブロック崩壊の一般的原因

かくして金本位国は互いに同志を募ってここに国際的な金本位が確立されるに至った。しかるに一九三一年九月二十一日に英国が金本位を離脱して以来、日本、米国等を始め大部分の金本位国がこれを離脱し、あるいは不換紙幣国となり、あるいは金の国際移動を禁止するに至ったのである。

それでは何故にこれらの諸国が金本位を離脱しなければならなくなったか。それを次に考えて見よう。

大ざっぱな表現ではあるが、金本位のもとにおいては一国通貨の総量は金の量によって左右せられる傾向がある。換言すれば、純粋金本位のもとにおいて通貨の供給量を決定するものは主として金の量であると言ふことが出来る。しかるに他面、一国通貨の必要量は一流通速度に変化なき限り一商取引量の大小によって決まる。そこでもしも、世界また

金本位ブロックの崩壊と世界幣制の将来

一 何故金本位は世界幣制に採用されたか

金が一国の本位貨幣として初めて採用されたのは一八一六年であって、それは英国によつてであつた。その後百年余りの間に、世界の主要諸国は殆どすべて金本位国となつてしまつた。英国が金本位を停止したかの一九三一年には、世界六十余国のうち四十九の多数が金本位国であつた。

それでは何故に最近まで金が世界的貨幣の役割を演じていたか、何故各国が金本位を採るようになったか、これについては論者の意見が必ずしも一致してはいない。

ある学者はこの理由を金の自然的性質に求めて、金の性質は不変的でありその品質は均一である等々のために最も良く貨幣に適するからである、と主張する。しかし、これは何故貴金属が貨幣となつたかということの説明にはなるであらうが、何故その中の特に金が

貨幣となつたかということの説明にはならない。

また他の学者は、金は量に比して価値が大きいばかりではなくその価値が安定であるから、価値尺度たる貨幣に適するとも主張する。成る程最近は別として、一般に金の価値が他の商品の価値に比して安定していたということは、何人も否定することの出来ない事実である。しかしながら金の価値が従来比較的安定であつたのは、多くの国が金本位制をとつて、いわば大部分の国が金相場を公定していたが為である。換言すれば、金が世界的貨幣であつたが故に金の価値が安定だつたのであつて、決して逆に金の価値が安定だから世界的貨幣となつたのではない。

卑見によれば、金が各国の貨幣となつたのは商品としてのその特殊性に基づくものではなく、実に偶然な事実に基づくのである。しかしてそれはたまたま一八一六年に世界で最も富んでいた国、また世界最大の貿易国であつたところの当時の英国が、次の様な理由から一種の金銀両本位制を捨てて金本位制に移つたという誠に偶然な事実である。

- (1) E. v. Böhm-Bawerk, "Wert" im *Hdwb.* 3 Aufl., VIII, S. 756.
- (2) A. Amonn, *Objekt und Grundbegriffe der theoretischen Nationalökonomie*, 2 Aufl., S. 303.
- (3) E. v. Böhm-Bawerk, *Kapital und Kapitalzins*, 4 Aufl., Bd. I, S. 159.
- (4) A. Amonn, *a. a. O.*, S. 305.
- (5) K. Soda, *Geld und Wert*, 2 Aufl., S. 88—91, 川村豊郎氏訳『貨幣と価値』一六七—一七四頁。
- (6) A. Amonn, *a. a. O.*, S. 307.
- (9) E. v. Böhm-Bawerk, *a. a. O.*, S. 160.
- (7) 社会並びに社会現象の概念について Hans Oppenheimer, *Die Logik der soziologischen Begriffsbildung*, 1925 を参照せよ。
- (8) 拙著 *Sozialökonomische Theorie des Geldes*, 1931, S. 21 u. 29.
- (6) G. Simmel, *Philosophie des Geldes*, 3 Aufl., S. 87.
- (10) K. Soda, *a. a. O.*, S. 168.
- (11) J. Shumpeter, *Das Wesen und der Hauptirrtum der theoretischen Nationalökonomie*, 1908, S. 80.
- (12) A. Amonn, *Grundzüge der Volkswohlstandstheorie*, 1926, S. 148 u. 150 参照。
- (13) 前掲拙著三〇—三十七頁。

- (14) G. Simmel, *a. a. O.*, S. 87.
 - (15) G. Knapp, *Staatliche Theorie des Geldes*, 1 Aufl., S. 8.
 - (16) K. Kirmaier, *Die Quantitätstheorie*, 1922, S. 18.
- (小樽高等商業学校『商学討究』第六卷上冊、昭和六年六月、二二—三二頁。)

る。故に経済価値と職能価値とは概念上同時に生ずるのである。されば経済価値を論理上、概念上可能ならしむるものは職能価値概念である。この両価値概念の経済価値に対する意義を、他の言葉をもって表わせば、実体価値はその心理的発生的概念であり、職能価値は先天的、論理的概念である。

しかるに（社会的）職能価値は、吾人が既に別著に詳論せるが如く、貨幣それ自身である。⁽¹³⁾ 貨幣は貨幣たる以上実体価値に執著せず専ら職能価値に基づいて独立の存在を保つ。故に貨幣なる概念をもって、上述の経済価値の性質を表わすならば、経済価値は所有の対象に認められる社会的実体価値が貨幣によって客観的数的に表示せらるるとき、初めて可能となる、すなわち社会的実体価値が貨幣の性質を分有するとき、経済価値は概念上成立するのである、すべての財はある意味において貨幣たるの性質を有するが故に経済価値たるのである。しかして貨幣は経済価値概念の先天的、論理的条件であり、経済価値発展の Idee である、⁽¹⁴⁾ と言い得るのである。されば Simmel も曰く、「客体の経済価値は客体が可交換的として立入るところの相互関係において成立するものなりとすれば、貨幣はこの関係の独立性を取得せる表現である、経済関係すなわち対象の可交換性のうちから、この関

係の事実が析出せられ、かの対象に対して概念的な——しかし可見的表徴に結合した——存在を取得した、抽象的財産価値の表示である⁽¹⁴⁾と。

ここにおいて吾人は貨幣は経済価値を有するや否や、の最初に提出せる問題に対し、次の如く答える事が出来る。「経済価値一般は社会的実体価値と社会的職能価値との結合するところに生ずる。しかるに貨幣は社会的職能価値それ自身である。故に貨幣は自らを条件とする経済価値を有することは出来ぬ。」と。

されば Knapp は、「もしも比較財が明らかに述べられないならば一事物の価値は常に支払手段価値である、すなわち一般的交換手段との比較によって生ずる価値である、従ってこの意味において交換手段それ自身の価値を云々することは出来ない。支払手段価値はそれ自ら交換手段たらざる財のみが有するのである。」⁽¹⁵⁾ と言い、また Kirmaier は、「貨幣は価値の客観化であり、従って敢て言わば事物の性質の主観化である以上貨幣は自己において実体となったものを更に属性として持ち得ないのは自明である。」⁽¹⁶⁾ と述べたのである。

かしながら尚兩者の間には見逃す可からざる差異あるを注意しなければならぬ。従来の経済学者の中には、⁽¹¹⁾すべて財の調達行為をもって経済学上の交換現象なりと解し、例えば孤島のロビンソンの活動をもって自然と労働力との交換なりとし、既にこの際客観的交換価値を云々せんとするものがある。しかしながら経済学をもって一個の社会科学なりとする吾人の立場よりすれば、かかる場合経済価値は問題とならぬ。吾人は、個人的、技術的交換と社会的交換との間に根本的差異を設け、ただ後者のみを経済学的概念とする。⁽¹²⁾従って吾人の経済価値はただ社会的交換過程を前提して成立するのであって、個人的、技術的交換に基づくいわゆる客観的交換価値はその概念より除外せられるのである。

以上吾人は二途を辿って、経済価値の性質を明らかにした。次に残されたる問題は、しからば貨幣は経済価値を有するや否やである。

三

経済価値を前提して発生するが、実体価値そのものが既に経済価値たるのではなく、実体価値の保持者に機能価値が認めらるる時に初めてその対象は経済価値の保持者となるの

である。換言すれば、すべての経済価値はこの兩種の価値をそれ自身の中に包含し、経済価値の一方の極限概念として実体価値が存し、他方の極限概念として機能価値が存するのである。実体価値と機能価値、それはすべての経済価値が参与するところの兩極であって、この二つの性質を有するとき、初めて一対象は経済価値の保持者となる。経済価値は実体価値の基礎なくして生ずるものではない、と同時に機能価値なき経済価値はあり得ない。経済価値はすべて実体価値を有すれども、経済価値が経済価値たるのは、それが実体価値たるが故ではなく、実体価値の保持者が機能価値を有するからである。従って実体価値の保持者は、機能価値なくして、それ自身経済価値たり得ない。また経済価値はすべて機能価値を有する。しかしながら経済価値が機能価値を有するは、それは実体価値を有するからである。従って経済価値は実体価値なくして存立し得ない。かかる意味において、吾人は、経済価値は実体価値と機能価値の兩条件に基づいて可能なりと言うのである。

しかしながら、経済価値に対するこの二つの価値概念の意義は根本的に異なる。実体価値は、経済価値の発生以前既に存在したものであって、それ自身は未だ経済学の範囲に属しない。この価値の保持者に機能価値を認めらるるに至った瞬間において経済価値が生ず

ご葬儀終了迄の連絡係になろうと思った。先生は何時も緑丘会のこと事務局の鈴木さんの所と仰言っていたので住所録から自宅の電話番号を探し出し、急を告げる第一報を送った。ご遺体を運んできた葬儀屋さんに万事を頼むこととし、お寺は三鷹市の禪林寺、お通夜は二月一日、告別式は二月二日と、当日の夕方までには喜三郎さんのご相談相手になりながら大よその日程を固めることができた。

この度のご葬儀では多勢の方々のお世話を頂いたが、その中心になったのは先ず第一に小樽商大、緑丘会の諸先輩、第二にはご親戚の方々―ご親戚の殆どが北海道、福井と離れていたが、たま〜上京中の滝川市の猪股ご夫妻がいち早く見えて指揮をとり、又同氏が経営する末広屋電機東京支店の社員の皆さんがお手伝い下さったし、北海タイムス東京支社長の四十物さんのお力で当日夜には共同通信社に連絡することができ、翌日の各新聞に死亡記事をのせることができた。―そして第三は第一勧業銀行の行員の方々。最後に喜三郎さんの現在のお勤め先である旭電化工業の皆さまが総まとめをして下さった次第である。亡くなった日も、お通夜の日も、告別式の日も寒さは厳しかった。その中で、多勢の受付の方、三鷹駅で案内なさった方、お通夜の席で遅くまでお手伝い下さった旭電化の

女子社員の方などのご苦勞は忘れられない。

告別式の日には長谷部学長が午前中早々に見えられ、天皇陛下のご祭祀料も大学事務局の方がお持ちになり式は予定通り二時に始まった。倒れんばかりのいた〜しい奥さまも最後まで頑張られた。全国各地からの緑丘先輩を始めとする会葬者は祭場の外まであふれ遅くまでご焼香下さった。最後に親戚代表木村円吉さんの、誰にも親しまれ頼りにされた義兄の一瞬の死を悼むご挨拶は又新たな涙を誘うものであった。

すべて終わった。

先生は亡くなった、もういらっしやらない、ご葬儀のすべてが終わったとき、始めて悲しみの気持がこみ上げてきた。

私と先生との関係は公的な面より私的な面が強い。私は根室高校の出身で小樽商大を二十九年に卒業し、第一銀行に入行した。先生が保証人になって下さった。先生とご家族の皆さまとは昭和二十五年の入学以来三十余年の途切れることのないおつきあいである。家内も先生ご夫妻が小樽で探し、見合いをさせ、仲人をして下さった。先生は最後まで緑丘と共に生き、亡くなった方だが卒業生には一様に人情深かった。そして家庭では無類の子

的なる社会的評価現象並びに社会的価値の如何なる部分に興味を有するや、が次に生ずる問題である。

元來経済的評価は、ある客体に対する社会人の同一評価にして、経済学には一定の経済的評価現象が他から別れて与えられるものではない。社会的評価現象を一定の見地の下に観察するとき、ここに初めて経済学的概念としての評価現象が生ずるのである。しからば如何なる見地より経済学はこれを観察するや。

言う迄もなく、経済学は彼固有の認識条件に基づいて社会的評価現象を観察する。しかしてその認識条件は既に吾人が他の機会において述べたるの如く、私有財産制と分業制である。⁽⁸⁾ 故に経済学の対象としての評価現象は先ず第一に所有の対象において生ずる社会的評価現象たるを要するのみならず、第二に分業制に基づき個人間に移転せらるるが如き所有の対象において生ずる社会的評価現象でなければならぬ。すなわち経済的交通の対象において生ずる社会的評価現象である。しかしてかかる評価現象に基づく価値こそ真の経済価値である。

しかるに単なる所有の対象に認めらるる価値は実体価値 *Substanzwert* であり、個人

間の移転の対象に認めらるる価値は機能価値 *Funktionswert* なるが故に、上述の経済価値の性質をこの二つの語をもって言い換えるならば、経済価値は先ず社会的実体価値でなければならぬが、しかし社会的実体価値がすべて経済価値たるのではなくそれ自身としては未だ非経済的なる社会的実体価値をして経済価値たらしむるものは社会的機能価値である。すなわち社会的実体価値が個人主義的社会的交通過程 *Der individualistische, soziale Verkehrsprozess* に入る時そこに初めて経済価値が生ずるのである、と云うことが出来る。更に換言すれば、社会的実体価値の保持者が社会的機能価値を有するに至るとき、ここに経済価値が発生するのである。けだし *Simmel* が「対象の経済価値は、それが可交換的として立ち入れるところの相互関係において成立するものである。」⁽⁹⁾ と述べ、*Soda* が「ある価値が経済価値となるや否や……を決するの標準は……、その所有者が価値客体を交通経済の客体として見るや否やまたかかる意味において評価するや否やにのみ存す。」⁽¹⁰⁾ と述べたるは、かかる意味においてである。

かかる意味における経済価値は、強いて従来の経済学が好んで取扱った価値諸概念の一に充当せしめんとするならば、いわゆる客観的交換価値に最も近しと見る可きである。し

換価値あるのみである、と云うことを明らかにしたのであるが、この結論はまたこれを他方面より証明することが出来る。

二

そもそも価値一般は一主体がある客体に対して認めるところの意義である。されば価値は客体それ自身に固有なる性質ではない。また主体の任意に想像したるものでもない。価値は一主体が主観、客観を超越せる第三の標準に照らして、ある客体を判断することによって生ずる統一的現象である。かかる性質を有する価値は、科学一般に与えられたる共通の経験の対象である、しかしてそれは各々の科学の認識目的に応じて加工さる可き素材である。しからば経済価値はこの経験の対象より如何にして発展するや。哲学は、この経験の対象としての評価現象における評価の標準に、その学的興味を向けることによって、彼自身の研究の対象とする。しかるに経験科学一般は、かかる標準を与えられたるものとして、直接この問題に関係するを許さぬ。自然科学は、この評価現象を孤立せる個々の現象、もしくはその外的、機械的交互作用として観察しそれより普遍的要素を抽出することによ

って、自らの科学の対象とするのである。しかるに経済学は、一の歴史的社会科学なる限り、かかる見方をもってはその研究の対象を構成することは出来ない。経済学は、社会の成員の評価現象、すなわち社会現象として、これを観察する時、初めて自らの研究の対象とすることが出来るのである。

同一客体に対して評価を行なう個人が、相互にこれを意識し、この事実が各個人の評価行為に一定の作用を営む時は、ここにこれらの評価者は、評価者としての社会を構成する。吾人は、かかる社会の成員によってなされる評価行為を、社会的評価現象と名づけ、かかる個人によって認めらるる価値を社会的価値と名づける。これに反し、単に孤立せる、あるは単に外的、機械的に相互に作用する個人の評価行為を、個人的評価現象と称し、かかる評価行為によって生ずる価値を個人的価値と名づける。

しかる時は社会科学たる経済学は後者をそれ自らの研究の対象とすることは出来ずして、前者すなわち社会的評価行為並びに社会的価値のみをその対象とするのである。

しかしながら経済学は社会的評価現象または社会的価値一般を、その対象として有することは出来ぬ。ここにもまた社会諸科学の分業が存するのである。しからば経済学は一般

社会的交通において、ある他の財と交換せられる関係である。従って客観的使用価値並びに客観的収益価値は、専ら事物の自然的性質すなわちその物理的、化学的關係によって条件付けらるる純粹技術的のものであるが、客観的交換価値は個人間の交通を前提して初めて発生する社会的のものである。されば一般に経済学上において、従来論ぜられて来た価値は、これを社会科学上区分する時は、一、個人的、主観的、心理的価値、（主観的使用価値、主観的収益価値、主観的交換価値）二、技術的価値、（客観的使用価値、客観的収益価値）三、社会的価値、（客観的交換価値）の三つの範疇に分かれるのである。⁽⁵⁾

さて吾人はこの三種の価値の経済学上における地位とその意義とを檢しよう。個人的、主観的、心理的価値について、従来の経済学者の考うる所は次の如くである。この価値はすべての経済現象の根本に横たわるものであって、それは経済現象の終局的説明原理たるのである。さればこの価値概念こそ経済学的価値概念、すなわち眞の経済価値である、と。しかしながら吾人はある概念の一科学内における論理的意義と發生的意義とを混同してはならぬ。すなわちたとえ、個人的、主観的、心理的価値概念は、経済現象の説明に對する最終点を意味し、経済現象發展の始点を構成するも、これをもって直ちに経済的概念それ

自身なりと断ずることは出来ない。そもそも個人的、主観的価値は純粹の心理現象として人間のすべての合理的行為を発生せしむる根本動機である。従って、それは、経済現象よりもはるかに広き一般的人間行為の説明原理ではあるが、決して経済学固有の概念ではない。この種の価値は、経済学的価値現象の分析に際して、最後に歸せしめられる可き価値ではあるが、それ自身経済学的価値とは見ることが出来ないのである。他面技術的価値が本来の経済学的概念たらざるはここに論ずる迄もないことである。されば Böhm-Bawerk も曰く、「木材の熱量価値を例えれば説明することは、決してわが科学の任務ではない、」⁽⁶⁾と。かかる価値は明らかに自然科学の対象であって経済学に固有の概念ではない。以上二価値に反し、客観的交換価値は、社会的交通を前提して初めて成立するところの概念である。この価値は単に所有せらるる対象に認められる価値ではなく、移転の対象において生ずる価値である。従ってこの価値こそ、社会科学としての経済学上、重要な価値概念である。

さて以上によって吾人は従来の価値概念を檢し、個人的、主観的価値並びに技術的価値は経済学固有の価値ではない、われわれの科学内に独自の地位を占め得るはただ客観的交

別して二とすることが出来る。その一は主観的価値学説であり、その二は客観的価値学説である。第一の学説によれば、「主観的意味における価値は、一定の主体によって彼の福利が何等かの関係において一財の所有に依存すると言ふことを意識せらるるがために、その財がこの主体の利害範囲に対して有する實際的意義である。」⁽¹⁾更にこの価値を彼等は三分する。すなわち一主体の欲望が直接その財の使用によって充足せらるる場合は、これを主観的使用価値、その財を技術的生産に利用して得た新たなる財によって充さるる場合は、これを主観的収益価値、その財を交換において提供し、もって得たる財によって充さるる場合を主観的交換価値と名づけるのである。⁽²⁾他方第二の論者によれば、「客観的意味における価値は、吾人の判断において認められたる、一定の外的、客観的成果をもたらず可き一財の性能である。」⁽³⁾この価値もまた三つの範疇に分かれる。一財が直接技術的用途に向けらるる時、これを客観的使用価値と称し、技術的生産過程を通して他の財を得るために用いらるる時、客観的収益価値、交換によって他の財を得るために充用せらるる時、客観的交換価値と言ふのである。⁽⁴⁾

以上は従来の価値区分であるが、今この区分を静かに退いて観察する時、吾人はそこに

何等社会経済学上重要な区分の原理なきを発見するのである。すなわち彼等が同種と看做す価値も、これを社会経済学的見地よりすれば、全く異なるものであり、また彼等が別種のものなりとするものも、吾人の見地よりすれば、何等区分の必要なものたるを知るのである。しかして結局三個の範疇がそこに対立するを発見するのである。先ず第一に主観的価値について見るに、主観的収益価値並びに主観的交換価値は根本において、主観的使用価値と異なるものではなく、両者は共にこの価値に帰属する。ただ前二者は間接的使用価値であり、後者は直接の使用価値である、と言ふ点においてのみ異なるのである。故にここに三者は結局同一範疇に属し、そは一対象と一主体との対立関係に基づいて発生する、個人的、主観的、心理的価値である。次に客観的価値に進もう。客観的使用価値並びに客観的収益価値は、共に、一財が、技術的關係の中に、もたらす効果に基づくものであって、この意味において、両価値は本質的に異なるものではない。ただ一財の技術的成果の欲望に対する関係が直接なりや間接なりやの点においてのみ區別せられるのである。しかして両者は共に技術的概念である。しかるに、これらの価値と客観的交換価値との間には、社会経済学上より見れば、根本的差異が存するのである。客観的交換価値は、一財が、

貨幣と経済価値

本稿の目的とするところは、貨幣は経済価値性を有するや否やの問題を解かんとするに在る。

貨幣は経済価値を有するや否やは、殆ど経済学の誕生と共に発生し、古来多数の論者によって討究せられたにもかかわらず尚今日においても解決を見ざる問題の一つである。吾人の考えによれば、かかる意見の不一致は、貨幣が有しもしくは有せずと主張せらるる経済価値概念に関する彼等の解釈の区々たるに基づくのである。されば、貨幣における価値の問題を論ずるがためには、先ず経済価値の概念そのものを明らかにするを要するのである。

一 一般に経済学上、従つてまた貨幣論上における、価値概念に関する従来の論者の説は大

イールズ博士への陳情	239
書齋での一言	243
父親代わりの大野先生	246
在樽二十年	249
笑顔	253
水族館と小樽短大	255
小樽ロータリークラブと先生	257
ある時期の主治医として	260
羅針盤になってくださった先生	264
若手教官海外派遣の悲願	267
先生と図書館の本	270
晩年の大野さん	277
東京住まいの先生	282
日銀へ来られた大野先生	286
竹村保明	239
天利長三	243
浜林正夫	246
古瀬大六	249
木村章三	253
島本虎三	255
杉江猛	257
朽木英一	260
河田照子	264
麻田四郎	267
松田芳郎	270
南亮三郎	277
山口恒四郎	282
室谷邦雄	286

一日違いの伝言	290
その日の出来事	292
ご葬儀のことなど	296
小樽商大拡充資金のこと	300
大野純一先生の横顔	304
大野学長を悼む（緑丘会弔辞）	311
父の素顔	316
森松定男	290
大田末穂	292
河野祐二	296
長谷部亮一	300
大谷敏治	304
中田乙一	311
大野英子	316
飯川益男	320

糸魚川君と私……………142

先生の一通の手紙と私……………146

緑丘伝統の燈火は消えず……………150

わが母校のルーツと将来への願い……………155

大野純一先生著作目録……………163

大野純一先生略歴……………172

第二部 大野先生を偲ぶ

袴姿の中学時代……………179

ザルそば十杯をペロリ……………181

保証人候補に前田侯爵……………183

「緑丘」創刊の頃……………186

「北海道経済研究所」の活躍……………188

志羽 俊栄……………179

東 舜英……………181

原谷 一郎……………183

金卷 賢字……………186

服部 政一……………188

乾 杯……………192

答案は簡潔に……………193

幻の大野ゼミ……………194

軍服姿の大野先生……………196

絶賛された「根室地区兵用地誌」……………200

入舟町時代の先生ご一家……………201

緑丘は残った……………206

母校愛に燃えた先輩……………210

学制改革と小樽商大の誕生……………213

ユニークなリーダー……………216

商大昇格運動の苦心……………220

母校再建に奮闘……………223

母校大学昇格の一秘話……………227

初代学長を讃える……………234

高田 正明……………192

松木 義雄……………193

伊原 利勝……………194

小田島 一雄……………196

秋野 武夫……………200

小林 一富……………201

松尾 正路……………206

竹村吉右衛門……………210

古関 周蔵……………213

中野 清一……………216

大平 善梧……………220

西野 嘉一郎……………223

木曾 栄作……………227

板垣 與一……………234

目次

題字……………西野嘉一郎……………1
刊行のことば……………八木勇平……………1

第一部 大野先生の論文、著作

貨幣と経済価値……………3
金本位ブロックの崩壊と世界幣制の将来……………18
貨幣数量説と流通速度の概念について……………36
通貨政策の目標について……………57
学生諸君に望む……………67
小樽商科大学開学式式辞……………74

開学記念論文集序文……………82
永遠の生命を有する小樽高商……………84
創立四十五周年を迎えて……………86
母校を去るにあたって……………89
小樽商科大学の設立 小樽商大短期大学部の設立……………91
あの頃の話——『緑丘』第一号の思い出——……………103
昔ばなし……………107
戦後の学園風景……………111
世が世なら打首にでもなった話……………117
私の身元保証人……………121
奇跡……………126
経営における人と組織……………130
市井の人小林多喜二の片鱗……………135
責任者不在の日本国……………138

学長やその他の先生方にお目にかかる機会も増え、母校が身近な存在になった。そして、戦中戦後の困難な時代に歴代の学長先生や教職員をはじめ、先輩の同窓生の母校存立についてのみならず苦心のほども、詳細に知ることができるようになった。

殊に、大野純一先生は、最後の校長、初代学長として、戦後の学制改革にあたり、全国の旧高等商業学校の中で、ただ一校、小樽商科大学として存続するために、一方ならぬお骨折りを頂いたことも、いろ／＼と知るようになった。

そのような訳で、この一年程は今日ならびに近い未来の問題として母校のことを考える機会が増えてきたのであるが、私にとって母校のことは、主として五十年前の追想の中に生きている。卒業以来、誠に先生方にもご無沙汰ばかりで打ち過ぎ、多くの恩師も思い出の中の存在になってしまった。

私自身、どう考えても余り学術優秀な学生ではなかったが、七十歳を超えた今日でも、月に二〜三度は書店の新刊棚をのぞかないと何となく時代遅れになるような気がして落ち着かなくなる。専門書の背文字を見ていると、時には小樽の旧師が浮かぶ。学恩というべきであろう。

在学中は先生の年齢等考えたことはなかったように思うが、今日自分が年をとってみると、影響を与えられたと思う先生方は皆若かった。外国留学を終えた許りか、大学の研究室から直通の人か、大体が三十歳代、中には二十代末頃の先生もいたのではないだろうか。先生方ご自身が未だ学究生活の入口にいて、その熱気が学生に感染するといったような空気があったように思う。大野先生も例外ではなく、未だ三十歳代だったと思う。外国生活の名残りのような雰囲気は何となく身边に漂わせて、颯爽と教壇に立たれた面影は、今でも儼に浮かぶ。

五十年の歳月を隔てた追想の先生方は皆若い。「故人老いず、生者老いゆく恨みかな」が人生の旅路の一般的な嘆きだとすれば、私にとって、追想の「旧師は老いず」愚かな弟子だけが徒らな馬鹿を重ねたという感慨が湧くのを禁じ得ない。

願わくは、この追想集の刊行が、大野先生を直接に知る人々、間接に知る人々、直接学恩を受けた弟子達に、広く、永く追想の糧となるように、切に成功を祈念します。

尚、この企画を発起された世話人発起人の皆様に心から敬意と感謝を捧げます。

(昭8年卒、緑丘会理事長、東急建設(株)社長)

い出される。

暖かくなったら我が家に御招きして、ゆっくりして戴こうといつも家内と話し合っていたのにと今もって心残りで、亡くなられた当時を思うと心が痛む思いである。

(昭11年卒、公認会計士)

ご葬儀のことなど

河野 祐 二一

昭和五十七年一月三十一日、日曜日の十一時半頃であった。大野喜三郎さんからのあわただしい電話はまさに衝撃の内容であった。「おじいちゃんが亡くなった。直ぐ自宅の方へ行って欲しい」青天の霹靂とはこんなことだろう。何しろ一週間前の二十三日には新年のご挨拶に伺い先生の元気なご様子を見ている。無我夢中で家内と娘と三人で駆けつけた。奥さまとお孫さんの志津子ちゃんのお二人でご遺体を迎える準備をなさっていたが、余

りにも急のことで茫然自失のなかお互い交わすべき言葉もなかった。誰しもが信じられな
い——という気持であった。

先生は、当朝九時過ぎ所要があり普段と全く変りなくご家族に見送られ元気で家を出られた。自宅から何時も乗られる国鉄の駅(国電中央線・国分寺駅)まで歩かれ、上り線に乗るべく構内の下り階段のほんの一、二段の所で崩れ落ちるように倒れたという。急性心不全。一瞬の間の大往生であった。二時頃であったか。ご遺体は喜三郎、英子ご夫妻に守られ帰宅された。キミ夫人との悲しみのご対面。無言の先生に「何故私を置いて先に死んでしまったの……」何度も何度もさやくように語りかけていた奥さまの姿は今も脳裏に残る。

それから始まった。

全く突然のことであったので、これからどうやってお通夜の、告別式の段取りをするか。お寺はどこにするか。知らせる所はどこか。時間は限られている。今の時点では男は喜三郎さんと私しかいない。私は小さい力ではあるが——長い間のおつきあいでご親戚の方々を知っている。緑丘会員だ。喜三郎さんと同じ職場の第一勧業銀行に勤めている。

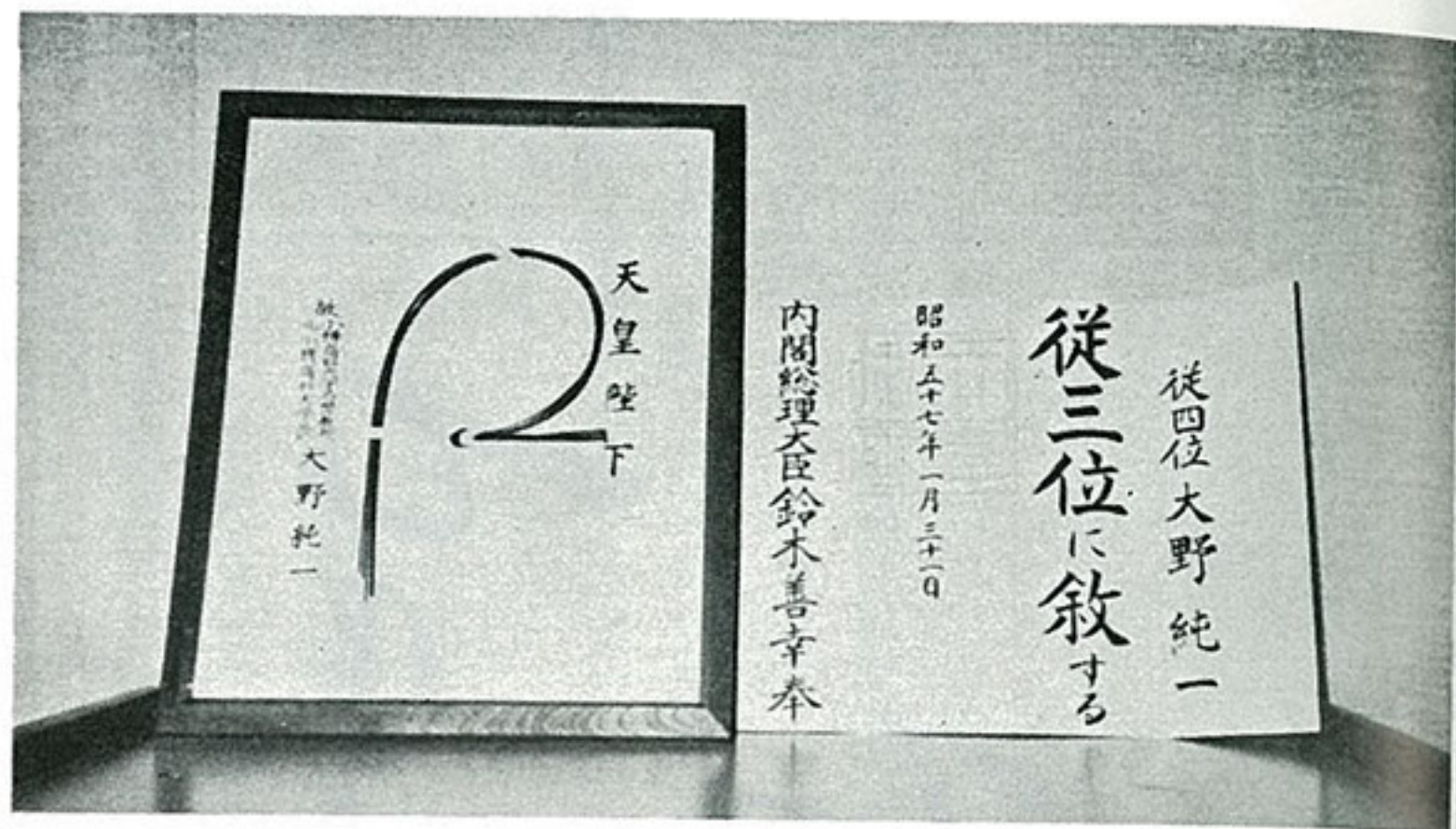
大野純一
 追想
 張一

刊行のことば

緑丘会員有志で組織された刊行会から、「大野純一先生追想集」が刊行されることになった。有難いことである。

私自身は旧制小樽高商を昭和八年に卒業しているから、在学中の思い出はすべて半世紀、五十年前のこととなった。懐しい恩師も多く故人になられ、級友も戦死者を含め多数亡くなった。

五十年の間に母校も、小樽経済専門学校、小樽商科大学と制度上も変遷を重ねた。その間、級友や卒業年次の近い同窓生の皆さんとの付き合いは途切れることなく続いているが、こと母校のことになると、関心もうすく、接触も少ないまゝ過ぎてしまった。ところが、文字通り全く図らずも、昨年同窓会「緑丘会」の理事長をお引き受けして、俄かに、



葬儀 禅林寺にて (昭和57年2月2日)



叙勲の時御家族と共に (昭和43年11月)



晩年のご夫妻



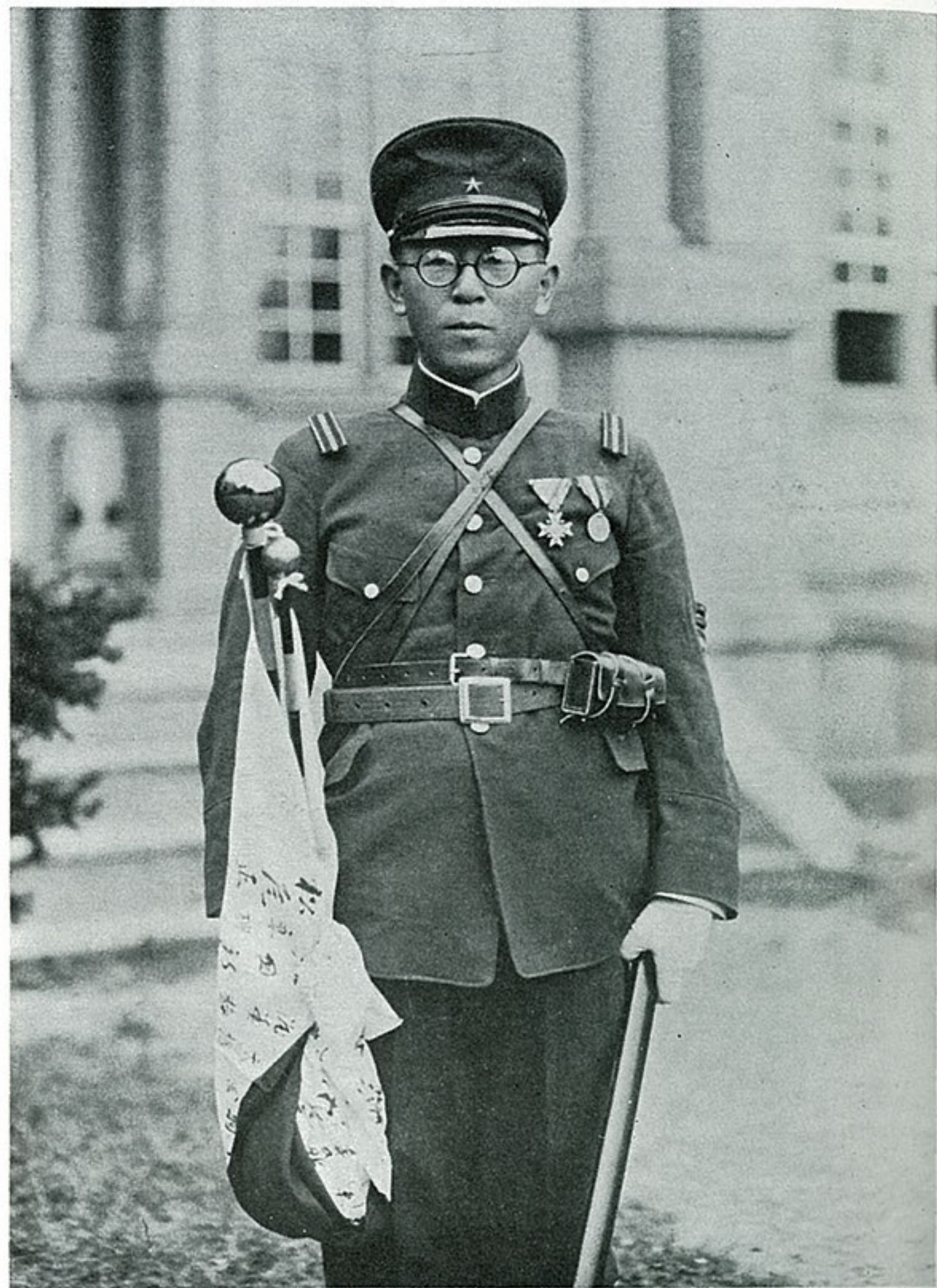
退官の時（昭和37年6月）



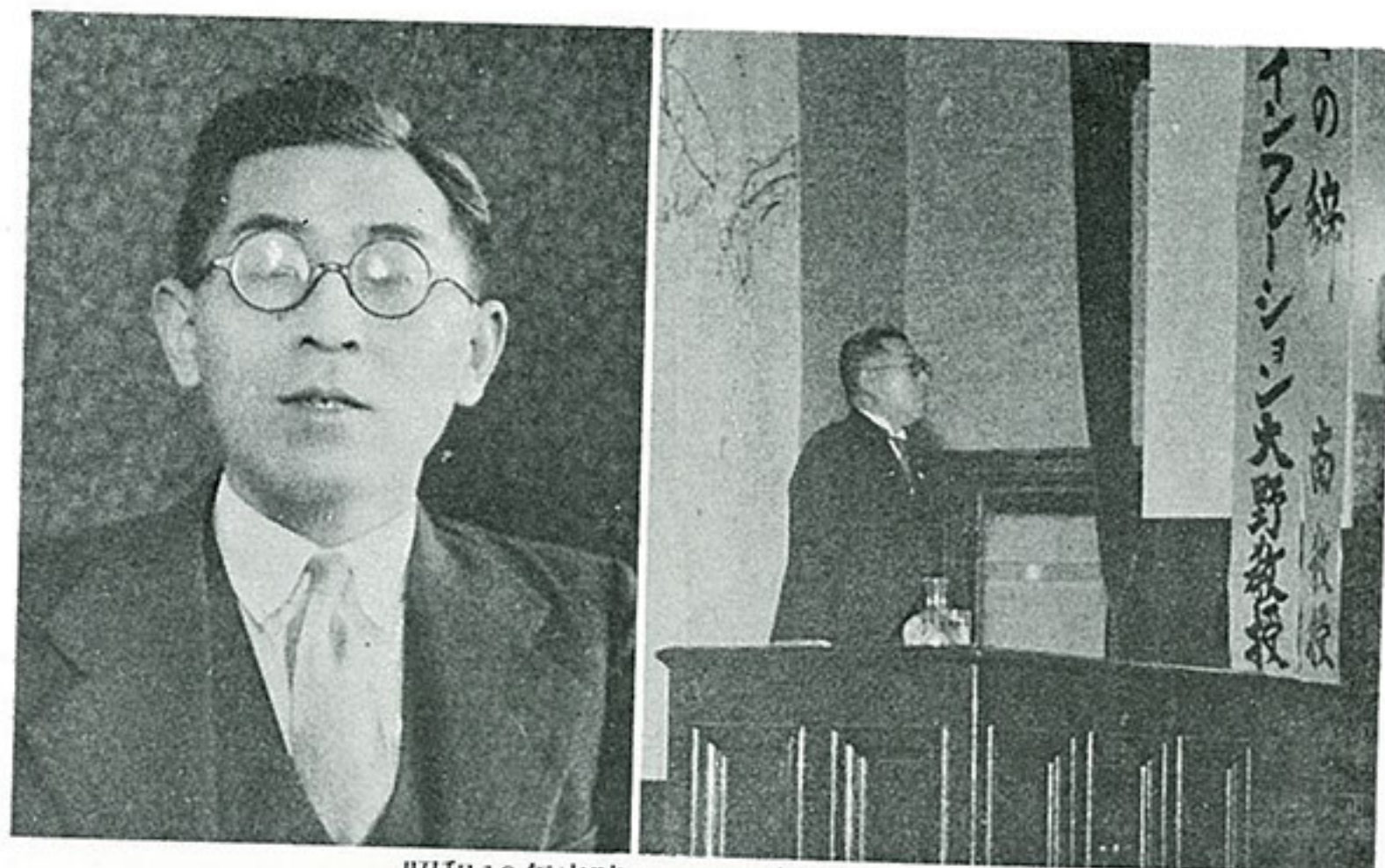
小樽ロータリークラブにて（昭和40年頃）



昭和30年頃



応召の時 (昭和13年8月)

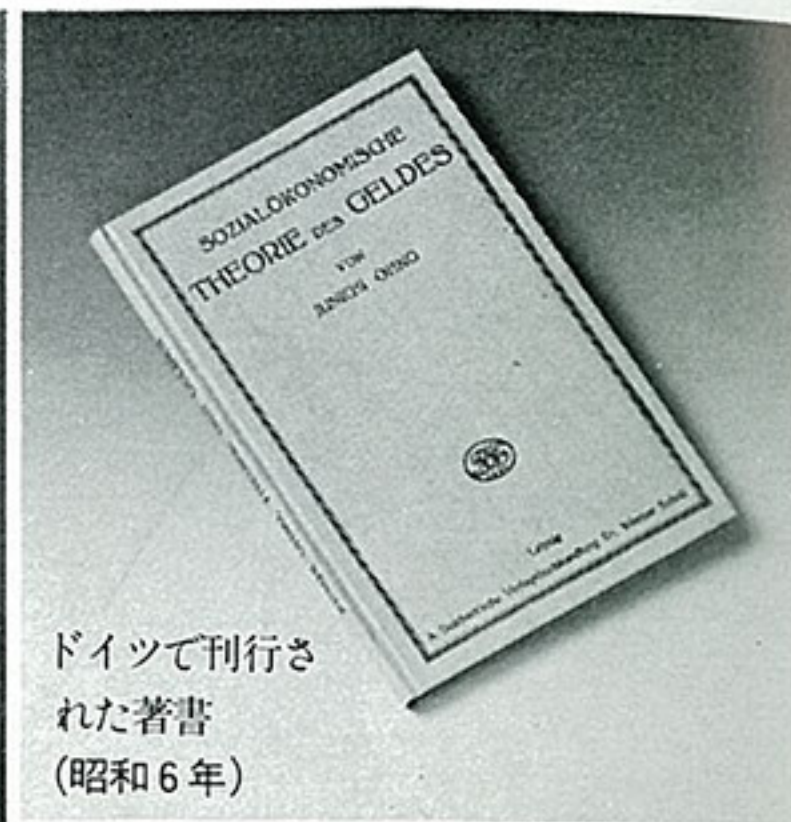


昭和13年当時

創立25周年記念講演会にて (昭和11年)

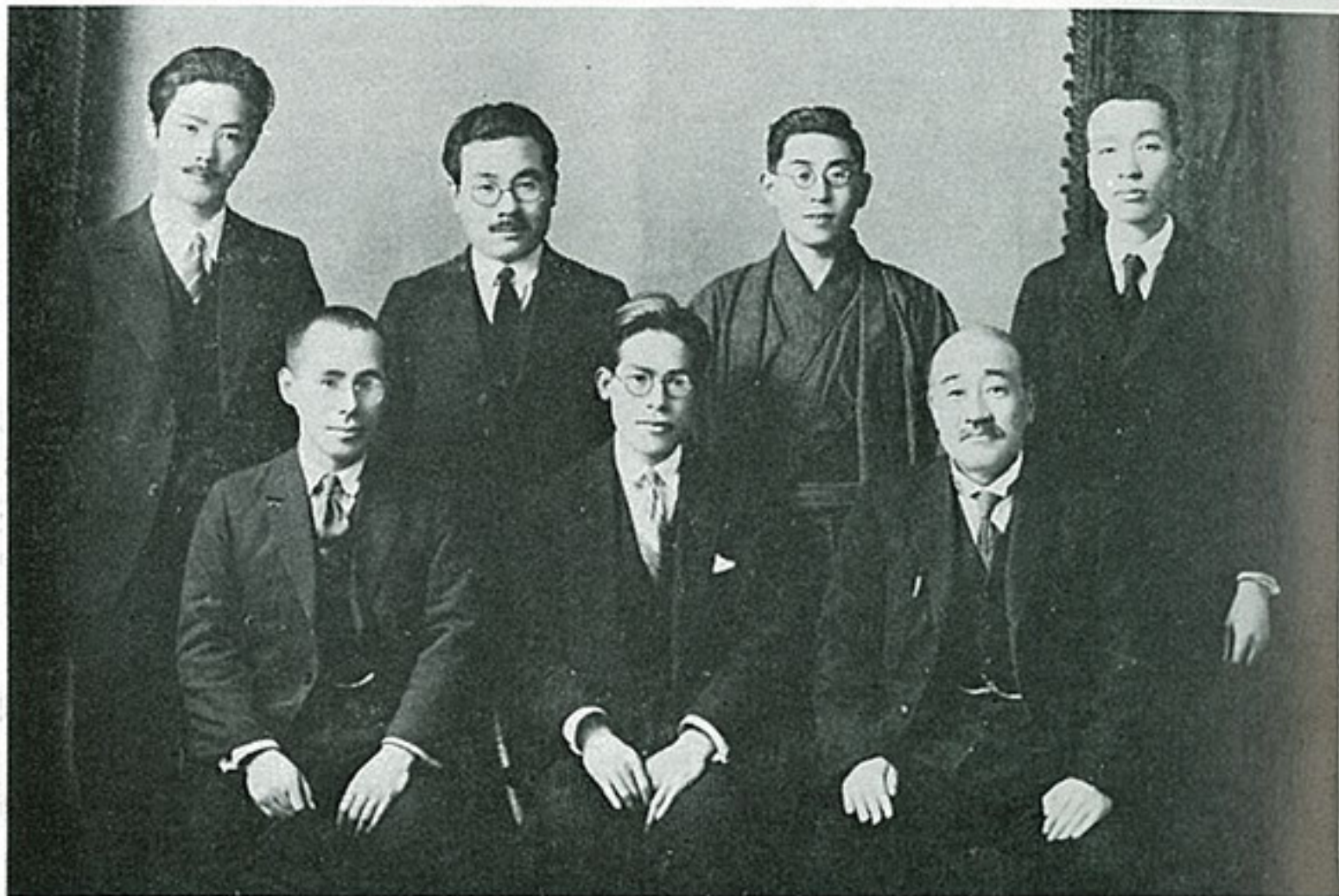


大野ゼミナール部員と共に (色内町街頭にて、昭和13年)



ドイツで刊行された著書
(昭和6年)

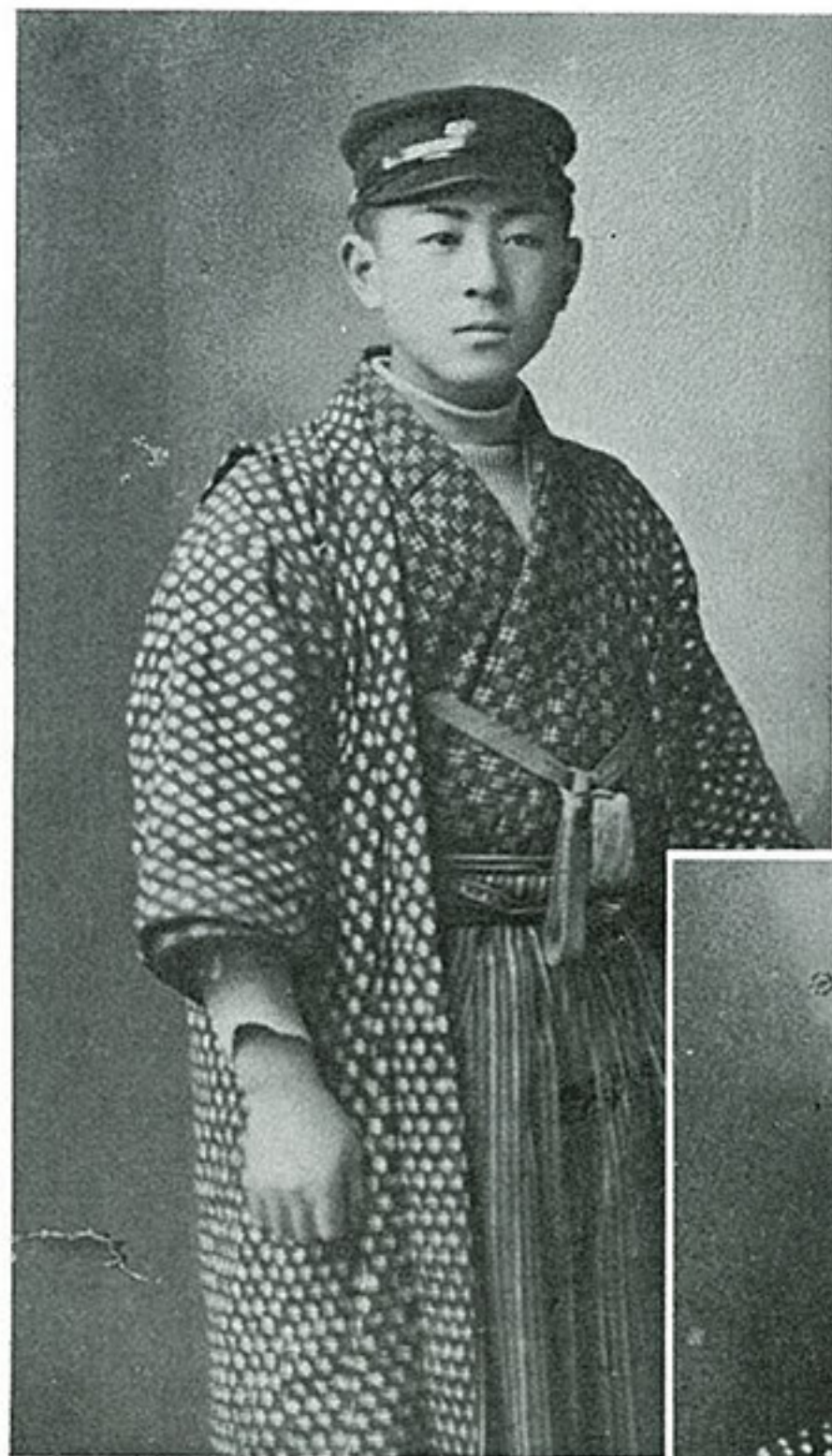
留学時の「パスポートの写真」(昭和2年3月)



帰国当時、同僚教授と共に(後列右から2人目・昭和6年1月)



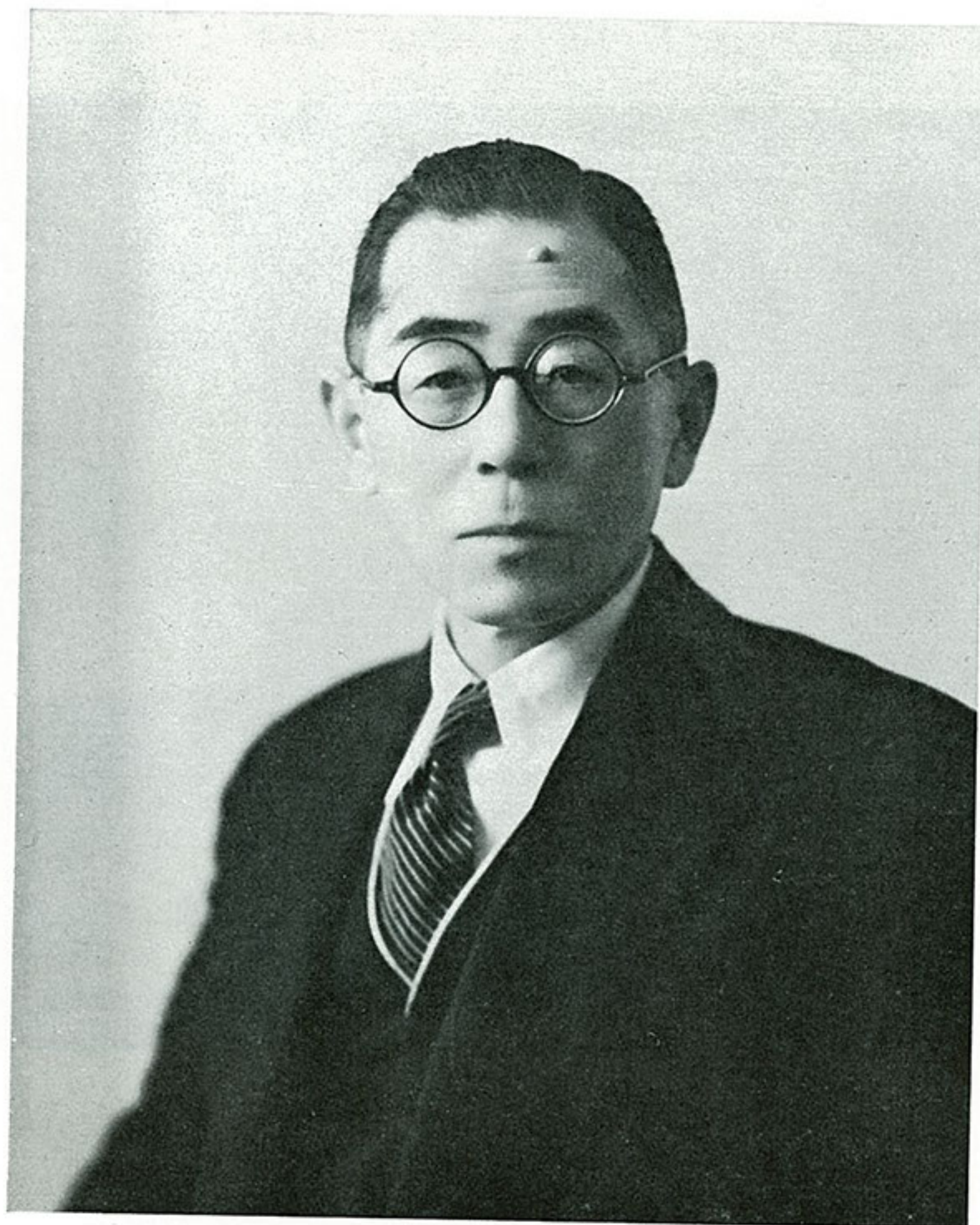
結婚(大正13年10月)



小松中学時代（明治44年～大正5年）



小樽高商時代（大正5年～8年）



小樽商科大学長就任時（昭和24年5月）



大野純一先生追想集



0 / 1
42
716

大野純也先生追想集



0/1
42
746

懐しく旧友を集めようと同期の小島典春君が中心となって、さむらい会を結成した。会合を重ねるうちに恩師を囲んで昔を偲ぼうということになり、恩師の方々を御招きするようになったが、中でも大野先生は非常に喜ばれいつも御元気な御姿で出席して下さった。

昭和五十六年六月の小樽での、さむらい会の如きは、前夜祭ということで妙見川の近くの寿司屋に集まり気焔をあげたが、この時も先生は気持ちよく加わって色々昔の話をし下された。家内も同席したが、度々荻窪の私の家に御見えになった時に、御会いしているので、いつになく愉しそうに歓談され、私達も愉快な時を過すことが出来た。翌日のさむらい会の席上でも愛された小樽について先生の烈々たる熱のこもった御話を御聞きして非常な感銘を受けた。

その時「これが私の最後の話になるかも知れない。私の遺言状かな」などと冗談混りて笑っておられたが、これがさむらい会の同期生達には最後の言葉になるうとは。

さむらい会や、その他の機会に御会いしているうちに、いつとはなしに先生が「私の税金のことをよろしく頼む」と申されたので学生時代からの御恩返しの積りで簡単に御引受けした。

亡くなられた昭和五十七年も「例年の所得申告の期限が近づいたので宜敷く」との電話があったが、最近御身体の調子が余りよくないと聞いていたし、この一月は例年になく寒い春先でもあったので、私の方から御伺いしますと申し上げましたが、先生は「荻窪には私の好きな草餅を売っている店があるので、書類を届けてから買物をして帰るよ」とのことだったので素直に、御出になるのを時計を見い見い御待ちしていた。

が中々御見えにならないので家内が「几帳面な先生なのにこんなに遅い訳がないから御電話して見たら」というので国分寺の御自宅に電話をしたところ、国分寺駅のホーム降り口で急に崩れるように倒れられたとのこと、駅員の連絡で急拠救急車で警察病院に運ばれたが、その時は既に亡くなられていた由、女婿の喜三郎様から御聞きして愕然として力が抜けたような気持ちであった。亡くなられたのが私の家に着かれる前三〇分足らずの間であったと思うと、何故私が出向かなかったのかと今でも自責にかられている。本当に返す返すも残念で仕方がない。家内がくも膜下出血で倒れたとき、先生が「私も小樽で講演中くも膜下出血で倒れたが、大事に大事をとって八十有余年元気できたのだから大丈夫だよ」といって、よかったよかったと自分のことのように喜び又慰めて戴いたことが今更思

H氏にはその夜おそく連絡がつき、大変喜んで、今日はおそいので明日早速電話します
ということ、先生のお宅にその旨をお伝えして一件落着と一安心しておりました。

はからずも、その翌日先生ご急逝のお知らせを受け、前夜のあの元気なお声に引きかえ
て余りのことに、たゞ愕然といたしました。例えば奥さまも当時独逸に同行されており確
かにその話はあったと承りました。僅か一日の違いで、先生とH氏とが直接お話のできな
かったことはいかにも残念でなりません。恐らく、ご他界なかりせば、あの調子で懇切丁
寧にお話になったことであろうとたゞ悔まれるところであります。

謹んで先生のご温容とご威徳をしのび、ご厚恩に感謝の誠をさぐげます。

(昭5年卒、元北洋相互銀行副社長、末広屋電機機(株)社長)

その日の出来事

大 田 末 穂

私は昭和八年四月に小樽高商に入学し、三年のとき大野先生のゼミナールを志望した。

志望した学生の中には故渡辺耕一君や林崎二郎(当時は中島二郎)君、故和田順三君等多
数の優秀な学生が揃っていたが、私はどちらかと云うと楽天的な性格で、のんびり屋であ
った。

ゼミナールのやり方は順番に原書を訳して先生の批評を受けその後その講義を受ける
やり方であった。皆なかなか解釈力豊かなもの許りであったが、私は全く駄目であった。
私の番に廻ってきたとき、文の内容はあまりわからなかったが一応直訳でその場を切りぬ
けたものの、先生はニヤニヤ笑いながら「大田君、君のいっていることは自分で分ってい
るのかね」といわれた。私は冷汗をかきかき「自分でもよく分りません」と答えたが後で
大笑いしたことを思い出す。

ゼミナールも最終回になりその晩離散会をしようということになり花園公園の料亭に集
まり大いに飲んだが終宴近くで皆揮一つになって、デカンショを歌おうではないかという
ことになり、皆でスクラムを組んで踊り狂ったこともあった。皆若かったせいもあるうが
本当に感激の極みであった。

卒業後小樽を離れ軍需工場に就職、戦場へと目まぐるしく世が移り終戦を迎えたが、昔が

一日違いの伝言

森 松 定 男

私は昭和二年に小樽高商に入り昭和五年に卒業したので、丁度大野先生が海外留学となり直接ご教導をいたゞくことはできなかつたのですが、先生のある風格には何となく親しみと尊敬の念を懐いておりました。

卒業後一、二年して、たまたま瀧川に勤務することになりましたが、先生のご生家の近くが私の寄寓先で、そこへ端正なご尊母さまがよくお見えになっておりました。その後、ご縁というか、公私にわたって大変ご親交をいたゞきお世話になることゝなりました。

私は永年北洋相互銀行に在職いたしました、その間も何かとご指導をいたゞき、ご蔵書の一部を銀行にご寄贈下さって今も大野文庫として蔵されております。また、現在の会社に関係するについては、一つにはたまたまご縁筋のため先生の強いご要請があったことによります。さらにそのずっと以前、私の長女の結婚については本当の意味で先生ご夫妻

が媒酌の労をとっていたゞき今も感謝しております。

先生は年に何度か北海道へお出かけの時には時間を割いて私の店に、月に一、二度は東京の店にお出で下さつたのですが、ひとに気をはらせないあのご態度には若い社員も何かとご教示をいたゞき、何ごとにも綿密に念を入れてお話し下さるのが例でありました。お会いするのがお楽しみで、時折の電話のときは、さまざまに話がとんで、時には数十分ということも再々でありました。

亡くなられる前夜にも電話をいたゞきました。それは、先生宛に、趣味として交通の歴史を研究しておられる札幌の開業医のH氏から手紙をもらった、その内容は、昭和の初期に小樽の都市交通機関として懸垂電車(ケンスイ)（今日のモノレールの一種）の構想があつた（私も記憶があります）が、これについてH氏は小樽の図書館で調べたところ、欧州にその例があつて、滞独中の大野先生にその調査を依頼した経過が判つたのでその真相を知らせて欲しいとのこと、しかし先生は今、目が不自由なので返事をかくことは困難のため、H氏に電話をされたが通じない、そこで同氏に私からこの事情を伝えて、先生に直接電話を貰うようにして欲しいということでした。

った。学会のついでに立寄ったよといって、日銀の人事部長や支店長に挨拶してください。

先生は母校と緑丘会のことを心から愛し、心配されていた。昭和十三年の卒業生で十三年会という同期会をつくっているが、総会には何時も出席して昔話に花を咲かせてくれた。「試験問題の回答は簡単明瞭に、三行以内で書くこと。」というのが貨幣論や金融論を講義していた先生の口ぐせだったことをみんな覚えている。

私が先生とご昵懇じっこんにしていたくようになったのは、高商二年のとき、先生から白方酒造店の息子さんの家庭教師を引き受けないかというお話があったのが、きっかけである。当時家庭教師は小樽における苦学生の唯一のアルバイトであった。卜部岩太郎先生や大野先生が家庭教師の口を探して学生を援助してくださっていた。そんな関係で私は先生から個人的にご指導をいただく機会が多くなり、入舟町のお宅にもしばしばお邪魔するようになった。先生がお留守でも上り込んでお菓子をご馳走になったり、時には食事までいただくこともあった。奥さんや一人娘の英子さん（当時五歳ぐらい）にご迷惑をかけていたことをはっきり記憶している。

もう一つ先生とのご縁は昭和十二年夏、小樽市で開催された「北海道大博覧会」のお手伝いである。この博覧会の拓殖館に小樽高商から「北海道貿易の現況」というパノラマ式展示台を出品することになり、先生がその責任者になった。その時先生からのお話で、木村実君（東芝へ就職）と私とその説明係に頼まれ、夏休みを返上して助手をつとめたことがあった。この大博覧会は、満州館、朝鮮館、台湾館、産業館、仏教館、迎賓館などのパビリオンがあり、当時としては大がかりなものであった。開会直前に支那事変が勃発してピリオンがあり、無事終了、先生からビールのご馳走にあづかった。

開催が危ぶまれたが、無事終了、先生からビールのご馳走にあづかった。先生は今回先生のゼミナール員が中心となって先生の追想集を刊行することになった。先生は応召の繰返しや学長の就任などで直接ゼミナールの指導に当る期間は短かったので、ゼミナール員の数はそう多くない。しかしゼミナール以外で先生に個人的にお世話になつて卒業生は沢山いると思う。私もその一人である。卒業生を何時までも心配してくださる先生を持っていたことを私たちは幸福に思うとともに誇りにしている。

（昭13年卒、元関東銀行常務取締役、懶豊友社長）

一郎先輩や新執行部の配慮により一応の解決を見たことに先生もさぞかし地下で安堵されて居ることと思う。

筆を擱くに当り些か先生の私事を書き過ぎた様に思うが生前の好誼に免じて此の拙文を御許し願います。

(昭11年卒、(有)大益物産代表取締役)

日銀へ来られた大野先生

室 谷 邦 雄

先生が亡くなられる二か月前にいただいた葉書が私のアルバムにはってある。

「朝夕寒くなつて参りましたが、お元氣のことお慶び申し上げます。先日の写真お送りいただき有り難う存じました。良い思い出として保存します。右お礼まで。

白内障(眼病)の爲め自分で書いた字がハッキリ読めません。ご判読下さい。」



このお便りに出ている写真は五十六年十月二十二日に、先生が日銀本店においでになり、旧館二階の廊下に掲げてある新木栄吉元日銀総裁の肖像画の下で私が撮って差上げた写真のことである。新木さんは先生の私淑する郷里小松の先輩であり、常々お話しをうかがっていた。私たちの同期会においでになったとき、日銀新館ができてからまだ行ったことがないというので、私が案内しました。当日は日銀現職の林広

君(昭19)、浅野純一君(昭28)の後輩と、先生の奥さんの甥御さんに当る四十物昭三さん(北海タイムス東京支局長)と一緒に日銀の食堂で会食し、行内を見学してお帰りになりました。それから四カ月後に先生が亡くなられた。全く信じられないことであった。先生は卒業生の就職先を訪問して、激励してくださるのが楽しみの一つであったように思われる。私が転任する日銀の支店には必ずといってよいくらい先生が訪ねて来てくださ

すね」と言って二人で腹を抱えて大笑いして帰って来たのが先生との最後の別れとなってしまった。今にして思えば言わずもがなのことを言ったものだと思か後悔して居るところである。

先生はアルコール類は得意でなかったが大へんな食通であり、又年に似合わぬ健啖家であった。麵類なども殊の外好物とされて居った。之に就ては奥様より聞いた裏話しがあつて何でも小樽の新婚時代は家計の遣り繰りが儘ならず月末になるとどうしても手許不如意となり近所のそば屋より付けで出前を取っては急場を凌いだもので、その為には何時の間にか一廉かのそば通になったとのことである。

先生の家庭は真に和やかな家庭で常に先生を中心とした和氣藹々たる雰囲気きんぎに包まれホームドラマに出て来る様な模範的家庭をそこに見る様であった。私の訪問の際も何時も家族の方も話の輪に加われ、談笑裡に思わず時を過ぎて長居するのが常であった。私が頻繁に先生宅に出入りする様になったのは勿論先生の教育者としての人柄に引かれたことであつたが先生宅の暖かい家族的雰囲気きんぎに引かれた為でもあつた。

只先生としてさぞかし残念であつたと思われるのは奥様が極端に乗物に弱い為、連れだ

つて好きな旅行を楽しむ機会に恵まれなかつたことではなかつたらうか、この事は先生が亡くなられてから奥様が涙ながらにつくづくと述懐されたことでもある。

先生は常に緑丘の現状を憂いて居られ特に学園に対しては、その生涯を母校一筋に捧げられ又大学昇格に当つてはGHQと渡り合つて唯一の単独の商科大学の昇格を果され、その初代学長を勤められたこともあつて一入の愛着を持って居られた。時の流れとは申せ、あの小樽高商時代の良き伝統が次第に失われ地方の一大学の存在に墮して行くのが真に残念だと申され、又緑丘会に対しても耳痛い話だが必ずしも満足はされて居らなかつた様
思う。

先生の緑丘を思う真情は五十六年春の小樽銀鱗荘に於けるさむらい会四十五周年記念大会時の記念スピーチの中で余すところなく吐露されて居り、当時の録音を今改めて聞き直して見ると先生の熱情がひしひしと今更の如く伝わって来る様である。此のスピーチを「自分の遺言として」聞いて置く様申されて居るが正しく之が緑丘に残された先生の最後の教訓となつたのである。

最後に先生が解決を熱望して止まなかつた学園の拡充資金の処理に就ては幸いに西野嘉

東京住まいの先生

山口 恒四郎

私が先生宅に出入りする様になったのは偶々五十一年春に奥湯河原で開催された卒業四十周年記念さむらい会（昭和十一年卒業生の同期会）の席で御招待した先生と挨拶を交した際に当時私が住んで居った小金井の家と国分寺の先生宅が極く近いことが判り、その時以来のことである。小平に転居後もバスで行けば至近距離にあり、又私が良く休日を利用して骨休めに行くラドン健康センターが先生宅の近くにあるので、その折り返る機会が多々僅か五年有余の付き合いではあったが緑丘関係者の中では晩年の先生宅に最も足繁く出入りした一人ではなかったかと思う。当時の日記を繙いて見ると凡そ年間六、七回の割りでは先生宅を訪ねて居り、歌舞伎やオペラの観賞、喰べ歩きのお伴等を加えれば先生の嚙咳けいがいに接する機会が如何に多かったことかと今更乍ら当時のことが懐しく思い出される。

先生は生前如何なる訳か家族の方にも私にも「僕の死ぬ時は病氣などしないで、あっさ

りあの世に行くんだ」と冗談まじりに申されて居ったものだが、正しくその予言通り実行された訳で不思議でならない。

先生は学長時代にくも膜下出血と言う難病を患われ、そのために学長を退かれたのであるが、幸い後遺症は無かったものの、その病歴のことでもあって健康管理には不断の注意を払われて居り、月二回は必ず霞が関の岩井診療所（岩井医師は大正五年卒の青田滝蔵先輩の女婿に当る人）に健康診断を受けに通われ健康保持には万全を期されて居ったものである。亡くなられる迄凡そ足腰の衰えなど見受けられず外出の折りなど私の方が寧ろ後よりついて歩かねばならぬ程かくしゃく嬰鑠たる元気であった。その年の新年挨拶に伺った折りも旧臘崩されて居った体調もすっかり回復されて血色も良くアルコール類を余り嗜まれない先生にしては珍しく数杯の盃を重ねられ頗る元氣の様に見受けられた。まさかその月の終りに急逝されようとは夢にも思われなかった。その節のことを思うにつけ今以て慙愧の念に駆られるのだが、どういふ話の序であったか忘れたが、談偶々墓地の話になり、先生のお墓と私の墓が同じ西多摩霊園にあり、又宗派も同じ浄土真宗なること、その上先生のお墓が私の墓に行く途中にあることまで偶然に判明し「先生とはあの世に行っても近所付き合いが出来ま

お墓参りに参加してしてくれた。うれしかった。昭和五十年には故先生の五十年忌を、少々くりあげて、東京と横浜で営んだが、大野さんは東京でのこの行事を喜んで手伝ってくれた。その年の九月には「左右田哲学の回想」という一書を発表したが（創文社刊）、この書中にも大野さんは追憶の一文を寄せてくれた。

その大野さんとも、いよいよ今生で、お別かれせねばならぬ日が近づいてきた。むろん、そんなことは、わたしたちが知ろうはずはなかった。

昭和五十七年の一月二十日頃、わたしはいつものようにその日の新聞をひろげて、活字の大きい新刊本の広告を見ていた。そしたら、人もあろうに、大野さんの名が出ているではないか。――

“大野純一訳、クリシュナムルティの瞑想録”

わたしは、大野さんは偉いな、学長さんの肩の荷が下りたら東京に出て、せっせとインド宗教思想の研究をしていなさる。しかし待てよ、大野さんのご専門は貨幣論であったな。それが晩年になってインドの宗教思想のご研究をなさる。少々、飛躍が大きすぎるが根が哲学だから関係がないとはいえない。ようし、とりあえずお祝いの電話だ。――そ

う思ってわたしはすぐに、国分寺のお宅へ電話した。

電話口は大野さんはすぐに出てきた。おだやかな、しかし元気な声が返ってきた。

「本どころか、去年の秋から調子が悪くてね。だいぶ良くなった。……春になったら、

どこかで、お茶でも飲もう。」

これが最後のおことばとなった。それは大野さんがにわかにお亡くなりになる十日ほど前だった。

この本の訳者の“大野純一”というのはその後になって、やっぱり一ツ橋出のお若い先生で、まったく別人だとわかったが、どういうものかわたしには、それが別人だとは思えず、しずかな中にも人の心をつよく打つ大野さんが憶われて、いまにも、「春になったら、どこかで、お茶でも飲もう」といって、電話がくるような気がしてならない。

（大9年卒、元小樽高商教授、元日本人口学会々長）

会がなかった。大野さんと知り合ったのは一ツ橋の学園で、その師匠も同じ左右田喜一郎先生のゼミ生になったときだった。

左右田先生のゼミは入門のとき論文試験とかいって、ひどく面倒なところだった。わたしは学問の革新でもやろうと思って、その当時、一世をどよめかせていた経済哲学の門をくぐった。まさかここには緑丘の出身者はいないだろうと思っていたら、一年さきに東京に出た大野さんは、何を夢みていたのか、やはり経済哲学のゼミにいた。そんなわけで大野さんとのつきあいは、東京へ出てからと言った方がよい。

大野さんは一ツ橋の昇格前の専攻部を出てから母校にお帰りになった。わたしは一年あとで、しかし今度は昇格後の最初の大学卒業生として、その一ツ橋で知り合った室谷さん（このかたも今は亡い）と一緒に、小樽に赴任した。

その頃、東京方面から、緑丘に縁故があったり有名な学者になられたかたをお呼びして臨時講義をお願いした。その臨時の先生に、先年、一ツ橋へ転じた金融論の井浦先生が見えたときは、大野さんとわたしとはその井浦先生のお伴をして、定山溪温泉へ行ったことがある。その当時、定山溪へは豊平から電車が通じていて、客もまばらなその車中で、井

浦先生をそっちのけで、黄色い口ばしの二人は学問の方法論というやつで、大声あげて論じ合っていた。

ドイツへの留学も大野さんとは相前後したときで、日本人がよく行くベルリンの或る日本式レストランでおちあい、そのベランダでハンブルグから出ていらした大野さんご夫妻のすがたをカメラにおさめて、緑丘学園の新聞にそのご動静を伝えた記憶がある。

大野さんがご帰朝になってから数年してマルクス貨幣理論の批判とかいう一書を執筆された。その当時はマルクス主義全盛の時代だったので、その批判では少々時期が悪いと思っただが、大西猪之介全集を出した東京宝文館が引き受けてくれたのでそこから出版することになり、むかしの四六判二〇〇ページ前後の本で、たしか『マルクス貨幣論批判』とかいう書名になっていた。出来上がったその一本を大野さんから頂いた。

その大野さんが学長さんの任務を了えて東京にお移りになった当時、ずっと前から東京に出ていたわたしは、生き残りのまったく少なくなった（はじめから少なかったが）左右田ゼミの出身者たち（全国で十名あまり）に連絡をとって、毎年、故先生のお墓参りをしたり、何年かの記念の法要を営んでいた。どちらから連絡しあったものか、大野さんはこの

先生に最後にお目にかかった時は、久木久一教授のお葬式の時であったが、その折も又小樽商大と書物のことであった。その夏は、私は一橋大学後援会資金でハーヴァード大学に再留学をする準備をしていたのであったが、小樽でご一緒することも長かった古瀬大六南山大学教授のお父上の英語学の古瀬良則一橋大学名誉教授の蔵書を一括して残してくれる所に処分したいというお話を古瀬教授からうかがって、小樽は浜林生之助先生の文庫も、北海道大学に行ってしまうっており、英文学の文献は、多くの碩学の居られた割には系統的には入っていないから、この際何とか小樽に入らないかということでも走りまわっており、大野先生にも相談していた。大野先生は小樽が入用でなくとも、北海道にも必要なところがあるかもしれないから、とお気に留めて下さっていた。かつての同僚であった教授が、久木教授にしても自分より若いのに、先に亡くなられるのを見るのは哀しいと葬儀委員長として挨拶をされ、お忙しそうであったのにもかかわらず、帰り際に私を呼びとめられ、心当りの所を当ってみたが、古瀬文庫の件は駄目であったという話をして下さった。

その半月後にボストンに私は旅立ち、先生の訃報に接したのは、その冬であった。私の同期の人々の努力で「小樽商科大学へ古瀬文庫を贈る会」の趣意書が配られたのはその直後であった。

今春、小樽商科大学を訪れた際、洋書一八〇〇冊の古瀬文庫が、無事小樽商科大学附属図書館に寄贈された協に、今回大野文庫洋書一三〇〇冊が、御遺族の手で、先生のお言葉通り寄贈され配架されているのを見ることが出来た。その書棚の脇から、先生が顔を出されて、「早川文庫は洋三五〇〇冊、和五〇〇〇冊もあるけれど、ぼくの本も、横に並んで見劣りはしないだろう」とにこにことおっしゃられるのではないかという錯覚におそわれた。

(昭33年卒、元小樽商大助教授、一橋大学教授)

晩年の大野さん

南 亮三郎

大野さんとは緑丘学園で同級だった。同級といっても、あの当時は中学出と商業出とは別クラスであり、わたしは京都の商業出であったので、大野さんとはことばなどかわす機

そうに話してらしたことが印象に残っていたこともあって、小樽に赴任してから、同文庫を調べてみて、確かにすぐれたものであることを知っていた。それだけに、小樽の様に、資金力の乏しい国立大学で、一つの優れた文庫を手に入れる迄には、多くの人々の蔭の好意があるものだ、先生のお話には私は感銘を受けた。

大野先生のお話では、鬼頭文庫は、実は二つあって、今度の大战の際に貴重書を疎開され、そちらの方がかえって戦災にあい、手元におかれた方が助かり、それが小樽にあるということであった。今と違って複合技術の発達していなかったただけでなく、経済学そのものがヨーロッパで生み出されたものであったために、その学問の形成過程の学説的研究が、研究手法の大きな比重を占めていた当時では、留学の際に古本屋を廻って購入するか、手で書き写すことが研究者の研究過程で大きな比重を占めていた。大野先生が本を集められたのもドイツが第一次世界大戦で敗れ、インフレのなかでドイツの学者が窮迫して本を手放すという、日本人にとっては好運な状況のなかであったとはいえ、限られた留学費のなかで、良書を的確に選別して集めるには、学者としての識見が問われることはいうまでもなかった。マルクスの「資本論」の初版本を購入されたときの詳しい経緯もその日

うかがった。帰国後は、古本屋のカタログでの高垣・鬼頭・新庄（神戸商大）・高橋（慶応義塾）諸教授のイギリス完全主義論争などのパンフレット類の苦勞しての蒐集、お互いの集めた資料についての情報交換があったという。

先生の長いお話をうかがっていると、貨幣論を中心に集められた大野先生の文庫は、同じドイツで集められたにしても、早川先生の文庫とは、当時の皆の競って読んだ代表的な文献は重複するにしても、そんなに重複するとは思われず、若気のいたりでは不躰にも「早川先生の文庫と重複するから小樽には不用だなどとおっしゃらず、やはり先生の文庫も小樽に欲しいです」と申しあげてしまった。先生は一向に気を悪くされた風情もなく、ここに「もう今では（病後はとの意味）すっかり学問から遠ざかってしまっているけれど、手元から本がなくなると、学者をすっかり廃めた様で淋しいから、ぼくが生きてい

る間は手元に置かせて欲しいな。死んだら小樽に寄贈するよ」とおっしゃられた。その後先生は、暖い東京に居を移され、私も一橋大学に移り、偶然先生のお近くに住む事になり、幾度か遊びにうかがった。ある日書庫を見せようと、私を案内して下さって、幾つかの稀観書を一冊ずつ出して見せて下さった。

科大学附属図書館では、重複するものもあることであろうし、特に貴重なもので小樽にないものだけ何点か購入させて頂いて、残りは、御寄贈頂けないかという申し入れをした。とりあえずどの様な文庫であるかを精査するために図書カードを借用し、文庫の構成を調べ作業を私がやっております、それがどんな状況かと、大学にお立寄りになった機会に、大野先生は、私の部屋をのぞかれた様であった。

先生は、その日は珍しくくつろがれて、色々と雑談をして帰られた。先生は大学の事をいつも色々と考えて下さっていたが、そこでは、学問をする場所としての大学の理想像があり、それはまた図書館の図書の充実を大きな柱としていた様である。その日の話も、小樽経済専門学校最後の校長であり、小樽商科大学初代の学長を勤められた際の大学へ昇格し、さらに昇格後は発展のための資金集めのことであった。

かつて緑丘会宿舍と呼ばれていた最上町の教官宿舍は、その経済専門学校昇格期成会の資金で土地購入・宿舍建設がされたものであり、昇格し終えて、期成会が解散するとき、緑丘会に委託されたものである。従って、それは同窓生の寄金もあるが、それだけではなく、小樽市民をはじめ、多くの人の浄財でなされたものであることを、松田も、商大

の教官であって、緑丘会員であるのだから、良く記憶に留めておいてほしいというのが、先生のお話であった。昇格期成会の資金で手に入れた今一つ重要なものに、鬼頭仁三郎一橋大学教授の文庫があるということであった。鬼頭教授は、ケインズの「貨幣論」研究者のなかで、第一人者といわれていただけでなく、一橋大学の前身の東京商科大学が、大学として発展するに当って、図書館専任の助教授席を設けた際にその任につかれただけあって、しかもやはり貨幣論専攻で欧米文献蒐集で著名の高垣寅次郎教授の薫陶厚かったといわれており、その文庫は多くの人の注目するものであった。

大野先生は、貨幣論を専攻されていたこともあって、鬼頭教授とは親交もあり、小樽に金融論の特別集中講義にお招きした。然しその年鬼頭教授の講義が実現する前に急逝されてしまった。御遺族の方は、それも何かの因縁であろうから、本人の替りに文庫が小樽に行くのも良かるうということ、申し出のあったあちこちの大学の図書館ではなく、昇格期成会のために譲り頂いたということである。

私は一橋大学の大学院で鬼頭教授のお嬢さんと同期であって、何かの折に私が小樽商大出身であるということを知って、小樽はどうとう文庫の目録を出してくれなかったと淋し

「大野純一先生追想集刊行会」世話人・発起人氏名

○世話人(敬称略) () 内卒業年度

- 竹村吉右衛門(大10) 大島三郎(昭10) 伊原利勝(昭14)
- 古関周蔵(大13) 大田末穂(昭11) 澤村重一(昭14)
- 杉江猛(大14) 山口恒四郎(昭11) 新谷篤太郎(昭15)
- 西野嘉一郎(大15) 田中正三(昭12) 杉浦重敏(昭15)
- 大谷敏治(大10) 飯川益男(昭13) 長谷部亮一(昭19)
- 中田乙一(昭7) 木村章三(昭13) 麻田四郎(昭16)
- 八木勇平(昭8) 室谷邦雄(昭13)

○発起人(敬称略) () 内卒業年度

- | | | |
|-----------|----------|------------|
| 原谷一郎 | 金卷賢字(昭2) | 塚越誠(昭9) |
| 松本浩三(大4) | 渡辺祥吉(昭2) | 野口正二郎(昭10) |
| 村川嘉一(大7) | 武岡嘉一(昭3) | 中野孝太郎(昭11) |
| 渡辺金吉(大7) | 板垣與一(昭4) | 小島典春(昭11) |
| 野尻善次郎(大8) | 服部政一(昭4) | 戸塚元一郎(昭11) |
| 太田省三(大11) | 池田昇一(昭4) | 牧田恒雄(昭12) |
| 田中修吾(大13) | 森松定男(昭5) | 若山永太郎(昭13) |
| 寿原九郎(大13) | 川田稔(昭5) | 大塚誠四郎(昭13) |
| 森下弘(大14) | 石河英夫(昭7) | 小田賢一(昭15) |
| 大平善梧(大15) | 飯田尚文(昭9) | 矢野正康(昭15) |
| 實方正雄(昭2) | 渡邊文郎(昭9) | 栗原琢(昭17) |
| 木曾榮作(昭2) | 横山桂二(昭9) | 手取貞夫(昭17) |

目として、本年九月、今・助教授（金融論担当）がワシントン大学（アメリカ・シアトル）に留学することになっています。大野先生の（そして私の）悲願がようやく達成したわけです。本当に良かったと思います。来年三月、私は定年を迎えて、五〇年登り続けた「緑が丘」を下ります。大野先生の後ろで旗を振りつづけた三十有余年、そして最初の留学生の出発を見届けての退職。私は何の心残りもなく、満たされた気持で緑丘を去ることができます。これも大野先生のお蔭です。

（昭16年前期卒、小樽商大教授）

先生と図書館の本

松 田 芳 郎

地獄坂を昇る道の両脇には、大きなアカシアの木（正確にはハリエンジュと呼ぶとか）が並木をなして、やがて小樽商科大学短期大学部の建物があり、その裏の傾斜地に、

栗林氏の寄贈された木造の教官研究室があった。その前にもやはり大きく伸びたアカシアがあり、花季には、窓をあけるとあの花の香が春風と一緒に漂ってきていた。海の見える角部屋を研究室にもらって、五月のある日そこで窓を一杯にあけて故早川三代治先生の文庫の図書カードを机の上に拡げながら、文庫の特徴を調べて、文部省に特別枠の予算請求をするための文案を考えていた。ひょっこりと大野純一先生が、いつもの様に「やあ」と気軽に声をかけてこられて、大部分が早川先生の手書きである図書カードを手にとって眺めながら、「これが小樽商大に入ったなら、ぼくの蔵書と大部分重複するだろうから、ぼくの本は、小樽はもういらないな」とおっしゃられた。

早川先生が、昭和三十七年に亡くなられて、その文庫が、どこの大学に入るかは、各地の大学人の注目を浴びており、早稲田で親交のあった久保田明光教授は、わざわざ小樽に迄見にこられたということであった。心配をした私は、古瀬大六附属図書館長と浜林正夫教授と相談して、大野先生を介して、早川たけ夫人に、どの様な処分をなさるおつもりか、ご内意を打診して頂いた。その結果「バラバラにして売るなどということなく、早川文庫として一括保存する所なら手放してもよい」という御遺言であったということで、小樽商

ー・ケアー（雑草刈り、野鼠による食害の防除等々）という、文部省の予算規模ではきわめて小さいけれども、愛情と人手をたくさん必要とするような仕事は、国家予算の分捕りに浮き身をやつす文部官僚には最も不適当な分野だということでした。

植林事業の成否はさておき、それからというもの、文部省から独立した留学計画の確立ということが、大野先生ばかりでなく、私の悲願にもなりました。本学に大型コンピュータを導入する一つの機運となった「古瀬・麻田プラン」（『緑丘新聞』昭和三十二年六月二十九日）に、私はこのことを書きました。さらに本学の創立五十年を記念して実施された緑丘会の一億円募金計画で、私は「募金趣旨書」（その起草を私は命ぜられました）に、若手教官の海外派遣を募金目的の一つとしてはっきり設定しました。

この募金事業は先輩各位のお蔭で大成功を収め、その結果、現在の本学管理科学学科の基礎が確立しました。しかし、ここでも残念なことに、教官の海外派遣計画は実現しませんでした。というのは、文部省がそれを認めなかったからです。理由はこうです。この募金事業には免税措置の特権が与えられている。免税措置を受けた募金は国有財産（有体物）の取得に支出さるべきであり、留学という人件費的費目には支出まかりならぬというので

す。はっきり言えば、留学費は飲み食いに濫費されやすいから駄目だということです。それを聞いて、当時の加茂学長とともに私はあきれてしまいました。いまならいざ知らず、二十五年も前の話です。いくら募金のカネとはいえ、とても十分なカネなど出せるものではありません。一人・一年・旅費込み総額一五〇万円、二年に一人の派遣といった程度のものをわれわれは考えていたのです。官僚のゲス根性と管理者的エリート意識に、私はいまま

なお大いなる不信感を抱いています。

一昨年夏（昭和五十六年八月）、大野先生がある年次の同窓会出席のため、小樽に見えられました。それには長谷部現学長と私も同席しましたが、その席上大野先生は、約一時間にもわたる長いスピーチで、文部省に拘束されない大学独自の研究費全確保の必要性を、声を荒げて訴えられました。そのとき私は、まさに三十年前の青年学長大野先生の姿をそこに思い出したのです。それが私が先生にお目にかかった最後でした。

昨年一月先生が急逝されてから事態が急変しました。先生晩年の強いご希望、緑丘会諸先輩の積極的なご理解、そして長谷部現学長の尽力、この三つがうまく噛み合って、緑丘会の援助による若手教官の海外留学が本年度から実現することになりました。その第一回

席をおかれることになった。当時、秘書室に勤務していた私は、週二、三回、社長とごいっしょに小樽から来られる先生を、身近かにお迎えすることができた。

北洋相互銀行の行内報「行友」には、昭和三十五年から四十一年まで十二篇の寄稿があり、金融、経済、時評、随想と幅広く、わかりよく執筆されておられる。

また、先生のご蔵書の中で和書千数百冊が銀行の資料室に寄贈されている。

卒業後も、なにかとお世話になっていた先生が、昭和四十二年の春、東京国分寺の家に移られ、小樽は急にさびしくなった。人は去ってから、その存在感がわかるという。いつまでも、大樹によりかゝったような安易な生き方はゆるされない。この時生きる姿勢を教わったような気がした。

人の一生には、ときに、どちらへ進むもうかと思う分岐点がある。あとから振り返ってその道が間違ったと思っても、もうやり直しはきかない。羅針盤のような的確な判断がほしい。父を亡くした翌年、学校に入った私は、無意識のうちに人生の大先輩である先生に、父の面影を重ねていたのかもしれない。

(昭25年卒、北洋相互銀行)

若手教官海外派遣の悲願

麻 田 四 郎

それは昭和三十一年の秋頃だったと思います。当時私は大野先生宅のごく近くに住んでいたもので、散歩がてらにしばしば先生宅にお邪魔しました。ある時先生は明るい表情でこう言われました。「ねえ麻田君。こんど余市の赤井川に植林をしたよ。三十年もすれば立派な樹になるから、それで君達若い連中を自由に留学させることができるようになるよ。」ちょうどその時、私は一年間のフルブライト留学から帰国したばかりだったので、先生のその遠大な理想と計画に大いに共感し、改めて敬意の念を深くしたものです。それから間もなく先生は病いに倒れ、植林事業は加茂次期学長以降に引き継がれました。それから三十年を経過した現在、この植林事業は完全な失敗に終り、現地は荒れた雑木林の姿で放置されているようです(かく言う私は一度も現地を訪れてはいません)。失敗の理由はいろいろありますが、要するに次のような事情です。苗木を植えた後のアフタ

羅針盤になつてくださった先生

河田照子

坂は長い。石ころ道を一步、一步ふみしめながら上る。桜の並木道をすぎ、校舎の裏山が迫ってくるように感じはじめると、やがて校門にたどりつく。昭和二十二年の春、私は小樽経済専門学校に入学し、はじめて先生にお目にかゝった。また二十歳そこそこの私にとって、先生は、はるか彼方の、手とゞかぬ距離にある立派な方でした。

昭和二十年八月、戦争が終ると、長い冬が終りをつげたように、人々はそれぞれに心にくぎりをつけて、出直しをはじめた。私の同期生にはそうゆう人が多い。しばらくの間、陸士、海兵の制服のまゝ授業をうけている人もいた。

前年、男女共学制度が制定されて、この年、はじめて入学した私達女性三人もこの仲間である。二人は女子医専（現札幌医大）を一年でやめて入学し、私は混乱期の教員生活に失望して学園にもどった。

ある日、私達は校長室によばれた。何か不自由していることはないか、希望があったら申し出るようにとのことである。もともと男性のために建てられた校舎に、女子用の設備はなかった。取りあえず、女子職員の更衣室、化粧室を使うことになった。

その後、GHQから、この年、はじめて実施した共学制度の実態を視察に来た。いろいろ質問されて、どんな答え方をしたか、もう覚えてはいないが、未熟な答えをさりげなく補っていたことは忘れられない。

こんなことがあって、普通なら校長室へ入ることもなかった私は、たびたび先生にお目にかゝって、なにげないお心づかいの中に、あたたかさを感じていた。

毎日、地獄坂をのぼりおりしているうちに、いつしか、その年も暮れた。正月三日先生のお宅へ年始に出かけた。さきに来ていた卒業生と歓談されていた先生は、学校ではみられない親しみやすさを持っておられた。まだ弱輩の私を話の仲間に入れてくださったって、違和感を感じさせないお話し振りに、はじめは、ただ、ぎこちなく坐っていた私も、次第に、この雰囲気にとけこんでしまっていた。

昭和三十三年、病をえて学長を辞任され、数年ご静養の後、北洋相互銀行に囑託として

―病名は、くも膜下出血であり、更に検査（髄液）を要するが目下のところ比較的軽症の様である。これは脳内出血と異なり後に手足の運動麻痺を残さない（前述ひと安心の理由である）―

蕭然として、固唾をのんでいた会場の空気が、やゝ和らいだ様に見受けられた。

くも膜下出血診断の決定的なきめ手は、血性髄液であり、これはこの日の夕方確かめられた。髄液というのは、脳室や、くも膜下腔にある無色水様の液体で、中枢神経系統の器械的保護を考えると考えられている。

この血性髄液は間もなく消失し、八日後の一月十六日及び十三日後の一月二十一日の両日の検査で、髄液は水様透明となり、顕微鏡検査でも赤血球は認められず、案じた再発もなく、順調に経過し、一月二十二日のロータリー例会で、このことを報告し会員一同安堵した模様である。

くも膜下出血の原因として、先生の場合、高血圧による脳動脈硬化性血管障害と考えその後の治療の中心を、こゝにおいた。

なお、奥様のお話によると、先生は昔から、夜半眼がさめると、読書する習慣があった

とのことで、これは早速やめていたゞいた。精神的な心労等が、くも膜下出血の誘因となる場合があるからである。

幸いにしてその後再発を見ず、血圧も安定して、一月末にはホテルから自宅へ帰り、以後順調な経過をたどり、翌三十三年七月には、名誉会員として、小樽ロータリークラブへ復帰され、私の主治医としての役目も一応終った。

先生五十八歳から五十九歳の間の出来事である。

（後記）

私は外出する時、いつも、侍の刀と称して、往診鞆を携帯する。急病人に遭遇した場合、鞆なしでは、医師として全く無力で拱手傍観する他ない。これが、はしなくもお役に立った次第である。

これは余談だが困ったことがある。

上京の折等も持参するが、携帯品取調べの折、注射箱と注射針が、いずれも金属の為、ひっかかり、医師である証明として、名刺を出さない限り、信用して貰えないことである。

（主治医、医学博士）

で参列することができた。偶々勲二等の高位叙勲を受けられた大野先生御夫妻と御一緒したが「あなたもか……」と云って大変喜んで下さって共に散策しつつ饗宴をいたゞいた。年齢に達すれば大抵高位叙勲に列せられる大学教授の中にあつて、在職中の功労は先述の通り優れて大きかっただけに「先生の勲二等は特別価値あり光榮の至りですよ」と祝福申し上げましたが「イヤ皆様のお蔭ですよ」とお笑いになつて居られたのが今も眼に浮んで来る。

以上思い付を申し述べて先生の霊永久に安かれと御祈り申します。

(大14年卒、北海道中央バス(株)相談役)

ある時期の主治医として

朽木英一

昭和三十二年一月八日(火曜日)、北海ホテルに於ける、小樽ロータリークラブのこの

年最初の例会日、会長大野先生は、その御挨拶の途中(午後一時近く)、意識を失つて倒れた。

会員一同の驚愕は勿論であるが、私は職掌柄、反射的に演壇に駆けつけた。先生は昏睡状態であるが、脈搏はしっかりしている。早速数名の会員が先生を担いで、ホテルの一室に運んだ。

応急手当をすると間もなく、先生は意識を回復したが、頭痛を訴え(1)。項部強直―仰むけに寝た病人の後頭部を両手で支え、枕を外して、頭を前後左右に動かすとき、健康人では何等抵抗がないが、脳膜刺戟状態がある場合は、抵抗を感じる―が認められた(2)。血圧は160―100でやゝ高い、手足の運動麻痺はなく、ババンスキー現象は認められない(3)。通常の脳出血―脳内出血―の場合は、必ず反対側の運動麻痺―片麻痺―が起り、ある操作により、ババンスキーという異常反射が、当該側母趾に見られるのである。

私は繰返し行つたババンスキーがでないのでひと安心した。そうして前記、1、2、3、に依り、くも膜下出血と診断し、例会場にとって返し、皆さんに報告した。

て居る最も古い人間であるかも知れず、その後聴講の度毎にこのことを思い出すのであった。地下で先生微笑んで居られるかも知れない。

二、大野先生は昭和二十一年小樽経専第四代校長に就任されたが、戦時中の混乱が尾を引き物資食料の窮乏甚だしく、学園再建には随分と苦勞された。と同時に「小樽経専昇格小樽商大設置期成会」続いて「小樽商科大学単独昇格運動」が緑丘会・小樽市民の間に強烈に押し進められた。そしてその中心的責任者として身心共に困憊の苦勞を重ねられたことは古い緑丘人の熟知のことであろう。

私は、「小樽商科大学期成会」の会長として資金募集に尽力された当時商工会議所会頭であり、中央バス社長の私の前任者である松川嘉太郎氏の会計責任者みたいな役をしていたので、大野先生との接触も多くてこの両運動に対する先生の辛勞の程も良く判り、小樽商大の歴史に不滅の功勞を築かれたことは誠に喜びと感謝の念に堪えないところであります。

三、昭和四十九年十一月発行「小樽ロータリークラブ四十年史」に大野先生が投稿された「感謝で過す日々」を転載御紹介する。

「私は昭和二十八年に推されて小樽ロータリークラブの一員に加えて貰ったのであるが、それは私にとって光榮と同時に大いなる幸運であった。と云うのは、三十一年会長を命ぜられて、翌年正月八日初会合の席で新年の挨拶後突然も膜下出血で意識を失ってその場に倒れたのである。が幸いにも会員の中に朽木・皆川・山本の名医が居られ、誠に適切な手当をしていただき、会場の北海ホテルもまた一カ月客室を安静のために提供することを許されたのである。その後今日まで十五年余何の後遺症もなく元気に毎日を過しつつあるのは、小樽ロータリオンであったればこそである。」

私は小樽クラブ会員中又在樽中欠かさず往診していただいた朽木先生及び、当時の北海

ホテルの皆様毎日感謝しつつ日を過しているのである。以上
ホテルの皆様毎日感謝しつつ日を過しているのである。以上の通りで御命運の良かったこと、周囲の条件が頗るラッキーだった結果だったと思う。その後東京に転任後もクラブの名誉会員に推されて、御来道の都度必ずクラブの例会に出席されては何時もこのことを繰り返して心からの感謝を捧げて居られた。

四、赤坂御苑園遊会で御一緒

昭和五十年十月三十日叙勲者に対する赤坂御苑園遊会に御招待の光榮に浴し、家内同伴

と満面笑みを湛えて喜んでいたがあの顔は「大黒様」の顔そっくりでした。

もう一つは、私が衆議院議員として東京にいた頃でした。都議会議員の選挙があつて私が国分寺を地盤とする候補の応援をしていた時でした。先生は学長を辞され、国分寺で自適しておられたのでした。選挙カーで私がマイクを持って呼びかけたら、誰か遠くで手を振って、追いかけて走って来る姿が見えた。車を停めたら息を切らして、走って来たのは大野先生でした、吃驚でした。

「君の声を聞いてすぐ分ったよ」と、並立の水鏡流が空を飛んで、小樽の町を走り回った。情勢など、時間がないのでハラハラしている選挙関係者をよそに、ゆっくり話した超然とした懐しい思い出であります。

最後の一つは、私が国政を勇退した時でした。乞われて急死した仁木町長の後釜になった時、突然二、三の教え子と一緒に町長室に入って来られたのには吃驚仰天でした。

やさしい細い声、くったくない笑い顔、私の臉に焼きついて離れません。

「元気なのですか」と言ったら

「この病気、直らないのです」

と淋しそうに多くを語らなかつたがそれが最後でした。人間としての大野学長は私の脳裡に焼きついて離れません。

合掌

(知人、元国会議員、北海道仁木町長)

小樽ロータリークラブと先生

杉 江 猛

一、大野先生は大正十一年私達入学の年に小樽高商に赴任されました。その年帰省した時実兄(大正九年東京高商卒)から、「お前の学校に専攻部を出た大野純一という先生が居るだろう」応と答えたら「北海道人らしからぬよい恰好の人で良く勉強もするそうな、而かもフィアンセかも知れないが美人と連れ立って良く散策しては我々を羨しがらせたものだ」と。その美人は現夫人の姉さんであることは後年判ったわけだが、先生の艶聞を覚え

職申込み企業訪問された時のことだった。私は重役の乗用車を借りて、大阪市内の各社を案内した。

当時松下電器本社の人事部長は緑丘人、故桑野泰次郎君(昭和十七年卒)であった。その時の車中談だが「今日桑野君に会って、どんな生徒を推薦したらよいか、と尋ねたら木村章三さんのようでない人を頼みます。と言ったよ。」と、私に言われた、「先生、小樽には私のような生徒しか居ないんじゃないですか」これは私の答、先生はハハハと明るく笑声を立てられて「そうだよ。小樽では君のような生徒を専ら育てているんだからね」とにこやかなお顔を私に向けられた。私の前科というと、戦後初代の中央執行委員を三年半やって、当時の松下幸之助社長に対峙して、団体交渉の矢面に立った実績のことなのだ。想えば小林多喜二先輩の後輩にも当るということで警戒された憶えも多少はある。

あの車中で私に向けられたやさしい笑顔、あのお顔は一生私の脳裡から離れることはない。

(昭13年卒、松下電器産業(株)客員)

水族館と小樽短大

島 本 虎 三

大野先生について忘れられない三つの懐しい思い出があるのです。

一つは私が血気盛りの小樽の市議会議員で、道立水族館を小樽に誘致する為に、愛郷の精神をもって熱をあげていた時でした。小樽の市議、道立の議、中央の議、強敵は室蘭市選出の道議会議員、道立の水族館は室蘭だ、小癩なことを言うな、と言って譲らないのです。遂に知事、田中敏文氏が仲裁に乗り出し、水族館は室蘭にするがその代り小樽市には商科大学の短大をと言いついたのです。勿論、私は不満だったが喜んでるのは大野純一学長だったのでした。

小樽に出来ることに決った時、どこか学校後援会関係のクラブで牛鍋をつついて、祝ったのでした。出来上った建物、当時は華奢で小綺麗で何となく、キャバレーみたいな印象だったので大野学長に話したら、「島本樽労働議長がキャバレーみたいだと言っていたよ」

若い助教、講師たちは、自分こそが小樽の将来を担うのだという熱意と自信とに燃えていたのです。私もまた一人の助教として、その例外ではありませんでした。

公私にわたった私の最大の庇護者である大野学長に弓を引くことは、私の心に大きな負担となりました。しかし、歴史の大きな流れは、そのような一人一人の当事者の細かい心の襞を押し流して進行するのです。昭和三十二年一月に学長が脳出血で病床に就かれるようになったのも、このときの御心労が大きく響いていたのではないのでしょうか。教職に耐えないと自覚された大野学長は、教授会に学長辞任を申出られました。教授会を代表して室谷賢治郎教授と私とは、学長の御宅に御伺いして、辞意を翻意されるよう御願いし、当分の間木部教授を学長代行とし、全教官一致協力して校務に当る決意であるから、決して御心配はいりません、どうか専心御療養の上、一日も早く全快されるように、と誠意をもって御話し上げました。学長も全教官の誠意を諒とされ、辞意を撤回されました。全教官は、教授会制度についてその見解を異にしても、大野学長が小樽の単独昇格のために、厳しい生活環境、交通事情の中で、その身心をすりへらすような努力をされたことを十分に了解し、敬意を払っていたのです。

一生を小樽でと考えていた私も、昭和四十八年に横浜国大に移り、小樽を離れました。しかし、在樽二十年、その間に、古瀬麻田プランの発表、管理科学科の設置、計算センター及び新図書館の建設等、私としてその全力を小樽のために投じたつもりです。個々の仕事については、人によりその毀誉褒貶は様々でありましょう。私自身としては、その評価が何れでありましても、他大学からの勧誘を退けて、小樽のために二十年間を捧げる決心をさせたのは、私の大野教授の全人格への傾倒であり、その御厚意を無にしたくないという私のささやかな良心であったことを信じて頂きたいと思っております。

(元小樽商大教授、南山大学教授)

笑顔

木村章三

大野先生が大阪に來られたとき、それは昭和三十八年の夏だったか、明春の卒業生の就

又、故先生の御交際範囲が広範にわたっておられた為、生前御親交を賜った方の中にも御執筆依頼の洩れた方もあったかと存じますが、なにとぞお許しのほどお願い申し上げます。

更に全体の体裁上、第二部における玉稿の用語、題名等にも若干の変更をさせていた場合があります。又、玉稿の配列につきましては、其の内容により、大野先生の若かりし日よりの年代の順序にさせて頂きました。併せて御了承下さいます様お願い申し上げます。

本追想集刊行会の世話人、発起人の皆様には、格別の御支援、御協力を賜りましたことを茲に厚く御礼申し上げます。

写真の大半は大野家より借用しましたものですが、御令息喜三郎氏には、御多忙にも拘らず、あらゆる面でお骨折頂きましたこと厚く御礼申し上げます。

尚、本追想集の第一部は母校学長長谷部亮一先生御一人で取捨選択、集録していただきました。世話人の御一人ではおられますが、献身的御尽力には衷心感謝申し上げます次第です。

又、大谷敏治先生（大10卒）、山口恒四郎氏（昭11卒）、牧田恒雄氏（昭12卒）、室谷邦雄氏（昭13卒）、伊原利勝氏（昭14卒）、林広氏（昭19卒）の諸兄並に緑丘会々報委員の皆様には大変御世話になりましたことを申添えておきます。

本追想集企画後、約一年近くになりますが、この間、発起人のメンバーで、松本浩三氏（大4卒）、湊静男氏（昭3卒）、寿原九郎氏（大13卒）、田中正三氏（昭12卒）の四名の方が、又、御執筆いただいた秋野武夫氏が、本書の完成を見ずして御逝去されました。冒頭の「刊行のことば」にあります「故人老いず、生者老いゆく恨みかな」の句を泌々と味わいつつ、心から哀悼の意を捧げる次第であります。

終りに、本追想集が、故大野先生の学徳、限りなき母校愛に燃えられた人間像を通しての「緑丘学園外史」として広く永く読みつがれることを切に祈る次第です。

（昭13年卒、元三井銀行取締役、三建商事（株）社長）

りたいと心に決めておりました。指導教官であった増地庸治郎教授の御勧めを断って東芝に入社致しましたのも、私が最も深い関心をもっておりました産業心理学、労働科学の研究には大学よりも現場の方がよいと考えたからです。ところが、間もなく始まった太平洋戦争は私のこの計画をすっかり打ちこわしてしまいました。

五年にわたる海軍生活の後で、東芝が私に与えたのは純然たる会計業務でした。事務的な仕事に打込めなかった私は、東芝本社労組の専従者となり、調査部を設けて、力による団体交渉を客観的データと論理に従う交渉に変えようと努力致しました。結果は、若い理想主義者の敗北に終わったことは、いうまでもありません。就職先のあてもなく会社をとびだした私は、失業手当を貰うために淀橋の職安通いを続ける破目に陥ったのです。

この人生最大の危機に直面した私の前に現れ、一たん崩れかけた学究生活への夢を再び現実のものにすることができるようにして下さったのが、大野学長でした。

昭和二十四年の冬だったと思います。学長は荻窪の拙宅にお見えになり、当時一橋の英語の教授であった私の父と共に小樽に移るようにとのお話がありました。一橋の方の都合もあり、私一人が御厚志を受けることになりました。とはいっても、長い軍隊生活を送っ

た私には経営学の授業を担当するだけの業績はありません。それにもかかわらず、翌二十五年四月に小樽経専教授に任命の上、一年間の在京研究という破格の取扱をして頂いた背後には、大野学長の並々ならぬ御配慮があったものと思われれます。

昭和二十六年四月二十五日、家族三人は煙筒のすす汚れた雪のまだとけ切っていない小樽の土を初めてふみました。月給は半年ごとに手取り三、五〇〇円、生にしんが一番のご馳走でした。最大の悩みは図書費の不足でしたが、大野学長は、緑丘会の幹部の方々に私を紹介し、図書の入手に個人的な便宜を図るよう依頼して下さいました。そのおかげで、其後も親しくおつき合いできるようになった緑丘会の皆様は十名以上に達すると思えます。中でも、加地幸一、佐々木周一、小貫武、古関周蔵の皆様的一方ならぬ御厚意は、小樽を去った今でも、忘れることはできません。

昭和二十八年、学長選考規程の改正を契機として、従来の教授中心の教授会を、助教授講師までも含めた全教官の平等の議決権を認める民主化された教授会に改めようとする動きが、若い教官たちの心を把えました。旧高商の校長独裁の時代に比べれば、新制大学における教授の合議制は民主化への第一歩であったことは、疑うべくもありません。しかし、

は、その年の十一月に父が死んだのち、改めて大野先生のところへお願いに上がり、翌年四月、長谷部現学長、麻田教授といっしょに経専に採用していただいたのである。といっても学部を卒業したばかりで何を講義してよいか、まったく心細い教師だったのだが、これも大野先生の特別のはからいで、その後、半年ずつ二年間、一橋大学へ在任研究にだしていただけ、改めて勉強のやり直しをすることができた。これでようやく研究者として自立する土台ができたので、これらのことはすべて大野先生のお蔭である。

若気のいたりというか、ずい分勝手なことをして大野先生に御心配やら御迷惑をおかけし、申しわけないと思っっているが、先生はつねに暖かく私の成長を見守っていて下さった。ときにはお小言を頂戴し、ときには励ましのお言葉をいただいた。私にとっては本当に父親代わりの先生であった。昭和二十八年に私が結婚したときにはお仲人もしていただいた。まだ物資の乏しいころだったので、いまのように派手な披露もできず、小樽駅前通りの昔の北海ホテルでのささやかなティー・パーティーだったが、形式的な挨拶ではなく、心のこもったお祝いの御言葉をいただいたことは、いまでも忘れられない。

大野先生が東京へうつられてからは、しばらく御無沙汰をしてしまった。やがて私も東京へうつり、いつのことか忘れてしまったけれども、緑丘会の何かの会合で久しぶりにお目にかかった。相変わらず御元気で、昔、「青年学長」といわれたころの颯爽とした雰囲気はまだ残しておられ、内心ほっとした記憶がある、その後、二度ほど国分寺のお宅へお邪魔させていただいたことがある。そのうち一度は、愚息の就職についてのお口添えのお願いにうかがったもので、親子二代にわたって大野先生の御世話になるとは、本当に申しわけない次第と恥じいっている。御恩返しもできないままに、大野先生の突然の御逝去の知らせをいただいた。しかし今でも天上からじっと暖かく見守ってくださるような気がしてならない。

(元小樽商大教授、一橋大学教授)

在樽二十年

古 瀬 大 六

昭和九年に東京商大(現在の二橋大)の予科に入学したときから、将来は学究生活を送

父親代わりの大野先生

浜 林 正 夫

大野先生のこととなると、何から書き初めてよいのか分らない。何しろ、先生とのおつきあいは私とのあいだよりも、むしろ私の父とのあいだが始まりであって、私が物心のついたときにはすでに大変身近かなところに大野先生はおられたからである。

いや、あるいは物心つく以前からのおつきあいであったといえるかもしれない。たしか昭和二年だったと思うが、大野先生と私の父がいっしょに外遊している。そのとき、神戸まで私は母につれられて見送りにいった。といっても当時まだ一歳半ぐらいだったのだから、もちろん私の記憶にはないが、鹿島丸の甲板のうえで母に抱かれた私が大野先生や父やそのほか見送りの人数人といっしょにうつった写真がある。多分、これが私の生まれてはじめての写真だと思うが、その時すでに大野先生がそばにおられたのである。

父はよく大野、木部両先生と花札をしていた。お金はかけていなかったから、現代風に

いえば家庭マージャンのような罪のない遊びだったのだろう。会場は廻りもちでそれぞれのお宅だったのだろうと思うが、私の家の番の時には小学校へ入るか入らないかぐらいの私が、時々どきどきにいったらしい。食事中休みの時には私が余興(?)に「タコ踊り」をしたという。これも私の記憶にはないのだが、私が成人してからのちも大野先生は「君のタコ踊りは」と時々話しておられたから、よほどの名演技であったにちがいない。

そこで思い出は途切れる。多分、大野先生が出征されたためだろう。私もやがて家を離れて東京の大学へすすんだ。戦後の記憶は父の病床からはじまる。昭和二十二年の春から寝込んでしまった父のもとへ、大野先生は何度も御見舞にきてくださったようだが、いよいよ死期の近づいたのを察したのか、父は大野先生に私のことを頼むといって履歴書などをお渡ししたらしい。そのころ東京にいた私のところへは、小樽へ戻って当時の経専の教職につく気はないかと父から手紙があり、もしその気があるのなら大野先生によくお願いしてあるから、ということであった。

そのころは経専から商大への単独昇格の運動のはじまっていたところで、大野先生はそのために文字通り寝食を忘れて献身的に活動しておられた。経専へ奉職する決意を固めた私

そ、小樽商大のためにその尊い生涯を終始一貫挺身しておつとめ下さった方でございます。先生がこうして背負いきれないほどの重い荷物をかかえて、日夜東奔西走して下さったのも、先生の心の奥に遠大な構想とその実現のための闘魂を秘めておられたことも見逃してはならないと思います。先生の身近かにいたせいで、平生の会話のうちに、大学の内外からのしかかる障害を乗り越えられることの並大抵でないこともたびたび伺いました。こうして大変ご苦労なさっていた先生に、新参者の私は、四囲の事情にうといせいもあって、門前の小僧のように、何ひとつお役にたちえなかった自分の不甲斐なさを心残りに思っております。それにしましても、恐らくこういうことを申すこと自体、先生が最も嫌われたことでしょうか、あの輝かしい小樽商大の創成期は、大野学長をぬきにして、何ひとつ語れないではありませんまいか。

× × ×

先生の格別のおとりはからいで、私たちは入舟町の外人官舎に住まわして頂きました。

いつも懐旧の思いにふけるのは、外人官舎の先生宅のことでございます。毎日とめどもなく降りしきる雪にとうとう閉口して、ついに春の陽光で雪が自然に解ける日を待ち、自

然にさからわないことを決心しておりました師走のある日、「玄関の前の雪ぐらいは……」とお叱りをうけたこともございました。お近くのせいで、何かとお宅にお邪魔いたしました。お二階の書齋兼書庫は、学問の香りにみちた先生の勉強室でした。部屋のまん中に、コークス用のストーブがおかれていました。ある日、先生は書棚の蔵書をながめながら、突然「学長になって研究をストップしてしまつた。研究に専念できる君がうらやましいね」としみじみとした調子で語られました。たった一言でございましたが、そのお言葉は、私に小さからぬ驚きでもございました。と申しますのも、先生が校長に就任される以前に、再生産構造論に狙いをすえた戦時経済の貨幣的分析という注目すべきご研究を着々とおすすめておられた、先生の一途な学問精進のお姿を、遠く離れてみていたからでございます。いまでも、あの日の書齋での鋭い眼が私を睨んでおられるような気がしてなりません。

× × ×

あれからもう三十五年も過ぎてしまいました。しかし、大野先生は、私のなかでは依然として五〇代のお元気なお姿でございます。

(元小樽商大教授、東海大学教授)

です。私はこの歴史的な一場面に列席できたことを幸運に思っております。

卒業後は学長とは無沙汰を重ねてまいりましたが、それでも代々木ゼミナールに何度か来訪され、その際、空知に短期大学を設立できたらということをお話され、即時発起人会の設立を説かれるのでした。私共代々木ゼミナールが些かご協力申し上げて昨年滝川市に設立された國學院女子短期大学は、この大野学長の計画とは別のものですが、その濫觴を求めれば、学長の創意とご熱意であったのだと私は思っております。

わが同期生の木皿邦夫君（清泉女子大学事務局長）と、同期会などの折に大野学長について語らうことがあります。学長は円満な性格、天衣無縫にして気宇宏大、しかも常に新しいものを求めて已まない若々しさを持っておられたと、今更ながら二人とも共感を感じしております。

今日、母校の沈滞に対する復権が叫ばれております。単なる懐古趣味に浸っているのではなく、今や経済と先端技術において大国となった日本に貢献すべく、緑丘人が結集し、単独大学昇格実現のときのあの力を再現することが、故人の霊に報いる道であると思いません。

（昭24年卒、学校法人代々木ゼミナール副理事長）

書齋での一言

天 利 長 三

終戦間もなく、私は家内と乳飲子をつれて、氷川丸で小樽港につきました。晩秋のどんよりした空に浮ぶ遠くの山々は、どこことなく寒々しく感ぜられ、蝦夷の地にはじめて足を踏み入れた私たちに、明日からの厳しさを告げているようでもございました。でも、その後の私たちの小樽での生活は、すばらしい数々の思い出に恵まれ、幸福そのものでした。それと申しますのも、私たちを温かくむかえ、しっかり見守って下さった大野先生のヒュマニテイあつてのことでした。私たちにとっては、大野先生とご家族の方々あつての小樽でございました。

× × ×

大野先生が、高商から商大への昇格、さらにその後の大学運営のために払われた文字通りの献身的なご尽力について、私などがいまさら申しあげることもしません。先生こ

と言われたのです。

この言葉が、学生と教官の人格的接触という母校の伝統から発せられたのみならず、大野先生ご自身の信条でもあったことを知らされる機会を私は持ったのです。私が毎日新聞社主催のマッカーサー杯全国大学高専英語コンテストの道代表として大阪へ行くため大野学長のご自宅にご挨拶に伺った折のことです。先生は、あなたの英語力は戦前のレベルから言うところ中位だ、慢心しないようにと厳しく諭され、また、スピーチの力をつけるため進駐軍の将校を紹介すると親切に申し出て下さり、また大阪へ行くのならと、同じ緑丘出身の三菱銀行中之島支店長をご紹介下さったのです。学長の面倒見のよさに私は驚き、また深く感激したのでした。

私の在学時に揃っていた教授陣の錚錚たる顔ぶれも大野学長の人徳の賜と言えましよう。かの浜林教授、“Time”の名訳の速川教授、*linguist*の鳥谷教授、*phonetics*の小林教授、そして現在私共代々木ゼミナール札幌校の顧問としてご協力いただいている商業英語の木曾教授、名調子の経済学の南教授、若さ溢れていた法学の喜多教授、国文学の峯村教授、仏語の松尾教授、そして小樽の名物スミルニッキー先生等々素晴らしい先生方が

思い出されます。

食糧難の時代ではありましたが、皆思い思いに学生生活をエンジョイしていました。ケインズの一般理論をまじめに研究する者あり、太宰やサルトルや椎名麟三に心酔する者あり、ダンスに興ずる者ありです。北大との定期戦、語学劇、ボート部の全国優勝なども思い出深いものです。

しかし、この時期母校は創設以来の最も重大な時期にあったのです。学制改革で大学高専の整理統合が計画され、小樽経専も北大に吸収されようとしていました。この時大野学長は母校の伝統と個性を消すまいと、GHQや文部省に強い働きかけを行い、単科大学昇格に腐心されていたのです。

昭和二十三年八月十日、私は電報で学校へ呼び出されました。学制改革に関する視察のため来道された大学教育課長のイールズ博士に陳情するためです。学長始め教授陣と学生が博士を迎え英語で陳情しましたが、これが功を奏して小樽経専は全国の専門学校中唯一、単科大学昇格ができたのです。長い伝統と個性、幅広い人材と蔵書や設備の充実ぶり、これがこの奇蹟を到らしめた理由ですが、また、大野学長が陳情の際力説されたこと

で大学の発足は可能か、この大きな穴埋めをいかにすべきか、昭和二十一年五月、四代目校長に就任した大野先生の苦衷は察するに余りある。先生は新制大学の申請を前にして、教員組織の強化拡充の支援を東京商大に懇請された。東京商大教授会はこれに応えてさっそく小樽救援の体制を組み、上原専祿学長司会のもとに特別委員会を緊急召集した。大塚金之助、井藤半弥、村松恒一郎、赤松要、中山伊知郎、杉本栄一、山田雄三、大平善梧、板垣與一の十名（このうち七名は福田徳三門下、二名は小樽出身者）。協議の結果、第一陣として麻田四郎、浜林正夫、長谷部亮一（昭二二年就任）。一年さきに喜多了裕（二二年就任）、このあと二五年着任の古瀬大六、二八年新任の地主重美、木村増三、二九年着任の桑原輝路、別に財政金融の天利長三氏の就任快諾——こうして、新制大学発足とともに再び第二の黄金時代の幕明けとなった。

（昭4年卒、一橋大学名誉教授、亜細亜大学教授）

イールズ博士への陳情

竹 村 保 明

昭和二十一年、私の入学した母校は、小樽経専と呼ばれていたことが示すように、戦前と戦後の共存でありました。海兵服や陸士の航空服の学友達と地獄坂を登ったものです。三大名高商の一つとして、道内唯一の文系学府として、また、「囚はれたる経済学」の大西猪之介先生や日本経済学の理論的指導者手塚寿郎先生など多くの名学者を生み、優秀な実業人が輩出し、一方また小林多喜二、伊藤整などの文学の土壌となっている、こうした母校の伝統を誇りに入学したのでした。薄緑色の瀟洒な校舎、小樽の街と港を見おろす芝生の校庭、これらのロマンティックな雰囲気も私を魅了しました。そんな私共を迎えられたのが大野純一学長でした。大野先生を校長として戴き三年を過ぎたのは私共二十一年入学生が最初ということになります。その時大野先生は私共に、実学のみならず全知的教養を身につけるよう訓辞され、「諸君を青年紳士として遇する」

記憶に新しい。この『追想集』には先生の代表的な論文数篇が収録されるときいている。先生の貨幣論、金融論に関する学問的業績についての総合的な評価は、改めてその分野の専門家の研究に俟たねばならない。

しかし、それはそれとして、先生の偉大な業績は学問の世界にとどまるものではない。わが緑丘学人にとって、これを仰ぎ見かつ讃えるべきモニュメンタルな第一の業績は、何といっても、戦前、戦中の専門学校を、戦後、全国唯一の国立単科大学として、小樽商科大学へ昇格させる一大事業を見事に成し遂げられたことである。小樽商大の誕生は先生をぬきにしては全く考えられない。それはまさに奇蹟的な一大事業だった。先生なればこそ、きめのこまかい深謀遠慮と打てば響く気転機知を縦横に発揮されて、むずかしい情勢変化にうまく対応され、進路を阻むGHQの難関を突破することに成功されたのだ。一時はまさに風前の灯にも似た危機危難をのり越え、名門小樽の法燈を護持し、輝やく伝統を繋ぎとめられたのである。

先生はこの苦境に対処するにあたって、いかなる秘策を講じられたか。第一にGHQに對するフロンタル・アタックには、東洋流の泣き落とし戦術に頼らず、もっぱらアメリカ

の泣きどころ、民主主義の原理と方法を逆手に用いる戦略を採用された。すなわち、地域住民の「世論」の盛りあげに努めること、それには地元である小樽の各界有力者の応援（例、市会決議）、緑丘会有志の支援（例、募金活動、最上町教官宿舍の建設）、学校側の一致団結（カリキュラム再編成、教員補充計画）、マスコミの声援など世論形成の基礎固めに全力を傾注された。地元、同窓、学校の三位一体論を熱心に説かれ、この三者の総意の結集のあかしを、GHQや文部省に対して、単なる口実ではなく事実として証明説得すべく、それこそこの基盤作りに東奔西走、席温まる暇なく馳け廻られた。

実際のところ、このなかでいちばん苦心苦勞された頭の痛いことは、大学昇格の名にふさわしい清新強力な教授陣容の組織化の問題だった。大正末期から昭和初頭にかけて、小樽は全国高商のなかでも教授陣容という点では際立った特色をもっていた。鬼才大西猪之介を旗手とし、あとに続く新進気鋭の手塚寿郎、大熊信行、佐原貴臣、椎名幾三郎、大野純一、南亮三郎、室谷賢治郎等々（英語界の苦米地英俊、浜林生之助、小林象三、蒔田栄一等々はいうまでもなく）、まさに黄金時代の観があった。これにひきかえ、すでに大西亡く、大熊、佐原、椎名去り、手塚逝き、残るは僅かに南、大野、室谷の三名のみ、これ

国立大学は第二の変革期に入りつつあるとも考えられ、革新的な対応が要求されていると言えらるであろう。

母校愛に燃えるのは、ひとり私のみではないと信ずるが、母校の革新的発展のためには北海道という地理的ハンディキャップのみならず、単科大学の内包する諸問題にメスを入れて、その発展のために新たな観点から積極的にこのムーブメントのために今こそ立つべき時ではなからうか。これこそが母校の昇格のために全身全霊を捧げられた故大野純一先生の今は亡き冥たまをお慰めする唯一の道ではなからうか。

(昭2年卒、小樽商大名誉教授、小樽女子短期大学名誉学長)

初代学長を讃える

板垣 興 一

ハーバード大学ではシユムペーター教授の高弟であり、のちにシカゴ大学で社会経済学

を担当するB・F・ホズリッツ教授を、十教年前に一橋大学にお迎えし、「発展における非経済的要因」と題する講演をお願いしたことがあった。司会者の私があらかじめ教授の略歴や業績を調べておき、紹介するにあたって、「教授の主要な業績はこういうことですよ、素晴らしいですか」と念をおした。そのとき間髪をいれず、「私の主要な業績は、それらの著作よりもむしろ創刊以来私がチーフ・エディターである『それは現在も変わらない』季刊誌『経済発展と文化変容』(EDCC)の質的水準を高め、これを学界の指導的な機関誌として立派に育てあげることが、私のメージャー・ワークスでありライフ・ワークなのだ」と、毅然とした態度で答えられたのに、深い感銘をおぼえたことがある。

われらが敬慕するいまは亡き大野純一先生を追想するにあたって、まっさきに私の脳裡にひらめいた一事はこのことである。大野先生はドイツ留学時代に(昭和二年二月から六年一月まで)すでに『貨幣の社会経済理論』(Sozialökonomische Theorie des Geldes, Lpz. 1931)と題する独文の主著を公刊された。それをひっさげ「貨幣価値論争」はなやかだつた我が国の学界に颯爽とデビューされた。その後、『商学討究』誌上に貨幣の動態論的分析に関する幾多の論稿を次々と発表され、当時の学界の注目を浴びたことは、いまなお

最も妥当性のある例を見出したのである。それは、マサチューセッツ州にあるボストン大学という小規模の単科大学とハーバード大学というアメリカ最大総合大学が殆ど同一地域に併存するという厳然たる一事実である。

さらに、われわれは小樽市は道南、東北地方とを包含する特有の一大経済圏の中心であり、従って札幌市とは物理的にはわずか四十キロメートルのサークルの中にはあるが、札幌市を中心とする一文化圏とは自ら全く異なる性格を持っているという理由付けである。

話は、先に戻るが、北大で全道大学学長とイールズ博士一行との会談の結末として、その夕刻、故大野先生から顔面蒼白の姿で飯川理事長宅で、北大の経済学部として小樽経専は統合されるべきという連合国総司令部の一応の原案が示されたことを報告されたのである。故大野先生の苦悶、飯川理事長の悲痛な御顔は今なお私の脳裡に深く焼きついている。翌日、イールズ博士は上衣なしで小樽駅に着かれ、私はその出迎えをし、其後校内視察、市民、道民代表との合同会談が行われたのであった。

その後の詳細な経過は省くとして、二年余に亘る緑丘人の必死な努力により、最少とはいいながら、一般科目五講座、専門科目が十五講座、計二十講座という小樽商科大学とい

う日本の唯一の単科大学が発足したのは昭和二十四年五月三十一日であり、初代学長に故大野純一先生が就任されたのである。ここに特筆すべきことは、当時在職の全教職員は全員新大学教職員として、そのまま留任し得たことである。これは、故大野先生の必死の努力、苦悶、犠牲的、献身的努力の成果に外ならないと確信してやまない。ともかく、かくして小樽高商の伝統と独立性は維持することができたのである。小樽高商・小樽経専の校長として献身的努力をされ、大学昇格へのパイオニヤーとなられた故苦米地英俊先生は昭和二十一年三月三十一日突如として辞任され、終戦後第一回の民主的総選挙の衆議院議員として立候補され、最高点を以って当選されたことは周知の所であろう。しかし、母校としてこれは青天のへきれきであり、残された学内の混乱はご想像におまかせしたい。私昇格後すでに三十四年となり、大学の姿も内容も大きな変貌をとげつつあると思う。私の母校三年の生活は“*The Good Old Days*”として永久に心に残るであろう。

駅弁大学といわれた新制大学も今やそれぞれ特色化され、他面、一流私立大学の飛躍的發展には目を見張るものがある。これには、最新かつ充実した教育施設、優秀な教授陣、時代に即応する特色化のための方策と豊富な財源的支持が必須要件である。この意味では、

「あとがき」

飯 川 益 男

このたびの「大野純一先生追想集」の刊行にあたりまして、元来無精者で且、微力の私
が敢えて発起人、世話人幹事として、お手伝いするに至りました経緯には次の様な事情が
ありました。

その第一は私の亡父飯川文三が大正三年第一回の母校卒業生であり、私は昭和十三年第
二十五回生で、二世卒業の一番バッターであり、且つ戦前における「大野ゼミナール」の
最後の部員であったことでもあります。

第二は亡父が緑丘会の二代目理事長として、特に単科大学昇格問題を控え、当時、経専
校長の大野先生と御一緒に其の実現に微力乍ら献身努力していたことでもあります。

そして第三には入舟町時代先生のお宅の近くでもあり、家族ぐるみ御一家に御交誼を頂
きました。更に御上京後は御令息喜三郎氏と昭和四十六年頃より、銀行関係（御令息は当

時第一銀行本店営業部次長、私は三井銀行日比谷支店長）という共通の職場を通じて特に
御親交願っていたことでもあります。

偶々本年は故大野先生の一周忌に当り、又私の亡父の二十七回忌、亡母の三回忌であ
り、そして私としても卒業四十五周年、満六十五歳という人生の一つの節目を迎え、「本
追想集」の完成は単に大野先生の御供養だけでなく、私事で恐縮乍ら、亡き両親に対して
も何よりも良き供養になるであらうと考えたからであります。

然乍ら刊行会幹事をお引受けして仕事の匆忙の間に、然も限られた人数で取組むことの
難しさを痛切に感じた次第であります。企画内容、出来上り等につきましても色々御批判
もあらうかと存じますが、私共といたしましては「どうか大野先生、気持だけは汲んで下
さい」と申上げるほかありません。

御多用中にもかかわらず貴重な追想文をお寄せ頂いた方々、又、「刊行のことば」並に
弔辞の掲載をご了承頂いた緑丘会新旧理事長に、「世話人幹事」として厚く御礼申上げま
す。

木周一氏を中心として）とのきわめて緊密な連けいは想像以上であったことは特筆すべきであろう。しかし、終戦前にはついにこれらのあらゆる努力も実を結ぶにいたらなかった。

総司令部としては、帯広酪農大学のような北海道の発展上、必須と考えられる特殊のもを除き、原案としては出来るだけ北海道大学へ吸収統合するということが考えられていたようである。しかし、現実的には、北海道は東北六県と新潟県とを合せた面積を持っているのである。

さて、昭和二十三年の夏、いよいよイールズ博士一行は現地視察と連合軍の大学改革案をたずさえて、函館を皮切りに、室蘭、帯広の各大学を視察して北大に到着した。その視察の精密度ときびしさは想像外のものがあつたと伝えられていた。北大においてはイールズ博士一行に対する阻止的な学生中心の一騒動があつたことはいわゆる「イールズ事件」として戦後の日本の教育改革史に残るであろう。

その直後、北大を会場として、道内の国立専門学校、大学の学長とイールズ博士との会談があり、相互に意見の開陳が行われた。私はその当時、緑丘会本部の常務理事を兼務していたので、その会議の結果の情報を飯川理事長宅において、待機していたのであつた。

われわれの一致した推測は、連合軍の原案は小樽経済専門学校を北海道大学の経済学部として大学に昇格すると共に廃止するという原案であつた。

これを前提として、少なくとも昇格三年前から緑丘会東京支部を中心として単科大学として昇格存続させるための、諸対策が徹底的に練られていたことは知る人ぞ知るである。

その主なものは次のようなものである。

- (一) 「地域的必要度」が最重要素の一つであるが、これを具体的にいかに表わすかの問題であるが、これにはこれを支持するため次のような対策がとられた。
- (二) 北海道議会の支持議決書の取得
- (三) 小樽市市議会の支持議決書の取得
- (四) 小樽商工会議所議員総会の支持議決書の取得
- (五) 北海道商工会議所連合会の支持議決書の取得
- (六) 小樽市と札幌市はわずか四十キロメートルの近距離であるから、北大と小樽経専との統合は一応合理的になる。

これに対しては、われわれは目を転じてアメリカの大学の分布状況を調べて次のような

名は小樽経済専門学校に改称され（昭和二十一年五月）、昭和二十四年に国内唯一の単科大学として小樽商科大学に昇格されたことは未だ記憶に新しいことであろう。日露戦争後第五の高商として創立された母校が高商の中で、唯一の単科大学として誕生した背景には幾多のエピソードが伝えられている。

無条件降伏と共に日本は連合軍によって占領下におかれ、アメリカが日本占領軍として上陸し、ここに日本の国民は被占領国民として新生日本のためのあらゆる政策がアメリカ占領軍総司令部によってとられることとなった。第一は日本の民主化である。民主化のためには、教育の民主主義化が最優先の重要性を持つことは何人も首肯するところである。アメリカからは早くも日本の教育制度視察団が派遣せられ、国内の学園からは反民主的教授の追放、反民主的著書の発行禁止、没収という強行政策が次から次へと採られたのである。総司令部内には文化情報教育部が設けられ、先ず第一に着手されたのは、現行の六・三・三制の確立とその教育内容の制定であった。

次は大学制度の改革であった。連合軍司令部の意図としては、先ず国立大学の整理統合と専門学校の大学への昇格（一定規準による）の二つの問題の検討であったようである。

その結果としての一応の結論は、原則として、一県に一総合大学を設けるということである。その結果は、福島高商は福島大学経済学部、名古屋高商は名古屋大学の経済学部、彦根高商は滋賀大学の経済学部という工合である。

ここで、連合軍としてはこのような大学制度の大改革断行の前提条件として、次のような諸原則をいくつか立てていたのである。

一、大学の存廃の決定には「その地域社会の必要度」(Community Need) を最重要因とする。

二、右の判定のためには民主的方法によって該当地域の各方面の意向を聴く。これらの大学再編成のルールによって総司令部は、教育部主班者イールズ博士を中心として、再編成計画を立てて全国に亘って実情視察を行い、関係大学責任者(学長)を該当地域毎に召集して意見を徴すると共に総司令部の計画原案を表明したのであった。前置きが少し長くなったが、舞台は母校小樽経専側のこの間の対策について触れてみると、専門学校から大学昇格への運動は緑丘会と学校側と密接な連けいを保ちつつ終戦数年前からつづけられていた。ことに緑丘会本部(理事長故飯川文三氏)と東京支部(故佐々

は、私ばかりにはなかったと思う。終戦直後、苦米地校長の後を受けて四代目校長となられ、戦後当然北大と併合される運命にあった母校を日本唯一の単科大学として残された御苦労は並大抵ではなかったと思う。先生が校長になられたとき「緑丘」に書かれた一文「母校が斯うした難局に在ってこそ母校再建の捨石とならなければならぬ。それが母校への感謝であり報恩であると私は気付きました」と、校長をお引受けになりその言葉通り学園再建のため奮闘された。先生がいかに母校の将来の発展をこい願っていられたかということ、晩年私は身近にあっていやというほど知らされた。先生は御逝去される数年前から、母校が地方に存在するため良い教授に恵まれず、これを何とかしなければと常に考えていられたようであった。その一例は先生が学長になられると同時に小樽市民否北海道全道の方々の要請により「小樽商科大学助成会」が結成された。そのときの飯川同窓会理事長等が昇格準備の資金として三百万円の募金をつのった。当時は住宅難でどうしても官舎を必要とした。そこで中央から良い教授を迎えるためその募金の一部で母校近くに教授宿舍をつくられたのである。これを前中田緑丘会理事長の御尽力で後年文部省で買上げていただき、この資金八千万円が緑丘会の資金となったのである。この資金を先生は何とかし

てその果実でも母校教授の外遊費や研究費に充当してほしいと再三私に相談された。その母校を思う情熱に私達は感動せずにはおられず、先生と共に緑丘会の幹部に働きかけたことがあった。

御逝去の二、三日前のことだったと思う。先生よりお電話をいただき「西野君、あのことを頼むよ」といわれたことばが耳についていまだにはなれない。先生ほど母校を去られてからも母校を愛し、母校を思い、母校の発展を願っておられた学長はなかったのではなにかと思う。いま先生が母校につくされた数々の御業績を偲び、先生の御冥福を心からお祈りする次第である。

(大15年卒、元懶芝浦製作所社長)

母校大学昇格の一秘話

木 曾 栄 作

母校小樽高商は明治四十四年四月に開校され、今日まで七十有余年を経た。この間、校

は故糸魚川先生であったが、まもなく結婚され官舎に移られた。その後にとられたのが母校に就任されてまもない大野先生であった。この寮は学生が四、五人で先生を中心に必ず朝夕食事を共にし、若かりし先生と人生を論じ学問を語った。いわば塾のようで大変楽しい寮生活であった。一年余の短期間であったが私の人間形成のためいかに役立ったかわからない。今考えてみるとこれが先生との強い結びつきになったはじめと思う。後年先生はいつも私を「嘉一ちゃん」と呼び、私も先生というよりお兄さんという感じて御逝去になられるまでの六十余年の交りが続いたのである。卒業後もしばしばお目にかかる機会があったが、一層交りを強くしたのは先生が命をかけて尽力されその甲斐あって母校が大学に昇格され学長になられてからである。ある日突然先生が私の会社に見えられ、「君に是非力をかしてほしいことがある。それは東芝に古瀬大六という一橋出身の秀才がいるので、この人を母校に迎えたいので東芝の幹部に交渉してくれないか」とのことであった。早速東芝の人事部長と交渉の結果、古瀬大六君を小樽へ送ることができ先生に大変感謝された。古瀬教授は周知の如く評量経済学、コンピューターを応用したオートメーション論学を導入する等、新風をいれ学園の刷新をはかった教授である。昭和三十年の頃だったと思う。

先生が専門分野における一流の権威者を招き、地方大学ではなかなか困難な中央学界との接触を深めるといふ考えと同時に母校の教官不足を補う意味もあって一橋大学の協力を得て集中講義という形の授業をもったことがあった。一橋大学から有名な数名の教授、母校出身の板垣與一、大平善悟、実方正雄諸氏が招かれ、たまたま会計学の故木村重義教授が母校である東大教授に栄転されたこともあり、私に是非集中講義の一員にと先生よりのおすすめで二年に亘り会計学の集中講義をした。その時先生のおかげで母校のため多少でもお役に立ったかと自負している。先生が多難な戦後の母校再建のための闘いで倒れられたが、幸い全快され、その後停年で退官され御上京、東京で生活されるようになった。さらには、母校の同窓会その他の会合でよくお目にかかる機会があった。また私共夫婦のささやかな金婚のつどいの時も先生はよろこんで御出席下さって、五十余年前先生とYMCA寮で共に生活したときの秘話や私の食事ときの不作法などをユーモアたっぷりに話して下さったのも昨日のような気がしてならない。私が毎年一度NHKテレビ政治座談会で春闘の討論会に出演することがあった。その時は必ず放映がすむと直ぐ電話がなり、君の主張は正しいとおほめの言葉をいただいた。このように昔の教え子に対する心のくばり方

を供給するという決定を行わしめたのは、主として板垣君の計らいであったようである。GHQのイールズに接触して尽力された中心人物は大谷敏治氏あたりであったろう。

私は天利長三君を紹介する労をとったし、また古瀬大六君の事でも強い口添えして、更に後から国際法の桑原輝路・大谷良雄の両君を推薦することになった。

もう一つは、小樽高商の商大へ昇格を機会として同校の南亮三郎先生を東京にお迎えして中央大学経済学部に移籍したことである。東京に出られた南先生の人口論は、いよいよ日本的に花さいて不朽の学名を揚げられたことで、予期しない好結果となって望外の幸であった。これに協力してくれた政治学者の部長だった川原次吉郎君ももう逝かれてから久しい。

大野さんは、良く後進の面倒を見られた。若い教授が海外に初めて洋行するときには、東京方面の小樽の同窓生に話して餞別を奮発して出すように奔走された。浜林正夫君が出るときには確か東海銀行の古関周蔵氏が、餞別を提供したと聞いて居る。商法の喜多了祐君がフルブライトにて渡米するときには、大野さんが同級生の刀根幸之助氏に依頼して、餞別を出して貰った。その金は私が貰ってきて大野さんに渡したのだから間違いはない。

昨年一月三十一日午前十時半、国分寺駅頭に於て大野先生は瞬発性心不全によって倒れられた。先生が心血を注いで昇格させた小樽商大の方に貴重な蔵書が寄贈されたが、長く大野純一先生の心魂は最愛の緑丘学園にとどまるであろうことは疑いのない所である。

緑丘の学問と人脈は永遠である。大野先生の霊よ、長く小樽商大を守り給え。

学問の年輪示す丘の上の

ポプラの大樹仰がざらめやも

(大15年卒、一橋大学名誉教授、亜細亜大学教授)

母校再建に奮闘

西野 嘉一郎

私が小樽高商に入学したのは大正十二年関東大震災の年であった。先生との出会いは北陸の港町敦賀から高商の基督教青年会寮に入寮した時にはじまる。私が入寮した時の寮長

あれを思い、これと思うとき、大野先生が、僅か（敢えて僅かという）八十四歳で長逝されたことは、転換期にさしかかっている、と私が思わずにおれない母校・小樽商大のためにも、また同窓会・緑丘会のためにも惜しみても余りあることである。

（大15年卒、元小樽高商教授、広島大学名誉教授）

商大昇格運動の苦心

大 平 善 梧

大野純一先生は、明治三十一年八月五日生れだから、私より七年々上の先輩である。私は明治三十八年九月十九日生れで、小樽高商に入学したのは、大正十二年四月で、兄の善祐に伴われて北斗寮に入舎した。大野純一先生には、第二学年で貨幣論の講義を受けたが、相当に難解であったようである。第一学年から二学年に進むときに二番だった様に記憶するが、第三学年への進級は少し下がって居た様子だから、貨幣論などあまり良い成績では

なかった様に思われる。大野先生は石川県の中学出身で、裏日本は小樽とは関係が深かった。大野純一先生は、土地の素封家木村家へしばらく寄寓されたことがあり、その関係で次女のキミさんと結婚されることになった。大野新夫妻は、昭和二年五月より主として独逸のハンブルグに揃って洋行された。インフレ時代の四年間の独英仏米の外遊は、まことに楽しく実り多かつたことであつたろう。

私と大野先生の旧情が復活したのは、終戦後、大野先生が第四代の小樽高商校長に就任された時からである。昭和二十一年五月に就任し、直ちに商大昇格運動に着手された直後からだと言って良い。昇格運動の対象先は何と言っても、東京で、昇格の諸準備はここで整えられた。長老の外では、大谷敏治、板垣與一の両君の外に、私もそのブレイクに挙げられた。当時は飛行機の便は殆ど無く、鉄路の長期行軍であった。大野先生は来る毎に土産として北海道銘産の珍味を持参し、色々と情報を交換集得された。長谷部亮一、麻田四郎、浜林正夫の三人をまず小樽に送ることにした。人が無くては大学はできないのである。一県一校の司令部案に反する様に見える母校の単独昇格運動だから、なかなか事は容易に進まなかった。上原専祿学長も同情して、一橋の教授会においては小樽経専への人材

れる。大野先生はそういったお人柄だったように私には追憶される。背伸びは決してなさらず、そうかといって殊更に低姿勢を銜うのでもない。格別なアクセントをおくことをなさらないのが巧まらずして風格に富んだアクセントになっている。それが先生の周辺に、芯は強いが柔和なムードをただよわすものになり、多くの人々をひきつけることになるのであろう。

大正十二年、丁度その早春、大西先生が亡くなられた年に私たちは入学した。大野先生は確かその前年から母校の教壇に立っておられたのだが、初めて先生の講義を受けるようになったのは、私たちが二年になり貨幣論の授業に接した時である。名講義ぶらない名講義、殊更な抑揚はないが、そうかといって平板に流れず、味わえば味うほど味が出てくるといった講義ぶりだった。メタリズムやノミナリズムといった貨幣学説史の術語を教えられる場合でも、術語は術語として、というのではなく、先生が東京で私淑された左右田喜一郎博士ゆずりの経済哲学的な風味をちりばめながらの講義ぶりだったと今でもその時さながらに念頭に浮ぶ。クニースやベンディクセンの名も親しみ深いものにさせたのも先生の講義のお蔭であった。ジンメルの名も登場したように思う。その頃から、ひそかに将

来は社会学を専攻したいと思いついて始めていた私は、ジンメルの貨幣学説史上での、特にマルクスの関わり合いでの、ユニークな立場について教えられた時、一知半解ながらあのジンメルがと目がさめるような思いがしたものである。

先生のお人柄は、目立たない場でも大きな実績を残しておられる。小樽高商の学生たちがつくる学生のための新聞「緑丘」が創刊されたのは私たちが三年になった時のことで、同期生の大塚武雄君（旧姓富士元で今も明石市に健在）が中心になって生れた。大塚君たちの苦労は並大抵ではなかったのだろうが、この苦労が実って、全国でも稀にみる学生新聞として、今でも保存や引用に値する名文を数々記録できているその蔭には、編集部顧問の大野先生の、地道ながら水準の高い指導ぶりがあったのである。これだけでも先生は、緑丘出版文化史上に目だたぬ巨跡を残しておられることになるわけだが、小樽高商教官のための研究発表機関誌として多くの業績を後世に残すことになった学術誌「商学討究」の推進のために果した先生の役割も見逃してはなるまい。手塚先生や南先生が表面に立ってはおられたが、実際には大野先生の柔軟なリードぶり、派手ではないが生々とした采配ぶりが「商学討究」をたえることなく前進させていたのである。

り、ひたむきな母校愛と人一倍の責任感と誠意の持ち主であられた。

小樽高商最後の校長として又商大の初代学長として更に又緑丘会の一員として残された足跡は誠に偉大であり、先生が辿られた道はそのまま、小樽商大の道と云うべきであろう。

この道もやがて遠い将来、たとえ姿、形は変わろうとも、小樽に学ぶであろう人々に必ず深い感銘を与え、学への情熱と母校愛をかき立てるであろうことを確信して擱筆する。

(大13年卒、元千代田火災海上保険(株)会長)

ユニークなリーダー

中野清一

リーダーにも色々なタイプがある。文字通り、みんなの先頭に立って号令をかけながらリードしていく、というのが普通によく見受けられるリーダーのタイプであろう。これとは異なり、一見、先頭に立っているようには見え、言ってみれば、みんなの脇に付き添

うような地点に位置しながら、結局みんなを一定の方向にリードしているといったタイプのリーダーもある。どちらのタイプのリーダーが好ましいかは一概には断定できないことで、その時、その場によってきまるといふ他はない。

大野先生のリーダーシップのユニークさは、右に述べた後の方のタイプだったからこそ発揮されたのではなかったであろうか。

大野先生が、苦米地先生の後を承けて小樽高商の第四代校長になられたのは、終戦後の日本未曾有の混乱の時期であった。悪性のインフレのさ中での地方専門学校の経営は大変だったであろう。それを昭和二十一年から三か年間なしとげられたのみか、やがて来る単科大学への昇格の礎石づくりを黙々としておやりになられたというのは、日本教育経営史上でも稀れな事例に属していると言っても過言ではないのだが、これがなしとげられたというのは、一に、大野先生のユニークなリーダーシップによることが大であったろう。

このユニークなリーダーシップは、いうまでもなく、大野先生のお人柄の現われなのではないだろうか。どんな場合にも御自分のペースで物静かに、だが強く一筋の意志をひめて、歩いていか

れ、北大側もこれに同意の意向であった。特にその際、わが小樽高商図書館の経済関係図書については、格別の執心があつたかに聞く。

これに対し、大野校長を中心とする学校当局と同窓会側は、創立以来の歴史と伝統を守つて、独自の存続を期し、併せてかねての宿望である困難ではあるが、単独大学昇格の実現を鮮明に打ち出したのであつた。

この動きは、地元小樽としては、同窓会初代の理事長として夙に令名高かつた飯川文三氏（第一回卒）と前記の校長大野純一先生が中心となり、これと緊密な連絡の下に東京が動き、佐々木周一氏（第二回卒）と元校長であられた伴房次郎先生、同じく苦米地英俊先生と柳瀬、宮崎（第一回卒）上村（第二回卒）青田（第三回卒）村沢（第四回卒）板倉（第七回卒）の諸氏が中心となり、戦後早々の事として、在京同窓生の名簿作りすら思うに任せぬ時に、僅かに集まつた卒業生有志を、GHQ担当、文部省担当、新聞雑誌等、いわゆるジャーナリスト部門担当と、夫々部局を分けて、積極的且つ計画的に運動を展開したのであつた。

この事については、既に大谷敏治氏が、緑丘誌第53号「一言多言」欄に簡潔に示してい

るので更に付言の要はあるまい。

かくてわが母校は所期の目的を達し、当時全国数多くの官立高等商業学校中、唯一の商科大学として存続され、今日に至つたことは周知の事実である。こゝに至る迄の、筆舌に尽し難い幾多の困難な事情や経緯は省くが、その中核に、熱心真摯その類を見ない大野先生が推進力となり、又同窓生も一丸となつて、全面的協力を惜しまなかつたことが、さしものあのGHQ及び文部省当局（就中青山大学課長以下）を動かし、これに深い理解を持つに至らしめ、当時としては極めて困難な諸条件を克服し得たのに相違ない。

当時の事情を知る者及び、これにかゝわりを持つた前記の諸氏の中には、既に鬼籍に名を連ねて、残り少なくなつたのは誠に淋しい限りであるが、戦後の母校の歴史を語る上で、この時代の先生の大野先生の寝食を忘れてのご活躍とそこご功績は特筆大書されなければならぬ。

古語に「先人の歩いたあとに道が出来る」という。豈小樽の地獄坂のみならんやである。あの先生は、その御名前が示す如く、文字通り、純一無雜、高潔純粋なお人柄であ

思っている。

昭和三十二年に、くも膜下出血という不慮の難病に冒されたのが起因となって学長を引退されたが、幸い病気は奇跡的に回復され、その後も引続き母校のことに深い関心を払われ、特に自ら学長時代に処理された重要事項の後始末については最後まで責任を感じて、老年になられても、先生の教え子の一人で、不肖私とも因縁浅からぬ古関周蔵君をお供にして、何遍か新宿の私の室まで足を運ばれて、相談に來られた。正直な話、話し中に段々お顔が紅潮して来るのでハラハラさせられておった。その限りなき母校愛にはいつも頭の下る思いがしておったものである。ところが、昨年一月三十一日、大寒の最中に先生が急逝された悲報に接し、驚愕したが、矢張り無理が過ぎたことを瞬間に感じた。真に掛け替えのない大先輩の急逝に哀惜痛恨に堪えなかつた次第である。

最後に謹んで衷心より先生のご法名

善学院釈純説居士位

のご冥福を祈り上げ、併せて愛妻キミ夫人並に喜三郎氏ご夫妻に対すご冥護を請い希って筆を擱く。

〔附記〕

昭和五十年の春、恩師、左右田喜一郎先生の五十年忌の際、出版された『左右田哲学の回想』に大野先生は「Geld und Wert とのめぐりあい」と題する一文を載せている。ベルリンの古本屋でこれを発見して入手するまでの経緯を書いて、「私の本棚の至宝」であると記している。これも今度母校に寄贈される筈であることを付言しておく。

(大10年卒、前安田生命保険(相)社長)

学制改革と小樽商大の誕生

古 関 周 蔵

戦後GHQが、わが日本を如何に処理しようと考え、又如何に処理したかは、彼等自身を書いた「吉田茂とその時代」に詳述されているが、その方策の一つに学制改革があり、その改革の一環として、わが小樽高商を、札幌北海道大学と合併させる方針が打ち出さ

った様でございます。父の額には、私の記憶の限りでは、最初から小指の先大のイボがあり、それは、父のトレードマークでもございました。ある時、お隣りの座席でお母さんの膝に抱かれて居た二、三歳の坊やが、あまり珍しそうに父のオデコを眺めるので父が「これ、おじいちゃんのオッパイだよ。」と云ったら、いきなりのり出してそれをしゃぶろうとしたそうで「いやア面白かったよ今日は。」帰宅するなり、そのお母さんが慌ててお気の毒だったと、いたずらっぽく笑って居りました。

気の早い父は、外出となりますと、一時間も早目に家を出なければ気が済みませんでした。そして、何故か、電車の一番前が好きで、雨が降っていても、屋根の無いホームをわざ／＼小走りで一輛目に乗り込んで満足でございました。家族の誰かが出かける時でも父の時刻表に合わせられますので、次第にこちらも悪知恵を働かせ、三、四十分はサバを読んで居りました。

この様な父の印象は、あまり貨幣論とは結び付かず、大変申し訳ないのでございますが、亡くなりました今も心の中に生き、日常の折にふれましては父の声なき声が、はっきりと聞こえてまいります。

血の気も多く、頑固で、気むずかしい一面もございましたが、その底には、人一倍気が弱く、温かいものを持って居た父でもございました。思いますにそれは、滝川・小松・小樽・東京での八十三年半の生涯を通じ、多勢の方々がお注ぎくださった一方ならぬ父への愛が温めてくださったものと存じます。

父はよく「教育者として自分が人に与えたものは、学生時代の数年間の講義に過ぎないのに、その後の遙かに長い年月は、教えられ、与えられることばかりだ。」と申して居りました。

幸せな父でございました。そして、残されました私共もお蔭様で無事に過ごさせていたゞいて居り、こゝに亡き父と共に、心からの感謝の気持を新たに致して居ります。本当に有難うございました。

(長女、大野喜三郎氏夫人)

母校愛に燃えた先輩

竹 村 吉右衛門

210

大野先生は、小樽高商時代に私の二年先輩に当るが、殆ど思い出というものがなかった。大正十年に東京商科大学に入学した際には、大野先生は専攻部におられて、いつも大きな鞆を抱いた篤学の先生の姿を思い出すことができる。先生は僅か一年後の大正十一年に母校小樽高商の講師に迎えられ、大正十三年秋には教授に、そしてやがて昭和二年三月より六年一月まで独、伊、米等に約三年十ヶ月の間留学された。帰朝後は母校の新進気鋭の教授として活躍されたが、その後日華事変勃発後は二度に亘り臨時召集により応召、終戦後解除とられた。戦時中校名が小樽経済専門学校となっておったが、先生は昭和二十一年五月、苫米地英俊先生のおと第四代の校長に推され、そして、昭和二十四年五月小樽商科大学長に補せられた。ただその間にマッカーサー司令部の学制改革が行われ、小樽は北大と合併の運命にあったのであるが、大野先生は先頭に立って単科大学として独立を守

り抜くのに懸命の努力を払われたことは周知の通りである。

偶々私と小樽同期生の大谷敏治君は、当時文部省大学審議会の手伝いをして、この問題に取り組み、大野学長を側面から援助しておったことをご本人から耳にしておったが、恰かも『緑丘会報五三号』に「小樽は小樽（GHQ裏話）」と題して短文が掲載されておったので当時の動きが鮮明に記憶に蘇って来た。大谷君はたしか担当官と現地まで出かけて説明説得に当たったはずであるが、「そこで私はGHQの担当官に対し、小樽の歴史を説明しました。札幌、小樽は一時間の道のりしかないが、小樽高商の教授陣も学生も、商業の町小樽と共にあり、港と海を通じて全世界を相手にしている。また、学生は遠く大連、九州からもやって来ていることを強調したのです。このような説明主張が、小樽高商が単独の商科大学に昇格することに多少は役立ったのではないかと考えている」という大谷君の言葉から、当時担当官等に働きかけた様々の具体的な出来事が思い出され感無量である。

大野先生は、小樽高商に学ばれ、そして聽ては小樽商科大学創建の歴史的事業に身を挺して闘われ、自ら初代学長に押されて十一年の永きに亘り大学の発展に貢献されたので、私は大野先生こそは小樽商大の為にこの世に生を享けられた方といって過言ではないと

211

イールズ博士がいよいよ北海道の大学視察に来るといので、日本海海戦の東郷元帥ながら、緑丘の興廃の一戦にありとばかり、大野さんは全存在を賭して緑丘救済のため八方奔走した。この時ほど学校と卒業生と小樽市が団結一体となって力を発揮したことはなかった。すでにこれとは別に緑丘の大学昇格が同じような団結力で準備されたことはあったが、今度は相手がマッカーサーのGHQだった。私はこれらの問題に参画しなかったので直接には知らないが、「緑丘五十年史」に詳しく書かれている。たまたま、北大の中央講堂でイールズ氏の講演があるというので出かけてみると、演壇の近くに陣取っていた十名ほどの学生がいきなり壇上に駆け上った。突撃決行の瞬間、学生たちの顔が緊張で蒼ざめていたのを今でもおぼえている。有名なイールズ事件である。

北大との合併反対理由として大野さんがイールズ氏にぶつけた七項目は、緑丘の歴史的な事実と北海道の地理的、社会的な条件に即して将来の展望を述べたもので、実的確で堂々たるものだった。さすがのイールズ氏もシャッポを脱いだ。小樽経専は全国唯一の単科商科大学として残った。私と大野さんとの主要な学校付合いはほとんどこの時までだった。若気のいたりとはいえ、いろいろ御迷惑をかけたことについては、この際深くお詫び

申しあげたい。

大野さんは細心几帳面な性格で、食膳のカレイを食べるときには小骨一本も原形のまま、に残す完璧な箸捌きだった。冒険、逸脱、不確定要素には敏感慎重な反応を示しながら、ひた向きの信条に生きた人だった。私は最初の間、大野さんはイメージに縁のない人かと思っていたが、商科大学開校式の式辞を読み直してみてもどろいた。実務と学問と教養との関係を述べ、個人の人間形成と文化の普遍性にふれる情熱にみちた名論である。その後今日に至る日本の社会と大学が大野さんの抱負から遠く離れてしまったのを見るにつけ、今は亡き大野さんの心中を察してやまない。大野さんが初代渡辺校長をあれほど尊敬した理由がはっきりとわかる。

(小樽商大名誉教授、北海道武蔵女子短大理事教授)

緑丘は残った

松尾正路

緑丘の思い出はいつも高商、経専時代、つまり、伴、苦米地、大野の三校長時代のことばかりである。記憶に残る学生の顔ぶれも同僚の先生も、校舎のたゞずまい、そこから広がる北海道の自然、海も山も雪も、みんな小樽商科大学以前の緑丘生活が中心になっている。大野校長の思い出もまたそこへ結びつく。

経済不況とはいえ、古き良き時代の学園は、やがて戦争、学徒出陣、勤労作業、敗戦、食糧難、そして、アメリカの占領政策による日本教育制度の抜本的な改革など、北海道の地理的条件もあって壊滅的な破壊はまぬがれたが、敗戦日本の縮図となってさまざまな困難に直面した。校舎の一部は進駐軍に占拠され、苦米地校長の政界出馬と後継者の問題が重なり、学生も教職員も動揺した。その後は「緑丘五十年史」にも記載されない歴史の内実が作動していた。今こゝにそれらのすべてを語る必要も意味もないと思う。歴史とはそ

ういうものではないか。たゞいくつかの事実の表面だけを拾いあげると、苦米地校長が辞意を表明された後、学生たちの過激な要求をなだめるため学生大会の現場に出かけたことがあった。彼らは興奮し、昂ぶっていたが傲慢粗暴の振舞はなかった。「緑丘新聞」の記事が不穏当だというので街の本屋さんの店頭から回収したこともあった。当時は吹き荒れた民主化の最中だったが、校長選挙規則などはなかったので、誰が次期校長になるべきか、上席の教授から順次意見をきいたこともあった。どんないきさつで私がメッセンジャーを引き受けたのか今は忘れてしまったが、もと本校の教授で文部省の督学官をしておられた糸魚川さんの私宅を東京に訪ね、学校の実情報告と文部省側の意向を打診したこともあった。大野先生はこういう不安な過渡期に校長就任の大役だったのである。並ならぬ覚悟だったにちがいない。

大野校長は苦米地校長のような威厳の気風を持たなかったもので、私たちは同僚の親しみのまゝに大野さんと呼んでいた。その大野さんにとって最大の難関は何といっても北大と小樽経専の合併問題だった。これは周知のように、一県一大学というアメリカの占領政策によるもので、この方針に背くのは勅令に逆うようなことだった。アメリカ大学教育課長

つも勉強するのが常でした。よく徹夜で勉強したことも懐しい思い出の一つです。戦局が熾烈の度を加えるにつれ、特別措置として学校は六ヶ月の繰上げ卒業と云うことになり、十八年九月に卒業しました。

小樽を去る前の夜、先生には送別の宴を催して下さいと云われ、その時「小林君元気で再会出来る日を待っているよ」と云われた言葉が今も耳朶の中に残っている様な気がいたします。苦しかった南方戦線での戦い、そしてみじめな敗戦を経て二十一年の四月に復員しました。その頃、先生は小樽高商の四代目の校長となられ二十四年五月には、小樽商科大学の初代の学長に選ばれ大学の基礎確立のために大変にご尽力されました。

先生には小樽商大をご退職された後、東京に居を移されました。

先生と一日も早くお逢いしたいと熱望しておりましたが仲々思うにまかせず、徒に歳月が経過するのみでした。しかし、ようやくその願いが叶えられるときがきました。私が明科町の町長在任中の五十二年頃、上京した折に先生のお宅を訪ねることが出来たのです。

昭和十八年にお別れしてから実に三十数年の永い年月がたっていました。

先生はじめ奥さん、英子さん、皆様が喜んで私を迎えて下さいました。私にしても皆様

のお元気な姿に接してその喜びと懐しさは筆舌に尽されぬものがありました。

その夜は、先生宅で一泊したのですが、近くに住んでおられた久木先生を招かれて一同で思い出話に一夜を楽しく過ごさせていただくことが出来ました。両先生なき今となっては、そのことも懐しい思い出の一つとなりました。その折、先生に是非信州の私の家に来て下さいとお誘いしたところ、大変に喜ばれて、「来年はきつと行くよ。」と、快諾されましたが遂に実現することが出来ず慙愧の念で一杯です。

今はたゞありし日の先生との思い出を胸に秘め、温顔あふるゝその面影を偲びつゝ、只管に御冥福をお祈りして参りたいと思います。最後に先生御遺族の方々のご健勝を心から念じて筆をおく次第であります。

(昭18年卒、元長野県明科町長)

樽高商の教務課長の要職にあった糸魚川先生の勧めによるものでした。昭和十六年の四月の初め、入学のため北海道に渡った時、往けども、行けども白皚皚の曠野を見て吃驚しました。その頃、北海道と云えば酷寒の地、最果ての地と考えられていたのです。

入学後、文行寮に入りました。糸魚川先生の宿舎に近いと云うことで、そこに入るようになったとのことでした。その後、先生の官舎に時々呼ばれて御馳走になったことが今も尚、記憶に残っています。

二年生の時、寮を出て下宿をしました。その頃、糸魚川先生が文部省の督学官として学校を去ることになり、その時私の面倒を同僚の大野先生に頼まれて行かれたのです。それで、大野先生が先生のお宅の近くの下宿を見つけて下さいました。それが、入舟町九丁目十三番地の田卷セツさん宅でした。

大野先生のお宅とは、僅か三、四十米の近さで私の下宿の方が先生の家より高所にありました。窓から見ると、先生の家が眼下に一目で見えました。当時小学校五年生の先生の長女英子さんがよく家の庭から私を大声で大人と呼んだものでした。大人の呼称は、私が身体が大きかったからでした。先生のご家庭は奥さんと英子さんの三人家族で、先生は実

に温厚な方でしたし、奥さんが又大変に優しい方である上、かてて、英子さんが天真爛漫な子供さんでしたので、いつも和氣藹藹とした空気に包まれていて羨ましい限りでした。そして、私を家族の一員の様にして下さいましたので、私は毎日の様に先生の家遊びに行きました。又、時々私を呼んで御馳走をして下さいました。

奥さんが入院された時など、先生の家留守居で泊ったこともありましたが、又、土曜の夜など、先生御一家と映画を見に行き、帰りには英子さんを背負って帰ったことなど、恰も昨日のことのように鮮かに脳裏に浮んでくるのです。

当時の先生と私との思い出を語るもの、一つとしては、私と二人で学校の玄関で撮った写真がありますが、その頃の先生は四十歳位でしたから若くて潑刺としておられました。又、先生の家で先生、奥さん、英子さんと私と撮った写真は、くつろいだ和服のお姿の先生でその温顔はいつも優しく私に語りかける様な錯覚にとらわれます。

先生は身体こそ大きくはなかったけれども、教壇に立った姿はしゃんとしていました。先生には、貨幣論を教わりました。特徴のはりのある声で、力強い口調で教えられました。私は、先生の試験のときは悪い成績をとってはならないと、他の先生るときよりもい

絶賛された「根室地区兵用地誌」

秋野武夫

大野与三松に姉が嫁して、旦那の出張時よく留守番を仰せつかり、当時高商生の先生と中学一年坊の私はよく一つ床で寝た。

昭和十二年、高商の柔道部長渥美の妹との見合を先生の御宅でさせて頂く。披露宴で先生が英子チャンの作文を読上げる。「お見合の時武夫オジチャンは下を向いて初めから終りまで楊枝で羊羹をお皿の上で煉っていました。」

ノモンハンの戦鬪の直後、第二十六聯隊副官の先生から「赤紙が行くよ」と事前に内密の通知があった。応召すると官舎が隣り合っていた。冬、珍しく日照の日に官舎の庭で長女をだいた奥様が滑って転び尾てい骨を打った事があった。今、お障りありませんか。今にして思うと奥様と家内は共に美人コンテストなるものがあつたら「ミセス旭川」であつたと思う。

対アメリカ戦の終り頃、先生は根室の大山大隊の副官をされ、私は第七師団ガス係将校で参謀付であった。先生が道産児（ドサンコ）に跨って踏査した「根室地区兵用地誌」は参謀絶賛の逸品であった。

姉の家でお目にかかった時以来、常に「武夫さん、武夫さん」と可愛がって頂いた。五十六年夏に来宅された時に、手編みの防寒ソックスを差し上げたら、「武夫さんが編んだのかい。貴重品だなァー。」と喜んだ顔が最後となった。昔の留守番の御同役、話しても肩のこらない高商時代先輩の顔であった。

（親戚、元小樽スキー連盟会長、昭58・7・1、死去）

入舟町時代の先生ご一家

小林一富

私が小樽高商に進学することになったのは、母校松本商業学校の大先輩であり当時、小

全く知らなかったので一瞬わが目を疑った程であった。

それからは毎日大野先生と将校集会所でお逢い出来る昼食時が楽しみになった。勿論先生は聯隊本部附で正面の席に部隊長等と着席しておられ、私等は末席であるから食事中と雖も仲々、お話す機会に恵まれなかったが、食事後、解散時の僅かな時に、「何んだ元気にやっているか」とか「元気そうだな」という様な短い声を掛けて頂くだけで随分と心が安まったものであった。

先生が何年何月に応召されて入隊されたのかは終に聞かず仕舞であった。又何時召集解除になられたかもお聞きすることがなかった。

昼食をとりながら部隊長が「大野のように俺より良い勲章をもっている将校も居れば、トラックの運転手をしていた将校もいる」と言ったことが耳新しく未だに残っている。

当時大佐であった部隊長より、軍隊の階級は少尉で下級であった大野先生の方が上位の勲章を持っておられたのだな、ということはその時知らされた。

僅か一時間の昼食時間であったが、そういう大野先生が同じ部隊におられるということ、は最末席の見習士官の私等にとっては誠に心強いものであった。

五味、中沢、川島三氏を含め私等は昭和十五年六月五日、旭川を出発、北支派遣軍独立混成第七旅団に他の見習士官、下士官と派遣された（中沢氏は若干後になったが）。

この日迄大野先生と同じ部隊での八ヶ月の生活をしたわけである。

私は悪運強く昭和十八年五月、北支から帰還、翌十九年二月再召集、千葉の九十九里浜で挺身中隊長として終戦を迎えたのであるが、前述した様に大野先生と旭川でお別れしてから先生がどのような軍隊生活を過ごされ終戦を迎えられたかは知らない。

終戦後も先生とは度々お逢いしているが軍隊の話はしたことがない。又終戦後最初にお逢いしたのは何時であったのかも記憶にない。

最後にお逢いしたのは私等同期の卒業四十五周年全国大会、昭和五十六年六月七日、小樽の銀鱗荘での第一日目に大谷、松尾、木曾の先生方と一緒に参加して下され一晩、心ゆく迄話しあったのが最後となった。

私等の五十周年記念には又是非と申されていたのが昨日のようだ。
御冥福を心からお祈りする次第である。

（昭11年卒、元東洋化工(株)常務取締役）

ミナール”として、松田講師を中心に撮影した記念写真を卒業アルバムに載せたのであった。

主を失った大野ゼミは、最後の、そして“幻の大野ゼミ”といえるわけだが、私どもも程なく、“主”の後につづいて学園より兵営への道を辿った次第である。

(昭14年卒、共同印刷(株)常勤監査役)

軍服姿の大野先生

小田島 一雄

数多い同窓生のなかで大野先生の軍服姿に身近かに接した人は極めて少ないのではないかと思う。陸軍少尉の肩章をつけた大野先生と同じ部隊で約八ヶ月生活を共にしたのであるが、そこに至る迄の経緯の概要を先ず述べなければならぬ。

尚はじめに断っておかなければならないが、表題の一文を草する所以のものは、軍隊指

向の考えは毫もなく、大方の方は学園での大野先生の追想を書かれることであろうことを想定し、冒頭に記した意向に基づいた以外の何もでもない事を予め了承されたい。

私が臨時召集で旭川歩兵第二六聯隊留守部隊に入隊したのは、昭和十三年九月十三日であった。

後日分ったのであるが同日召集された中に一年先輩の昭和十年卒の五味彰、中沢嘉男、

川馬道雄の三氏が居られ、奇しくも五味氏とは同じ中隊で同じ釜の飯を喰う仲となった。

昭和十四年三月一日には四人とも甲種幹部候補生になり、同年四月一日には盛岡予備士官学校の第一期生として同校に入学を命ぜられた。

入学式に「お前達の命は貰った」という猛烈な訓辞があり、朝夜を問わない猛訓練の末、原隊に復帰したのが同年十月三十日。同年十一月一日附で陸軍見習士官に任命された。見習士官になると将校の卵という訳で、部隊にある将校集会所にも出入り出来、演習等の為に外出している将校以外は全員この集会所で昼食を一緒に摂る習いになっていた。

大野先生の軍服姿とお逢いしたのは将にこの日この場所であった。昭和十一年に卒業して以来三年半振りであり、大野先生が軍籍に身を置かれていたとは

なようでなか／＼難しい事でした。なぜならば、全き理解がなければ出来ぬ事でしたから。個人的に、ゼミナールや卒業時、或は卒業後に多大の御指導御世話になりました事を措きますと、卒業後既に半世紀に近く、回顧するも思い出る特別の事ありません。その半世紀の間一貫して脳裏にある事のみです。

ただ先生に教えを受けました貨幣論や財政論は戦後のインフレ時代や国家財政を理解する上で絶大の指針となり深く感謝致して居る次第であります。

(昭12年卒、正和産業(株)代表取締役)

幻の大野ゼミ

伊 原 利 勝

私どもは昭和十一年春、緑丘の校門をくぐり、青年紳士として遇せられ、学問に、運動に、青春の生活を十分エンジョイできたが、一方戦時特色は日一日と濃くなっていく情勢に

あった。

さて三年進級を間近にして、各自の向学心や志望進路により、それぞれゼミナールを選ぶことになったが、貨幣論の大野ゼミ、金融論の糸魚川ゼミは、志望者が最も多く、人数制限の噂がでる程人気があった。一方、第二外語その他一部のゼミでは、マンツーマン指導をうけられる小グループのものもあった。

私ども二十余名は幸い念願の大野ゼミに決ったものの、直接大野教授からご指導を受けられた時間は僅少に止まり、主要命題は夏休み後の後期に残された。

然るに、九月暑中休暇を終えて登校すると、大野教授が八月下旬(昭和十三年)応召、旭川の歩兵連隊に入隊されたと聞き、ゼミナール員一同愕然となった次第であった。時局は一年志願兵制度の予備役将校である大野教授を、学園に留めおけぬ程戦時体制が進行していたのである。

ところで主任教授を失った大野ゼミはどうなったであろうか。主なき私どものゼミは、暫時第二糸魚川ゼミとなったが、程なく北大より松田武雄講師を迎え、同講師を中心に研究を続け卒論提出も済み、翌十四年三月卒業にこぎつけたものは総勢十九名で、大野ゼ

乾杯

高田正明

昭和六年神戸二中（現兵庫高校）かう小樽高商に入学した私でした。当時北海道、特に札幌は軟式テニスが盛んな地で、硬式テニスは北大と高商だけだった。部員僅かに、七、八名、昭和六年度は北大戦に敗れたが、七、八年度と連勝し、全道ダブルス選手権には幸運にも三年間連続優勝、昭和八年には全道シングルス、東北、北海道学生選手権にも優勝して幸運な三年間を過しました。

私の在学当時は小樽公園市営コートの一面を借用し乏しい部費に苦労を重ねましたが、この間温厚篤実な大野庭球部長には何かと御配慮をいただきました。

記念杯を取るたびに「カンパイ!!」「カンパイ!!」と二次会、三次会に深夜まで終始笑みをたゞえ御馳走して下さった当時の教授の温顔を懐しく想起するものです。

（昭9年卒、元三菱機器販売(株)専務取締役）

答案は簡潔に

松木義雄

我々の在学しましたのは、昭和九年四月から十二年三月までですからその間の思い出に限定致します。

その頃は、先生におかれては、学究としては最も脂の乗った時期ではなかったかと思いますが、某々先生方の如く雄弁家でもなければ漫談家でもなく、淡々と、或いは咄々と真理を語られる方でしたから、エピソード的な思い出はありません。

まず最初に、雨の日は傘を、晴れた日にはステッキを片手に地獄坂を、入舟町に移られてからは正法寺裏の急坂を足早に然も歩調正しく登って行かれる姿が目には浮びます。

講義はなか／＼に難解で、ノート等は一言一句たりとも冗語がありません。全て学問的エスプリでした。説明も又然り。試験になると、答案は出来るだけ簡潔に要点を記入するよう要求されました。文は簡単

父の素顔

大野英子

今年も甲子園の高校野球に先がけて、名古屋場所の太鼓の音が聞こえてまいりました。この時期になりますと、浴衣姿に足を組みました父が、いつもテレビの前に座って居りました。窓越しに、庭の草取りに懸命の母を「ちらっ」と見て、聞こえるともなく「新聞も読まんらんし、相撲も観んならんし、これでなか／＼忙しいんだ。」と云い乍ら、スイッチを入れたものでございます。やがて力が入ってまいりますと、いきなり大きな掛け声や拍手が湧き、その度に午睡中の愛犬は目を覚まして、家中で一番甘い飼い主に何事かと驚いて吠え立てますので、お隣りとのガラス戸は、これ又母の手で開けたり閉めたり忙しいこととございました。野球観戦の時は、応援していた筈のチームが何時の間にか敵側に変ってしまうことも珍しくなく、勝敗はあまり問題ではなかった様に思われます。

年齢に似合わず父は、眺めるだけで、庭の手入れなどは大の苦手とございました。不思議に一寸父がその気になって手伝ってでもくれますと、忽ち「アメリカカコレヒトシ（アメリカシロヒトリのこと）」にやられて、大騒ぎになってしまいます。それ以来、父も私共も懲りてしまいました。偶々、無花果の木に野ばらが絡んで咲いたのを見て「お、無花果の花がきれいに咲いたね。」と。これも父には、花の名はいつでもよかったのでございます。無花果の葉が大きくなる頃になると、又野ばらも咲いてほしく思うのでございます。

父は若い頃から、かなりの健啖家だった様で、好みも又年齢に似合わず、どちらかと云うとお上品な懐石料理よりも、ビフテキの方がご馳走でございました。嫌いなピーマンなどのおかずの時は、どうもお腹が一杯になったり、胃の調子が悪くなったり致しました。ですから身辺雑記にも書いて居りました様に、デパートの食料品売場などを見て歩き、自分も好き、家の者も好きと云うものを見つけるとは、買って来てくれるのが楽しみの一つでもあった様でございます。よく出先から「夕食の買物は済んだかどうか」の電話がまいりますので、そんな時はいつでも「まだ」に決めて居りました。

その往復の電車も父には、さまざまな世代の人との会話の場ともなり、なか／＼愉快だ

た。結局、北千島の模型を作り、これに我国企業が活動している根拠地、漁獲高等を押ボタン式電球の点滅で現わすことに決定して製作に取りかゝった。地図をたよりに山の高さをどうするか、電球をどこに付けるか等細かいことに気を遣ったことを思い出す。特に、所長の大野先生は責任感の人一倍強い方であったから、気の遣い方が大変で側から見ても気の毒な程であった。幸い、模型は予定通り出来上り何回となく予行演習を行い大丈夫と自信を付けることが出来た。昭和十一年十月九日の天皇行幸の際はこの模型を御覧に入れ、面目を施した次第である。本校記念誌には、天皇陛下が模型の前に立たれ、苫米地校長がそのお側で御説明を申し上げている写真が出ている。済んでしまえばあたり前のことだが、私でさえ気づかれで数キロやせたことを思い出すが、大野先生のこの間の御心労には全く頭の下る思いがした。「北海道経済研究所」は北千島漁業問題で世の注目をあびたためか、当時、秩父宮殿下が総裁であられた日本学術振興会から学術研究資金を受けることが出来た。この資金は北洋材の研究に当てられ、大野、高橋両教授に私も参加させて頂き、二年の歳月を費して研究報告を同振興会に提出した。この事実は学校の研究報告にはのっていない様である。現在の我国状況と、戦前北海道を中心に―特に小樽がその中心―千

島、樺太（現在のサガレン）に企業進出が盛んに行われていた当時とを考え合わせ全く隔世の感に打たれるのである。

私は先生に私的にも随分御世話になった。気軽に引受けて頂いたこと、引受けた上は御親切に、最後まで御世話して頂いたこと、思い出は数多かった。先ず、小樽時代に私の結婚の仲人を御願ひして引受けて頂き、先生のみならず奥様にも大変御面倒をかけた。また、偶然先生御一家と約一年以上近所付合いをさせて頂いたこともあった。先生が住宅新築のため緑町の官舎（当時でも犬小屋と悪口を言われた）に臨時に入られることになった。そこは丁度私の官舎の向いで、朝晩先生、奥さん、お嬢さんと御目にかゝり、御付合います機会に恵まれたことはなつかしい思い出である。

私が青森に移り、県庁勤めをやめ民間に入ってから、時々小樽でこう言う所があるから勤める気はないかと、お便りを頂き先生のやさしい御心情には頭の下る思いがした。先生は、私と同年輩の茂夫さん（先生の弟さん）を亡くしたので、私を見ると茂夫さんの様に弟とも思っ下すたのではなからうかと思うのである。

（昭4年卒、元小樽高商助教授、青森経営者協会専務理事）

「北海道経済研究所」の活躍

服 部 政 一

一般に、先生の思い出は、師弟関係から始まるのであるが、大野先生と私との間には師弟関係はなかった。私が小樽高商の門をくぐったのは大正十五年であったが、その頃先生はドイツ留学中で、学園生活三ヶ年間で一度も先生のお顔を見ずに過ごした。私は卒業後約十年間学校で助手、助教授として勤めたので、その間に公私共手厚い御厚誼を頂いたので、その恩義の数々については忘れ様としても忘れ得ない。

私は、先生とは目に見えない縁で結ばれていた様に感ぜられてならない。私は大野先生の生れ故郷北海道滝川市（当時滝川町）で生まれ、先生とはドイツ留学からお帰りになるまでお目にかゝらなかつたが、先生ご一家とは永くお付合いを頂いていた。特に、先生の弟さんの茂夫さんとは小学校、中学校とも私の一年下級で、家も近所であったからいつも一緒に遊んだ友達だった。当時、滝川は小さな町であったので、大野家の御長男の純一さ

んが小樽高商の教授であることは町の評判になっていた。勿論、私も充分この事は知っていたから、小樽高商に入れば先生の教えを受けるものと考えていたが、これはとうとう実現せずに終わった。

先生とのかゝわり合いで一番思い出に残るのは、「北海道経済研究所」の仕事である。当時、学校内に産業調査会という組織があり、年々学生から調査論文を募集し、優秀なものには賞を出すことになっていたが、昭和十年これを改組し「北海道経済研究所」としたのである。当時、北洋漁業はカムチャッカ沖が主漁場であったが、日本領の最北端北千島を根拠として我国企業の進出が目覚しかったので、「北海道経済研究所」がまとめた「北千島漁業の経済調査」は世の注目をあびた。研究所は大野先生、高橋次郎先生が主で、私もそのお手伝いをした。ところが、昭和十一年天皇陛下の行幸を仰ぐことになって、その折に何を陛下に御目にかけるかが問題となった。結局、学校の特色を現わし、而かも北海道独自のものということになり、商業実践の授業と北海道経済特に北千島漁業の状況を御覧に入れることになった。そして「北海道経済研究所」がその任務を受けたが、数分の間、北洋漁業の現状を現わすにはどうすればよいか、大野先生初め所員は真剣に検討し

る。楽しかった永い交遊のあとを今ふりかえりつゝ、君をいとほしむ思い切なるものがある。

(小松中学の友人、元グンゼ倶会長)

『緑丘』創刊の頃

金 卷 賢 字

大正十三年四月に、小樽高商へ入学した。その秋頃に、文芸部員の募集が行なわれた。木下彰君と私の二人が選出された。ある日、地獄坂を下りて玉の井寮(第四寮)へ帰ろうとして、途中に官舎街を通り抜けていると、村瀬玄先生にお会いした。

その時の村瀬先生のお話によると——アメリカのカレッジでは、学校新聞が発行されていて、仲々盛んである。君達の校内雑誌も、新聞形式にしてみてもどうか……などの御示唆であった。校内で部長の富士元武雄先輩に報告した。これが実現して校内新聞『緑丘』

となった。当時、文芸部の顧問は大野純一先生であった。

紙名も題字も共に、伴房次郎校長を煩わした。私共の手で何号まで新聞を編集したのか、いま記憶にはない。最初から諸先生方や学友達の温かい応援を得て発行された。諸先生方には殊のほか好意を寄せて頂き、度々寄稿を賜わった。

この新聞が、わが国最初の学校新聞として評価されたのは、かなり後のことである。大野先生は若い顧問先生として、われわれは兄のように親近感をもっていた。新婚間もない新居——南小樽駅に近いところ——に部員数名で度々押しかけて、御迷惑をおかけした始末である。

もはや五十幾年の星霜である。『緑丘』も、その後幾変遷している。恩師もすでに亡く、旧友も乏しくなった。母校に栄光を。

(昭2年卒、元小樽商大教授、専修大学教授)

校を卒業したが、すぐ大野君は小樽の高商に進み、私は一ツ橋の予科に入ったので、そのあと三年間は別れ別れになっていた。しかし大野君は大正八年の春、小樽高商を卒業して私と同じ一ツ橋の本科三年に移って来た。ちょうどその翌年の四月から旧来の専攻部が廃止されて新しく東京商科大学として発足することになっていたので、大野君はそのまま新制の東京商科大学に進まれたが、私は身体が弱くて病氣ばかりしていたので本科の三年も卒業し終らないで退学して田舎へ帰ってしまった。

大野君は東京商大を卒業すると直ぐ小樽に帰って母校で教鞭をとり、程なく独逸へ留学したり、また昇格した小樽商科大学の初代の学長になったりして、ずっと小樽に住むようになったために、お互いに顔を合わせることもなくて二十数年を経た。

その間、私もグンゼという生糸をつくる会社に入り十年近くも紐育につとめたり、彼方此方に転住のあと、ようやくに東京に住みつくようになって、終戦もここで迎えた。

大野君も小樽商大を停年で辞めて何時の間にか東京に住むようになって、中学の同窓会や一ツ橋のクラス会で私たちお互いに顔を合わせる機会も持ち、久し振りに親しい交友を樂しむことが出来るようになったのである。

大野君は中学時代から容姿端麗な美少年で、学業も優秀、終始成績が最上位を占め、しかも極めて温厚な、心やさしい男で誰からも親しまれ尊敬されていた。

こんな話もある。彼が東京高商本科三年に転入学することになって新たに在京の保証人をさがさねばならぬことになった。後に永井柳太郎の秘書官になりその後代議士にもなった私たち中学の同級生が当時未だ早稲田大学の学生であった。「君の保証人なら俺が探してやろう」と云って彼は大野君を同伴して当時西大久保にあった郷里の殿様、前田侯爵の別邸を訪ねた。「この男は郷里出身の学業最優秀の青年だから是非侯爵に保証人になってやって貰い度い」と取次ぎに出た家令に申入れた。何しろ当時の貴族院議員であり百万石のお殿様に紹介状の一つも持たずに現われた唐突な訪問者の申出はもちろん不首尾に終わったが、大野君はわれわれ学友のみんなから、それほどに尊敬され、誇りとも思われていたのである。

先年私は「百万石物語」という小著を上梓した。そのときも彼はその内容を学究的な立場から高く評価して私を激励し、「推薦のことば」を書いて巻頭を飾ってくれた。

年老いてからは月日のたつのがほんとうに早い。君が昇天されてから早や一年半にな

だったが、彼は卒業式をそこそこに親しい僕たちにも知らせず、抜け出すように北海道に飛び立ち、小樽高商に受験して見事に合格。しかも高商在学中は精力的に勉強に励んだと見えて、政府の資金による独逸への留学、母校の教授、窮極には小樽商大学長にまで躍進するといった正に超人的出世には、われら同僚の羨望の的とされたものである。

だが、惜しいかな、この輝かしい学長の地位もたしか任期半ばにして、彼は大患に襲われて長期療養を要するため引退を余儀なくされたのである。

学長を退いた大野君は其後、東京に引揚げ、都下国分寺市本多三丁目自宅を新築して、健康の回復に専念しつゝ、悠々自適の余生を迎えた。

本来の彼は筆無精でか、小樽在住の長い期間にも恐らく友人仲間ですら音信を交したことなく、僕なども彼から一枚のハガキすら貰った記憶がない。

それが国分寺に転居してからは、僕は彼の新居を訪ねて家族の皆さんと談笑に耽ったり、彼もまた頻々と電話をよこしたりして、昨年（五十七年）一月三十一日彼の病没後の今日も、大野・東の両家は内輪同然の親交を持續している。

彼はまた不思議にも政界の話に興味を持ち（彼自身政治家の野心は皆無）当然に社会主

義は大きらいで、毎朝の新聞を見て気に入らぬ記事には反撥して直ちに文句を連ねて僕に電話をよこす、謂ふなれば、彼こそ熱心な自民党の旗振りの類だと、冷かしたり笑ったりして来たものだ。

また彼とはほとんど毎月のように都心の新橋界限にまで進出した。中食には大概、そばの付き合いをさせられたことも印象的だが、それはそれとして、彼が小松中学の寄宿舎に居た当時、ザルそば一〇杯を平らげて一挙に大食漢の勇名をとどろかせた珍談も、数十年の昔のことながら忘れ難い追憶の一節である。

（小松中学の友人、元国会議員）

保証人候補に前田侯爵

原 谷 一 郎

私は大野君と同郷で、旧制の石川県立小松中学校にいっしょに入学し、大正五年の春同

一九一六年、われわれは進学の学校を異にしたため、別れ別れになり、交遊は中絶したが、一九二四年前後私は札幌に住んだことがあり、その頃大野君も小樽に在住していたので、しばしば往来した頃が懐しく思い出される。その後彼は商品学の自然科学的研究であったか、はっきり記憶しないがドイツに留学することになり、私も最高裁判所の事務総局に転じたので札幌を離れて東京に帰ることになった。筆不精の彼は留学中も滅多に手紙はよこさなかったが、西欧の風景や下宿のドイツ人家族との団欒の様子などを撮影して送ってくれたりした。かくて彼は無事留学を終えて帰国し、母校の教職に復帰し、続いて三期にわたって学長の任務を果たした後、勇退して悠々自適の生活を送ることになったのである。洵に教育の聖職に生涯を捧げて功成り、名遂げて静和な生活に帰着した彼に対し、私は改めてその功績を称揚し且つ榮譽ある引退を心から祝福したのである。

かくして彼は一応身の整理が終ると、老後の安息の地として国分寺市を選び、地を相して私の近くに住むことになった。

われわれは昔ながらの水魚の交遊に復帰できたことを悦んだのであったが、私は間もなく娘達のために鎌倉に新築した家に移らなければならなくなったのである。鎌倉・国分寺

間はおたがいに齡のせいもあり、そう頻繁に往復するには距離が遠すぎた。それでも、元来出不精の彼が鎌倉までは億劫がっていたのだが、私の外出不可能なことを承知していたので自分で出向くことを承諾してくれたのであった。約束は必ず実行する彼の性格を知っている私は、朗報と思って彼の到来を鶴首して待った。然るに彼は約束の日から一ヶ月もたたぬうちに突然昇天してしまったのである。私は、われわれの人生劇場においてまだまだ活躍の舞台が残されていた筈なのに、あわて、引幕を命じてしまった舞台監督の未熟さと、無智の冷酷さに、やるせない不満を覚えざるを得ないのである。今はたゞ来世の再会を楽しみに、静かに亡友の冥福を禱りつゞけるばかりである。

(小松中学の友人)

ザルそば十杯をペロリ

東 舜 英

大野純一君と僕は、石川県立小松中学では同級で、而も大の仲良しで、大正五年の卒業

第二編 大津次主を思ふ

袴姿の中学時代

志 羽 俊 栄

七十余年の大野君との交友は中学時代に始った。彼の加賀の郷里、北前船の港津ふなつきはであった石川県瀬越町は、私の祖父父母の町、越前吉崎とは大聖寺川の河口をはさんで相對していたので、彼と始めて会って話し合った時から親近感を覚えていた。中学の五年間は共に寄宿舎にいて日常生活を過しながら、机を並べて予習、復習をしたのであった。彼が袴のうしろを引きずるように裾長にはいて、廊下をスタスタと歩いて行く後姿が、今でも印象深く思い浮べることがある。寄宿舎で深夜、遠雷のように聞える日本海の潮騒の音を聴きながら、宿題の整理をしたり、南東の加飛国境の空に聳える白山連峰の残雪を眺めながら、運動場の一角に残る古城の天主台跡に萌え出た若草に座して話しこんでいて、夕食の鐘の音に驚いて食堂へ駆け込んだことなど、こまごました思い出がいつまでも脳裡に残っているのである。

- 七月一日 北海道開発審議会特別委員を委嘱された。
- 昭和三十一年 (一九五六年)
- 三月三十一日 北海道総合開発委員会委員を委嘱された。
- 昭和三十三年 (一九五七年)
- 七月二十九日 小樽商科大学長の任期を満了した。
小樽商科大学教授に任ぜられた。
- 昭和三十七年 (一九六二年)
- 三月三十一日 停年により小樽商科大学を退職。
- 四月一日 小樽商科大学名誉教授の称号を授与された。
- 昭和四十三年 (一九六八年)
- 十一月三日 勲二等に叙せられ、旭日重光章を授けられた。
- 昭和五十七年 (一九八二年)
- 一月三十一日 午前一〇時三〇分心不全により逝去。
従三位に叙せられた。
- 二月二日 禅林寺(三鷹市下連雀)において葬儀を行なう。
天皇陛下より祭葬料を下賜された。

大野の中学時代

志 羽 俊 栄

第二部 大野先生を偲ぶ

三月三十一日 留学のため出発。

五月三十日 在留国としてイタリアおよびアメリカを追加された。

昭和五年 (一九三〇年)

六月二十八日 在留満期後昭和六年一月一日まで私費滞在を許可された。

昭和六年 (一九三一年)

一月十日 留学を終え帰国。

昭和十一年 (一九三六年)

六月十三日 勲六等に叙せられ、瑞宝章を授けられた。

昭和十三年 (一九三八年)

八月二十八日 臨時召集により入隊。

昭和十五年 (一九四〇年)

三月九日 陸軍歩兵中尉に任ぜられた。

七月三十一日 召集解除。

八月十六日 勲五等に叙せられ、瑞宝章を授けられた。

昭和十八年 (一九四三年)

十二月七日 臨時召集により入隊。

昭和十九年 (一九四四年)

四月一日 小樽高等商業学校が小樽経済専門学校と改称されたことに伴い、小樽経済専門学

校教授に任ぜられた。

従四位に叙せられた。

昭和二十年 (一九四五年)

八月二十日 陸軍大尉に任ぜられた。

九月十二日 召集解除。

昭和二十一年 (一九四六年)

五月三十一日 小樽経済専門学校長に補せられた。

昭和二十三年 (一九四八年)

十一月二十日 日本学術会議会員に当選した。

昭和二十四年 (一九四九年)

五月三十一日 小樽経済専門学校が小樽商科大学に包括されたことに伴い、小樽商科大学長に補

せられた。

昭和二十七年 (一九五二年)

四月一日 小樽商科大学短期大学部学長を兼職。

昭和二十八年 (一九五三年)

二月二十日 北海道科学技術審議会委員を委嘱された。

七月二十九日 小樽商科大学長に再選された。

昭和二十九年 (一九五四年)

大野純一先生略歴

(奥谷清一編)

- 明治三十一年 (一八九八年)
八月五日 北海道空知郡滝川村に生まれた。
- 明治三十七年 (一九〇四年)
四月一日 滝川尋常高等小学校尋常科に入学。
- 明治四十三年 (一九一〇年)
三月三十一日 滝川尋常高等小学校尋常科を卒業。
- 明治四十四年 (一九一一年)
四月一日 石川県江沼郡瀬越村塩谷尋常高等小学校高等科に入学。
- 大正五年 (一九一六年)
三月三十一日 塩谷尋常高等小学校高等科を卒業。
四月一日 石川県小松中学校に入学。
- 大正八年 (一九一九年)
三月三十一日 小松中学校を卒業。
四月一日 小樽高等商業学校に入学。
- 大正十一年 (一九二二年)
三月三十一日 東京高等商業学校専攻部に入学。
- 大正十二年 (一九二三年)
三月三十一日 東京高等商業学校専攻部を卒業。
四月二十一日 小樽高等商業学校講師を嘱託された。
十二月二十九日 小樽高等商業学校助教授に任ぜられた。
十二月一日 現役兵として入隊のため休職。
- 大正十三年 (一九二四年)
三月三十一日 召集解除。
十月二十九日 木村キミと結婚。
十一月十日 小樽高等商業学校教授に任ぜられた。
- 大正十五年 (一九二六年)
四月一日 陸軍歩兵少尉に任ぜられた。
- 昭和二年 (一九二七年)
二月十五日 商業学および経済学研究のため、ドイツ在留を命ぜられた。

- 四月一日 東京高等商業学校専攻部に入学。
- 大正十一年 (一九二二年)
三月三十一日 東京高等商業学校専攻部を卒業。
四月二十一日 小樽高等商業学校講師を嘱託された。
十月二十九日 小樽高等商業学校助教授に任ぜられた。
十二月一日 現役兵として入隊のため休職。
- 大正十二年 (一九二三年)
十一月三十日 満期除隊により予備役に編入。
十二月一日 予備役見習士官として勤務演習に応召。
十二月六日 復職。
- 大正十三年 (一九二四年)
三月三十一日 召集解除。
十月二十九日 木村キミと結婚。
十一月十日 小樽高等商業学校教授に任ぜられた。
- 大正十五年 (一九二六年)
四月一日 陸軍歩兵少尉に任ぜられた。
- 昭和二年 (一九二七年)
二月十五日 商業学および経済学研究のため、ドイツ在留を命ぜられた。

の当時の先生の熱情と母校愛は誠に壮烈なものがあつたと思います。

日頃、温顔をたたえ、むしろ温厚そのものの柔いお人柄を感じさせ、教え子はその風格に多大の感化を受けたと思われませんが、大学統合という重大危機に際会して烈々たる行動を展開されたことを想起しますと、先生は外柔内剛の誠に偉大な教育者であつたと思うのであります。

昭和三十二年くも膜下出血という重病にかかられ、奇跡的に回復されましたが、健康に自信を失われたのか学長を退任されたのであります。しかし十一年の長きに亘り、母校の発展に尽くされた御功績は誠に偉大なものがあります。

昭和四十三年十一月には、その御功績に対し、勲二等旭日重光章叙勲の栄によくされたことはむべなるかなと思つてあります。

学長御退任後も、母校のことはひとときも忘れることなく、我々教え子の会合にも万障お繰り合わせ御出席頂き、種々励ましの言葉を頂いたのであります。

承りますと、昨年六月七日、昭和十一年卒業生の第四十五回全国大会が小樽銀鱗荘で開

催され、先生は、はるばるこの会に出席され、仰せられるには、「我が母校は優秀な卒業生の母校愛によって鞭撻され、援助されて発展して来たのである。高商、大学を通じて、われらの母校は一つである。その出身者であると言ふことは、一生消えない身に刻みこまれた誇り高き刻印である。

緑丘会の諸君、光輝ある我々の母校をこれまで以上に精神面に於いても、物質面に於いても熱援下さるようお願いする。」

というお言葉を述べられた由であります。

大野先生、我々はこの意を体し、今後共母校の発展に全力を尽くすことを誓います。
大野先生、どうか安らかにお休み下さい。さようなら。

昭和五十七年二月二日

(昭7年卒、前緑丘会理事長、三菱地所(株)会長)

大野先生の著作目録としては、『商学討究』復刊第一三卷三号（昭和三十七年十一月）、「大野純一名誉教授記念号」の二五六―二五八頁に、喜多祐教授の作成された詳細なものがある。しかしその後にご執筆のエッセイなども少なくないので、それらを追加し、さらに著作という概念をやや拡大して、先生がお書きになりあるいはお話しになったことで、印刷され公けになっているものをも含めることにした。なお北洋相互銀行の行内報に執筆されたものについては、河田照子氏のご指示による。

目録の表示形式は喜多教授のそれに従っている。ただし、緑丘新聞はたびたび名称の変更があり、『緑丘』（一一八〇号）、『小樽高商緑丘』（八一―八六号）、『小樽高商緑丘新聞』（八七一―四三三号）、『緑丘』（一四四―一九〇号）、不明（一九一―一九七号）、『小樽経専緑丘』（一九八―二〇一）、『緑丘新聞』（二二―二六〇号）、『小樽商大緑丘新聞』（二六一―二九〇号）となっているが、目録の中では二一〇号まで『緑丘』、二一一号以降を『緑丘新聞』と略記した。また、墓目英三氏の編集による『緑丘』、現在の緑丘会誌『緑丘』もあり、新聞の『緑丘』との混同を避けるため、それぞれ『墓目』『緑丘』『緑丘（会誌）』とした。

数多くのご著作のうちから、本追想集にふさわしいものを選択するのは、非常に困難な仕事であるが、つぎのように考えた。貨幣論の真摯な研究者であり、大学行政に大きな功績を残され、滋味あふれるエッセイを書かれた大野先生の、在りし日の面影を全体として伝えるために、貨幣論にかんする論究、学長としての公式な挨拶・告辞、随筆という三つのグループに分け、それぞれから数

篇ずつを選ぶことにした。

ご著作のなかで最も代表的なものは、いうまでもなく、先生がドイツ留学中ライプツィヒで出版された *Sozialökonomische Theorie des Geldes*, 1931（『貨幣の社会経済理論』）であるが、それを掲載することは紙幅の関係から到底不可能であろう。だが本追想集に収録した「貨幣と経済価値」は、同書の第二章にもとづく論文であり、また「貨幣数量説と流通速度の概念について」は、同書の第三章における問題をひきつづき追求されたものにほかならない。

本書に収録の「貨幣と経済価値」より「通貨政策の目標について」までの四篇は、貨幣論にかんする論究のなかから選び、つぎの「学生諸君に望む」より「小樽商科大学の設立 小樽商大短期大 学部設立」までの七篇は、公的な挨拶や告辞などのうちから、そして「あの頃の話」より「わが母校のルーツと将来への願い」までの十三篇は、随筆・エッセイなどから選び、それぞれのグループのなかでの配列は、発表年月順とした。

最後の「わが母校のルーツと将来の願い」は、五十六年六月七日小樽市銀鱗荘で開催された、さむらい会（昭和十一年卒業同期会）卒業四十五周年大会におけるスピーチよりの抜粋収録とされているが、同年十月二十八日京都萬里における緑丘会京都支部総会でのスピーチによって補完されているように思われる。しかも、会誌第五二号に掲載される最終段階で若干の加除が行なわれたようである。先生はこの修正に大層ご不満であられた。収録に当たり、あらためてさむらい会の録音テープと、京都支部の録音テープによりチェックし、両者にあらわれない事柄などを削除し、最終的にはさむらい会のテープによって補正した。

（長谷部亮一記）

- 八月 「母校を去るにあたって」 墓目英三編『緑丘』第二六・七号。
- 八月 「金はなぜ世界通貨となったか」 『行友』第二五号。
- 十一月 「勅任官に頭を刈って貰ったむかし話」 『墓目』 緑丘』第二八号。
- 十一月 「フィッシャーの貨幣数量説」 『行友』第二六号。
- 昭和三十八年 (一九六三年)
- 一月 「世が世なら打首にでもなった話」 『墓目』 緑丘』第二九号。
- 三月 「随想」 『行友』第二七号。
- 昭和三十九年 (一九六四年)
- 一月 「諸君について忘れ得ぬこと」 『緑丘会報』第一五号。
- 一月 「経営における人と組織」 『行友』第三〇号。
- 昭和四十年 (一九六五年)
- 三月 「市井の人小林多喜二の片鱗」 『墓目』 緑丘』第四二号。
- 昭和四十一年 (一九六六年)
- 二月 「苦米地先生の私への申し送り」 『墓目』 緑丘』第四七・八号。
- 三月 「責任者不在の日本国」 『行友』第三四号。
- 六月 「祝辞」 (緑丘会第二十六回全国大会) 『墓目』 緑丘』第五〇号。
- 昭和四十二年 (一九六七年)
- 十一月 「糸魚川君と私」 『墓目』 緑丘』第五八号。

- 昭和四十四年 (一九六九年)
- 四月 「先生の一通の手紙と私」 『墓目』 緑丘』第六四・五号。
- 昭和四十六年 (一九七一年)
- 九月 「小樽商科大学の設立 小樽商大短期大学の設立」 (創立六十周年記念講演) 『墓目』 緑丘』第八〇号。
- 昭和四十八年 (一九七三年)
- 六月 「墓目君ご苦労さまでした」 『墓目』 緑丘』第八八号。
- 昭和五十一年 (一九七六年)
- 十月 「緑丘伝統の燈火は消えず」 正八会会誌『遙かなり小樽』。
- 昭和五十二年 (一九七七年)
- 五月 「身辺雑記」 緑丘会会誌『緑丘』第四四号。
- 昭和五十四年 (一九七九年)
- 五月 「宿願の大学昇格成る」 (古関周蔵・佐藤政志との座談) 『緑丘(会誌)』第四八号。
- 昭和五十六年 (一九八一年)
- 十二月 「わが母校のルーツと将来への願い」 『緑丘(会誌)』第五二号。

- 昭和十七年 (一九四二年)
 - 一月 「大東亜戦争と日本財政」 『緑丘』第一五五号。
 - 八月 「シムムペーターの『貨幣理論の基礎方程式』に就て」 『商学討究』第一七卷上冊。
- 昭和十九年 (一九四四年)
 - 三月 「戦争経済と経済循環」 『商学討究』第一八卷特集号、手塚寿郎教授追悼記念論集。
- 昭和二十一年 (一九四六年)
 - 六月 「学生諸君に望む」 『緑丘』第一九九号。
- 昭和二十二年 (一九四七年)
 - 七月 「貿易再開に際して」 『北海貿易』七月十日号。
- 昭和二十四年 (一九四九年)
 - 十二月 「序文」 小樽経済専門学校『経済再建の諸問題』、創立三十五周年記念論文集。
- 昭和二十五年 (一九五〇年)
 - 七月 「小樽商科大学開学式式辞」 『緑丘五十年史』(三十六年七月刊)に掲載。
 - 十二月 「序」 『小樽商科大学開学記念論文集』第一分冊。
- 昭和二十六年 (一九五一年)
 - 三月 「序」 『小樽商科大学開学記念論文集』第二分冊。
- 昭和三十年 (一九五五年)
 - 四月 「永遠の生命を有する小樽高商」 小樽商大『緑丘新聞』第二二七・八号。

- 昭和三十一年 (一九五六年)
 - 十月 「大学祭に望む」 『緑丘新聞』第二七二・三三三号。
- 昭和三十四年 (一九五九年)
 - 七月 「創立四十五周年を迎えて」 『緑丘新聞』第二七八号。
- 昭和三十五年 (一九六〇年)
 - 六月 「想い出と感謝」 緑丘会東京支部会報『東京緑丘』第一号。
 - 九月 「昔ばなし」 北洋相互銀行『行友』第一八号。
- 昭和三十六年 (一九六一年)
 - 一月 「中小企業と銀行との相互協力」(翻訳) 『行友』第一九号。
 - 四月 「ケネディ政権とドル防衛」 『行友』第二〇号。
 - 七月 「戦後の学園風景」 小樽商科大学『緑丘五十年史』。
 - 八月 「貨幣数量説と流通速度の概念について」 『商学討究』復刊第一二卷一・二号、創立五十周年記念論文集。
- 昭和三十七年 (一九六二年)
 - 八月 「札幌鉄道建設当時の北海道人と現代人の反省」 『行友』第二二号。
 - 十一月 「通貨政策の目標について」 『行友』第二二号。
 - 二月 「随想」 『行友』第二三三号。
 - 五月 「物価の問題と価格の問題」 『行友』第二四四号。

十月 「貨幣品質学説の論拠とその批評」 『商学討究』 第六卷中冊、創立二十周年記念論文集。

十月 「英国金本位制度の停止に就て」 『緑丘』 第五七号。

昭和七年 (一九三二年) *Miyashita, Koichi: Beiträge zur japanischen Geldgeschichte, Weltwirtschaftliches Archiv, Bd. 35, Heft 1 (Jan. 1932).*

二月 「高島佐一郎著『金融統制論』(書評)」 『商学討究』 第六卷下冊。

六月 「H・ブロック『マルクスの貨幣理論』(資料)」 『商学討究』 第七卷上冊。

昭和八年 (一九三三年)

一月 「ヘルベルト・ブロック著『マルクス貨幣理論批判』(邦訳) 宝文館。

大正二年 「高島教授著『金本位の後に来るもの』(書評)」 『商学討究』 第七卷下冊。

六月 「外国為替管理の綜観」 『商学討究』 第八卷上冊。

昭和九年 (一九三四年)

一月 「将来の通貨制度」 『通貨制度研究会報告』 第一集 東洋経済新報社。

大正二年 「古代希臘に於ける貨幣思想」 『商学討究』 第八卷下冊。

十二月 「景気管見」 『緑丘』 第八四号。

十二月 「マルサス対リカードの価値論争」 『商学討究』 百年忌記念マルサス研究』 第九卷中・下合冊特集号。

昭和十年 (一九三五年)

二月 「通貨統制の目標に就て」 日本経営学会関東部会小樽大会編『産業統制研究』 同文館。

五月 「新興北千島漁業の経済調査」(服部政一・斎藤雄治と共同執筆) 小樽高商北海道経済研究所 杉山書店。

六月 「金本位ブロックの崩壊と世界幣制の将来」(上) 『緑丘』 第八八号。

七月 「金本位ブロックの崩壊と世界幣制の将来」(下) 『緑丘』 第八九号。

十月 「通貨統制の目標としての貨幣所得の安定」タービン説の批判』 『商学討究』 第一〇卷中冊。

昭和十一年 (一九三六年)

二月 「劍橋数量方程式に就て」 『商学討究』 第一〇卷下冊、創刊十周年記念号。

十二月 「動態的貨幣数量説」 『商学討究』 第一一卷合冊特集号、創立二十五周年記念論文集。

昭和十二年 (一九三七年)

六月 「準戦時財政と景気問題」 『商学討究』 第一二卷上冊。

六月 「あの頃の話」 『緑丘』 第一号の思い出』 『緑丘』 第一〇〇号。

昭和十三年 (一九三八年)

六月 「カッセル金数量説の理論的批判」 『商学討究』 第一三卷上冊。

要するに、小さな大学であっても、またキャンパスが広大なものでなくとも、やりようによっては立派な大学が出来るということでもあります。如何にすべきかということは、簡単ではありませんが、大学の側でもよく考えてもらい、また同窓の皆さんからも良い知恵を与えていただき、かつ応援していただかなければならないと思うのであります。

学校は学校、緑丘会は緑丘会というようなことをしては、どちらも栄えはいたしません。今まで学校が栄えたのは、緑丘会が後から支えてくれたからであります。同窓は母校の先生方を心から援助し学校もそれに応えてきました。どうぞもう一度、現在の時勢に合った方法で、昔のような緑丘会と小樽商大の関係を造りあげるよう、皆さんぜひ力をかけていただきたいと思います。

私がこのようなことを申しあげる機会も、これが最後であろうと思います。今日の話は私の遺言としてお聴き留め下さるようお願いいたします。

(緑丘会会報『緑丘』第五二号、昭和五十六年十二月、一一一―一五頁による。ただし、さむらい会―昭和十一年卒業同期会―卒業四十五周年大会、昭和五十六年六月七日の録音テープと緑丘会京都支部昭和五十六年度総会、同年十月二十八日の録音テープによって補正。)

大野純一先生著作目録

- 大正八年 (一九一九年)
一月 「社会政策と国際商業政策」 (写本) 小樽高等商業学校卒業論文。
- 大正十一年 (一九二二年)
一月 「個別的因果律について」 (写本) 東京高等商業学校専攻部卒業論文。
- 大正十四年 (一九二五年)
七月 「ベンディクセンの貨幣価値説に就いて」 小樽高商新聞『緑丘』第二号。
- 大正十五年 (一九二六年)
七月 「貨幣の価値と数量説 (資料)」 小樽高商『商学討究』第一卷上冊。
十一月 「漁業資金の話」 『緑丘』第一二号。
十二月 「ヘルフェリッヒの貨幣価値論」 『商学討究』第一卷下冊。
- 昭和六年 (一九三一年)
Sozialökonomische Theorie des Geldes, A. Deichertsche Verlagsbuchhandlung, Leipzig 1931.
六月 「貨幣と経済価値」 『商学討究』第六卷上冊。
「Singer 教授の『表号としての貨幣』 (書評)」 『商学討究』同右。

国際的視野の問題、科学技術の問題は、今日経済界で非常に重視されつつありますが、渡辺校長は七十年前前からこれを見抜いておられました。先生の慧眼と卓見には、今もって頭の下がる思いがいたします。まことに偉大な先生でありました。

さて、戦後の学制改革により、大学の数は非常に多くなり、いまわが国に国・公・私立の大学が、短大を入れますと千もあるといえます。そしてそれらの大部分には、経済科とか経営科とか商科とか、実業界向きの課程がお膳立てしてあるのです。そこで、他の大学と競争して負けないうためには、「大きな大学がいいか、小さな大学がいいか」ということが、卒業生の一部の間でいろいろ問題になっております。私は、これはそう簡単に結論の出る問題ではないと思いますが、小樽高商のルーツを良くかみしてもらえば、おのずから解答が出てくると思うのであります。

これについて、私がかねてから考えていたことと同じことを、ある先輩から聞かされました。私が在職しておりました頃、国立大学長会議は年に二回程開かれましたが、ある時たまたま、東大の矢内原忠雄さんと同じ委員会になり、休みに食事を一緒にしたことがあります。その時私は、「矢内原さん、あなたの大学は文部省の大学予算の大部分をもって

ゆかれて、いいですね。小樽の予算は尻から二、三番目位のもですよ」と、いささか愚痴を述べました。

ところが矢内原さんは、「私は先般アメリカ各地の大学を視察して来たが、一番うらやましく思ったのは、ハーバード大学でもコロンビア大学でもなく、マサチューセッツ州に在るアーマス大学でした。この大学は学生数も少なく、校庭とてそんなに広いものではないが、教授と学生がマンツウマンでじっくり結びつき、ほんとうの教育が行なわれており、うらやましいと思った。東大のように大きくなってしまおうと、学問研究の施設としては良いかも知れないが、本当の教育はなかなかできないのですよ」と言われました。

それからもう一つ、これは私自身が体験したことです。ドイツに留学したとき、新カント派の著名な哲学者達を育てあげた、かの有名なハイデルベルグ大学を訪れたことがあります。さぞかし瞑想にふけるにふさわしい、静かな自然の環境につまれているものと思つて参りましたが、なんと予想に反して、街の真中に校舎が在るのでした。大学のキャンパスそのものは、現在の小樽商大よりももっと条件が良くない。それでも世界に有名な学者を輩出するのであります。

な先生方をつれて来られました。当時、北海道の新設校にこれだけの教授陣を揃えたということは、驚異に値することです。

つぎに申しあげたいことは、渡辺先生がどのような卒業生を育てようと考えられたかです。先生は小樽高商の卒業生を、国際的視野をもちかつ科学技術を尊重する実業人として育てあげること、力を注がれました。

国際感覚を養成するため、第一回、第二回の卒業生は在学中、ウラジオストック、ハルピン、長春、大連、旅順、朝鮮各地を巡る修学旅行に出かけたのです。当時学生に国際的な修学旅行をさせる学校は他になかったのであります。

そして小樽高商では、英語の外に独、仏、中国、ロシア、スペインの五か国語を選択履修させ、しかもそれぞれの語学に専任の同国外人教師を揃えて教育を行なったのです。私が入学した頃には、商業概論や商品学も外人が英語で講義したものです。

また小樽高商には創立当初から、商品実験室と称して、五十名分程の特殊な机を備えた教室があり、その机には、それぞれガスと水道が引いてありました。約五十台の顕微鏡と、十数台の天秤を備えた部屋もありました。さらに大正の中頃には、第四寄宿舍の近く

に石鹼工場を造り、そこで出来た商品は、「高商石鹼」と称して、休暇中に学生が道内に売り廻ったのであります。

ある時、私は直接渡辺先生に、「うちは高商なのに、何故商品学や化学の実験に力を入れるのですか」と質問したことがあります。すると先生は、「我輩が靴下を買うために百貨店へ行ったとする。店員は一足十三銭と、一足十五銭のものを出して見せる。そこで、どういう訳で二銭の差があるのかと質問しても、満足に説明出来る店員に逢ったことがない。それではいけない。商人の使命は、ある品物をAの人からBの人へ、ある国から他の国へ移転するだけのものではない。むしろ、買い手の必要なもの、より満足するものを考え、創造していかなければならない。そのためには、科学技術や商品学の知識を持たねばならない」と話されました。

また石鹼工場について私が、「先生、工場はいつも赤字ばかり出しているではないですか」と言いますと、「赤字は赤字で、それで良いのだ。如何にすれば赤字が出るかということは、会計学上の一つの問題になる。これは良い勉強の材料になるのだ」と、先生はいささか笑いながら答えられたのでした。

学部が出来たのは大正八年になってからです。したがって、将来実業界に雄飛しようとする優秀な青年は、競ってこの五つの高商に入学しました。わが小樽高商にも、ダイヤモンドの原石のように素質の良い学生が全国から集まって来たのです。いかに学生の素質が良くとも、受入れる学校側がそれにふさわしいものでなければ、決して立派な卒業生を生み出すことはできませんが、小樽高商は非常に良い条件を備えておりました。

文部省は初代の校長に渡辺龍聖氏を任命しました。この方は早稲田大学の文科を出て、東京音楽学校の校長もされた人ですが、当時は清国の袁世凱総督の教育顧問をしておられました。全く異色の傑出した人物でありました。この渡辺校長が第一に力を入られたのは、あらゆる努力を払って、立派な教授陣を造りあげるということでした。

まず教頭として、伴房次郎先生をつれて来られました。先生は当時京都帝大の法学部の助教授であり、同帝大の久原総長のお嬢さんをお嫁さんにしていた方で、将来かならず京都帝大を背負って立つ人物と思われていたのです。

つぎに渡辺校長は、東京高商専攻部から、後にわが国経済学界の鬼才と称せられた大西猪之介先生を、卒業と同時につれて来られました。先生は卒論に「帝国主義論」を書か

れ、すでに学生時代からその学才を高く評価されていた人ですが、小樽の教官になってから、『囚はれたる経済学』『伊太利亜の旅』の名著を世に送り、かつ当時数少ないインテリ雑誌『太陽』に、北辺の地から盛んに投稿され、堂々の論陣を張っておりました。

さらに渡辺校長は東京外語から苦米地英俊先生を新規採用され、先生に新しい分野の商業英語を開拓するよう奨められました。いうまでもなく先生は、小樽高商をわが国商業英語の発祥の地たらしめた人でありましたが、それには渡辺校長の激励と鞭撻があったのであります。この苦米地先生が若くして外国留学されたとき、ある二人の卒業生が多くもない自分の月給の一部をさいて、毎月いくばくかを送金していたという美談があります。

また、後に東京商科大学の学長になられた三浦新七先生は、兼任の講師ではなく、東京高商と小樽高商の両方の教授を兼務しておられたということも、特筆すべきことでしょう。そのほか、当時東大では各学部の首席卒業生に恩賜の銀時計が与えられたのですが、われわれの学生時代には、銀時計組の先生が二人おられました。一人は英語の八木先生、一人は倫理の木村善太郎先生でした。

思い浮ぶままに何人かの先生の名前を挙げましたが、渡辺校長はまだまだ数多くの立派

最近はじめて全員東京勤務になったので是非会合し度い、健康上箱根まで行けるかどうか、とわざわざ国分寺まで二人の世話役が来てくれた。私は喜んで参加することにした。ところが当日わざわざ車で三人が迎えに来た。途中私の健康を考慮して三回もドライブ・インで休んでくれた。午後五時過ぎ全員集まったので半数交代で入浴することになった。大浴場でしたたる許りの山の緑をゆっくり眺めていた、ところが一緒に入ったA君とF君から代わる代わる「先生流しましょう」といって私の背中にお湯をかけるのであった。私は咄嗟に五十数年前の室蘭の風景を思い出した。そして緑丘の伝統と魂とは永遠に受け継がれるであろうことを確信したのである。

(正八会—大正八年卒業同期会—会誌『遙かなり小樽』、昭和五十一年十月、二七—三〇頁。)

わが母校のルーツと将来への願い

小樽高商は、明治四十四年に「第五高等商業学校」として設立されました。それまではわが国に国立の高商は、東京、神戸、山口、長崎の四校があったのみでした。これらはいずれも東京より西に所在していました。そこで東京以北にも高商を設置しようとの気運が盛り上がり、仙台、函館、小樽が候補地として名乗りをあげ、互いに競争し激しい誘致運動が展開されました。

当時、小樽から元区長の金子元三郎さんが、代議士として中央の政界で活躍しておりましたが、この方は偉い政治家で、「小樽に高商を持って来るならば、学校の敷地はもとより、先生の宿舍、学生の寄宿舎等を、全部地元で寄附する」と、自分の独断で政府に申し出たのであります。こうして小樽が最有力の候補となり、第五高商を設置することが出来たわけです。

その頃は、東大にも京大にも経済学部はありませんでした。東京、京都の二帝大に経済

視していたこと、二は商業実践及び商品実験を通じて理論と実際との融合をはかったこと、がそれである。この二つの特色は時代の要求と共に新たな装いをもって今日の小樽商科大学に継承されている。この点小樽の大学はユニークな存在である。新装のその一はラウンゲージ・ラボラトリーによる語学教育であり、その二はコンピューター・システムによる管理科学の研究指導である。

最後に私は緑丘魂又はその伝統に就いて一言述べて本稿を閉じることにしよう。

私が小樽に奉職したのは大正十一年である。その頃学校は文部省の委嘱を受けて毎年夏休みに社会人相手に成人講座なるものを十日間位各都市で開いた。確か昭和の初め頃だったと思うが、室蘭市で開催されたことがある。講座開始の第一日目には校長も出かけて行って開講の挨拶をするのである。私は初日からの講義を担当していたので、伴校長のおともをして行った。こんな場合、地元の卒業生は歓迎会を開いて欲待して呉れるのが緑丘の伝統のようである。私は伴先生に随行して出席し会が終って帰る時、第一回の卒業生のWさんが、われわれを宿まで送って来て呉れた。三人が旅館の部屋で一服していたところ、女中さんがやってきて「どうぞ皆様と一緒に風呂におは入り下さい」と言うので、揃っ

て浴場に行った。互いに話しながら浴槽から出て洗場で腰かけていたところ、W先輩は伴先生のうしろに行き「先生背中を流させて下さい」と言って丁寧に石鹸をつけて洗ってあげるのであった。私はこの時ばかり感激を受けたことはなかった。Wさんは室蘭一の米穀商の主人であり、頭の毛も両側を除いて大分禿げ上っている立派なご主人である。二十代の私にとっては感激と同時に驚異でもあった。

その後私は公用や私用で各地を訪れる毎に地元の卒業生とも度々逢う機会が多くなって来た。その度毎に私は緑丘同窓生の心からの温かさに接することが頻々であった。そこで昔々に室蘭で感激し驚異すら感じたことは何も不思議なことではなく、あれは緑丘の魂であったのだと悟るにいたった。

しかし敗戦を機として青少年の心情にはわれわれの考えも及ばぬ激変が生じたことはお互いに毎日の新聞や雑誌で感得しているところである。では小樽の戦後の卒業生はどうであろうか、と言うことに私は常日傾心を配っているのであるが、つい最近私は緑丘の伝統と魂は確かに彼等によって受け継がれていることを体験した。

九月の四・五日のことである。かねて昭和三十六年に卒業したゼミナールの諸君から、

は、先生の温顔に接せず残念な思いでありました。しかし寒さのおりから御用心なされておられるのだと思っておりました。

まさか、こう急に逝去されるとは思いもよらぬことでした。誠に痛恨の極みであります。学長先生は北海道滝川市にお生れになり、遠く石川県小松中学を経て、大正八年我が母校小樽高商を卒業なされ、更に東京高商（今の一橋）専攻科を御卒業、直ちに母校小樽高商の講師になられ、直ぐ助教授に就任されたのであります。

大正十三年には早くも教授に昇任されました。昭和二年から昭和六年に至る四年間の長きに亘り、ドイツ、イタリア、米国等へ留学、研鑽を積まれたのであります。

ドイツでは、ベルリン、ハンブルグ両大学に学ばれ、特に貨幣論を専門に研究を重ねて帰ってこられたようであります。

私自身も先生の帰朝早々に貨幣論を教わったのであります。古いことで、何を教わったか、今ではあまり覚えておりませんが、確か貨幣の経済に及ぼす機能について在来の学問は役に立たないので、これから近代貨幣論を身につけなければならぬという趣旨を述べられ、この一年間難しい貨幣論を講義するつもりだから、しっかり勉強に取り組んで貰いた

いというような話で、冒頭一発かまされたような気がしたことを今では懐しく思い出すのであります。先生は貨幣論の権威であり、当然のことながら立派な学究として、名声を博したのであります。

小樽高商は戦時中に小樽経済専門学校と改称されましたが、先生が校長に就任されたのは、昭和二十一年五月でありました。当時マッカーサー司令部は学制改革を打ち出し、大学の整理統合を行なったのであります。この結果、小樽経済専門学校は北海道大学へ合併される運命であったのであります。大野校長は、この伝統ある学校を何とか単独大学として発展させたいとの強い信念を持たれ、「他の大学に合併されるくらいなら、むしろ日本一の新制高校のほうがまだましである。」とまで云われ、悲壮な決意を持たれ、同窓有力OBと相諮り、文部省に対する働きかけは云うに及ばず、GHQに対しても直接陳情を行なうなど、非常な働きをされたのであります。

この結果、昭和二十四年五月に、日本の専門学校中、小樽高商だけが、大学統合をまぬかれ、単科の商科大学となったのであります。当時の小樽高商のレベルは大学に匹敵する内容を持っていることを万策を講じて当局に認識させた結果だと思っておりますが、そ

緑丘伝統の燈火は消えず

われわれが小樽の学校に入ったのは大正五年であった。その頃、商業経済関係の国立学校は、東京、神戸、長崎、山口、小樽の五高商のみであった。東大や京大にさえ経済学部はなかった。従って将来経済界に雄飛しようとする天下の青年は右五校に殺到したのである。

大正から昭和にかけてわが国の財界で目覚しい活動をなした者の多くが、この五校の出身者であったのは、故なきにあらざである。

この限りにおいて、お互いが小樽高商を母校に持つことは、誇りであり幸いである。

しかし、われわれが小樽を去ってから、日本の学校配置は大きく変わった。

大正八年には東京、京都の二帝大に経済学部が設けられた。同九年から十三年迄の間に全国各地に八つの高商が増設された。(他面大正九年には東京高商が、昭和四年には神戸高商が大学に昇格した。)更に戦後に至って、国立、私立の大学数は六百六十三校にまで

乱立され、それらの中、少なからざるものが、経済に関する学部を持つか、あるいは経済商業に関する専門の学校である。

ここでは先ず最近の北海道に限定して見よう。聞くところによれば、札幌だけでも大学と称するものが二十以上はあり、全道では五十位はあるだろう、とのことである。現に小樽、旭川間の鉄道沿線で大学のない市は滝川と砂川だけであり、他の市には全部大学なるものがある。戦後、駅弁大学という言葉がはやったが、今日では駅弁のないところにも大学だけはあるようだ。

この様な日本の大学乱立の結果は小樽商大に集まる学生にどんな影響があったであろうか。戦前は沖縄、朝鮮は勿論日本の隅々からまで志願者が集まったものであるが、さすがに昨今は本道出身者が過半数を占めるようになった。しかし道内高校生のすぐれた学生のうち文科系の者は小樽へ、理科系の者は北大へ、と言うのが一般の流れのようである。したがって、内地からの受験者も道内の彼等と競争する限り、相当の優秀者に限って入学して来るようである。

閑話休題、戦前の小樽高商は学科課程の上で二つの特色をもっていた。一は外国語を重

経済の一環として観察すべきである、そのためには各国の貨幣制度並びに外国為替を独立の講義として開設すべきである。就いては小樽に帰ってこの科目を担当する積りはないか。もしその意志があれば、自分宛に至急返事をして貰い度い。諸条件殊に留学の問題については自分に一任され度し。

と言うのであった。私は留学の可能性と母校に帰り得る喜びとで、早速左右田先生に相談し、銀行の方は辞退させて貰い、微力乍ら先生の指導のもとに当該科目を勉強して行き度いので是非お願いいたしますとの返事を差上げた。

こうして、私と緑丘学園との結びつきは大西猪之介先生の一通のお手紙によって決定的になったのであった。もしもあの時先生のあのお手紙がなかったならば、私は今頃は現在とは全く異なるところに辿りついていたであろう。(註 大正末期から昭和の初期にかけての金本位制の動揺、世界恐慌の襲来等を考えるとき、先生の先見の明に敬服せざるを得ない。)

こうして私は母校に勤務することになったのであるが、運命は誠に残酷であった。四月小樽に赴任するに先立ち、先生は急逝せられたのである。この訃報に接したとき私は悲歎

と言うよりも、ただ茫然自失し独り断崖絶壁につき放されたような思いがした。当時を偲ぶときいまだに暗澹たる気持になる。

先生は明哲な頭脳と輝かしき文筆の才によってわが国経済学界の鬼才(左右田先生の命名?)と称せられ、北辺の小樽の街の一角から中央の論壇に対し常に堂々たる論陣をはっておられたのである。

先生の夭折は緑丘学園のみならずわが国経済学界の一大損失であった。

尚、小樽高商の未来図については、大西先生は熱心な大学昇格論者であった。先生のこの理想は当時全学生にも反映し、しばしば校内で昇格問題の学生大会が開かれた。これには渡辺校長もいささか当惑されたようであるが、校長は大学と専門学校は上下の關係にあらず目標を異にする対等の学校であると称して、運動の火の手をおさえていたのであった。

(墓目英三編『緑丘』第六四・六五号、昭和四十四年四月、二二―二三頁。)

先生の一通の手紙と私

この頃、私は流れ去った過去をかえりみると、現在ここにこうしているということ、いくつかの人生の三叉路を経て到達したものであり、もしもその三叉路において自分が現に行なってきたとは違う選択をしていたならば、思いもおよばぬ人生行路を辿り現在とは全くかけはなれた立場にいることであろう、と考えることがしばしばある。

私は大正十一年四月から昭和三十七年三月に至るまで、小樽高商↓小樽経専↓小樽商大と四十有余年の間緑丘学園に奉職し、私の一生は緑丘に始まり緑丘に終わった、とも言えるのである。私の生涯と緑丘学園とのこのように深き因縁は二つの大きな三叉路を経て結ばれたのであった。

その一つは小松中学校から小樽高商へ入学したと言うことであり、いま一つは一橋専攻部を経て小樽高商に勤めるようになったと言うことである。

この二つのうち、前者は全く運命的なものであった。中学の卒業試験の直前父がたまたま旅先の小樽で病を得て危篤状態におちいったので早速小樽にかけつけたのであるが、父の病状が思わしくないので卒業試験を受ける暇もなくそのまま小樽に留まっていたのである。そのうちに地元高商の入学試験が迫って来たので周囲の人のすすめもあったので、高商に事情を話して仮りに受験を許して貰ったのである。―後に卒業見込書を提出するという条件のもとに―現在では想像も出来ない便宜的な取扱いをもらったものである。これが緑丘学園に到る三叉路の一つであった。全く偶然な運命によるものである。

他の一つの三叉路における選択は専攻部卒業の際における大西猪之介先生からのお手紙によって決せられたのである。当時私は左右田喜一郎先生のゼミナールの一員であり、卒業後は某銀行へ入社する積りで教務へその旨申し込んであった。その頃多くの会社銀行等は書類詮衡の上面接だけで採否を決めていた。確か十二月だったと思うが、その銀行からは書類詮衡の上面接だけで採否を決めていた。確か十二月だったと思うが、その銀行から面会日を指定して来た。ところが、それと前後して、大西先生から一通の封緘葉書（今の郵便書簡のこと便箋封筒を兼ねそなたものに切手が印刷されている）が到着した。何気なく開いて見ると次のような要旨のものであった。

今後、一国の経済の動向は単に一国だけを切り離して考えるべきではなく、常に世界

たので、私は東京行きを断る積りで飯川文三さんに相談した。

飯川さんは栗林汽船に交渉して日本に貸与されているアメリカの戦標船に便乗するよう頼んで呉れたので、熱をおかして室蘭まで出かけ、そこから芝浦まで大きな食糧入りのリュックサックを横において二晩夜をあかし漸く目的地についた。当時糸魚川君は横浜高商の校長であった。私はリュックをかついで横浜磯子の糸魚川君の官舎を訪れ、事情を話して泊めて貰うことにした。

糸魚川君は「そんな電報が行ったのなら多分大臣と面接することになるだろう。その髭では失礼だから散髪に行つてこい」と言うのである。私は風邪のため髭も頭髮もボウボウとしていたのであった。私は彼の言に従つて街へ行ったが、その日は折悪しく横浜中の床屋の定休日であった。私は帰つて来て今日は駄目だから髭だけそつて行くことにした、と言つた。出頭日は明日に迫つていたのであった。すると彼は「よしそれでは僕がかつてやる」と言つて、二階の縁側の日当たりのよいところで、首に風呂敷を当ててチョッキン、チョッキンとかつて、遠くから見たり近くから見たりして、「うん、これで良い」と自分でうなずいた。多分虎がりであったかも知れないが、私にとってはどんな形になろうと彼

の温い心に心中で涙の出る程有り難い思いがした。

果して翌日、文部省で安倍文部大臣にお逢いすることになり、校長の命を受けたのであった。私は糸魚川君に頭をかつて貰つた温かい友情は死ぬまで忘れることは出来ない。これは彼の温かい友情の一つだけをとつて紹介したのであるが、緑丘で結ばれた彼と私の心のつながりは互いにこの世を去つても切れるものではないと固く固く信じている。

余談—その後糸魚川君に逢つたら笑いながら次のような話をして呉れた。その後間もなく、長男の直輔君が学校へ行つたところ友達が真面目な顔をして「君のおとうさん床屋さんだったの?」と聞かれたそうである。二階の散髪を友達が下から見たのである。勅任官を散髪屋と間違わせて申しわけない話である。

その直輔君も今は阪大の先生で、猿の心理学とかを研究し一年の中半分位は山の中の猿を観察している。そして数年前には渡米して立派な業績を世に出しているそうである。

彼はお父様が人間に示したような温かい心を猿にまで拡げて立派な大学者になることであらう。

(墓目英三編『緑丘』第五八号、昭和四十二年十一月、三〇頁。)

糸魚川君と私

昭和四十二年十一月十日松本から拙宅に電話があつて、同日十時糸魚川君が心筋梗塞で急死した旨を伝えて来た。私はその瞬間「しまった残念だ、もう一度会いたかった」と地団駄をふむ気持になつた。

糸魚川君は高商時代は一年私の先輩であつたが、彼は卒業後一年台湾銀行へ入つたので、東京高商専攻部で一緒になり、一緒に小樽高商に赴任し、それ以来四十数年の親しい友であつた。

私が五月末東京に移つて来てから二度電話を貰つた、「東京か松本かで逢おうじゃないか、いつでも都合のいい日、都合のいい場所を指定して呉れ」と言うのであつた。私は病後のからだで初めての東京の猛暑にあつてまいってしまい、六月から九月一杯殆ど寝たり起きたりの日を暮らしていたので、「もうしばらく延期して十月か十一月かに拙宅に泊りがけで来て欲しい」と約束してあつたのだ。十一月に入ってから私も健康をとりもどしたの

で十一月の六、七日頃打合せの電話をしようと考えていた。それなのに突然の電話で、もう二度と再び逢えないことになつたのだ。私は残念で残念でたまらない。この気持は今も抜けきれないでいる。

彼はクリスチャンらしくないクリスチャンであり、学校の新米講師時代には学生と共に Y・M・C・A の下宿に住んでいた。その頃の学生は西野嘉一郎君、田中修吾君等であつた。その中にクリスチャンならざる私ももぐり込ませて貰つた。それであのクリスチャン学生諸君とは特に親しくなつて、今でも逢えば当時の話に花が咲くのである。

こんな頃からの思い出はいくら書いてもつきない程であるが、その中で私の胸にいつまでも強く刻みこまれているものを一つだけ述べて、四十数年の変わらざる友情に対する感謝の意を表することとしよう。

それは昭和二十一年二月頃のことであつた。私が召集解除になつて六か月もしないうちである。文部次官から何月何日何時に文部省に出頭され度しという電報を受けとつた。しかし、あいにく私は風邪を引いて熱が出ており、かつ当時の交通事情は何日もかかつて切符を手に入れ、汽車は窓から出入してはじめて乗り降りするあの地獄のような有様であつ

国民の血税で彼等の放漫経営の尻ぬぐいが行なわれるのである。しかも、こうした失敗をもたらした会社幹部の中にはその地位に括然とそのままいすわるものもあるが、中には「社会に対し、株主に対し申訳がない」と口には立派なことをとなえて「引責辞職」をするものもある。ここまでは立派そうであるが、そんな連中でも会社に与えた迷惑にはおさまいなしに多額の退職金、慰労金を頂戴していくのである。

事業と運命を共にするという真剣さは微塵もない。

最後に教育界についてもふれてみよう。日ごろは日本政治の腐敗を批判し論評している尊敬すべき学者の間にあっても、何年かごとの学長、学部長、研究所長選挙にでもなれば、彼等の唾棄すべき政治屋顔まけの運動が行なわれること皆無ではない。昔のように、そんなことから毅然として象牙の塔に閉じこもる学者がもったいたならば日本の教育程度も学問的水準ももっともと高揚するのではあるまいか。

身辺をみても一家の家庭にあっても然りである。子供を放任しておくことが、民主主義的教育であるといったなまかじりの教育観でわが子に接するが故に、非行青少年の数は益々増してくるのである。如何なる時代においても、未成年者を家庭でしつけるのは両親の

義務であり責任でなければならぬ。

こうみてくると、日本にはどこにも真の責任者はいないように私には思われる。

幸か不幸か昨年来わが国の経済界には相当深刻な不況が続いているのであるが、戦後何度か経験した不景気のように、徒らに他力本願のその場限りの切抜策に走らず、禍を転じて福となすよう、経済人はこの苦境を上下一体となって自力で克服し、この際こそ真の経営者としての筋金を身につけて貰いたいものである。昔から「艱難汝を玉にする」という諺がある。壁につき当たらぬ先に立派な経済界、経済人を造りあげるには、この不況は絶好の天の恵みである。

日本の無責任時代はまず経済界から解消することを祈願して止まない次第である。

(北洋相互銀行行内報「行友」第三四号、昭和四十一年三月、一六一―一七頁。)

責任者不在の日本国

こんな表題をかかげると、何をたわけたことをいうのか、政治の世界では、上は、主権者たる国民から選ばれた立派な総理大臣をはじめ、各省大臣等々があり、経済の世界では資本と経営とに分離したりとはいえ、出資者の信頼のもとに会社の経営に当たりつつある会長、社長、役員、組合幹部等があるではないか。教育界にあってはまた然りである。学長、学部長教授等々識見豊富な諸先生が次代の国民の育成に、学問水準の高揚に努めつつあるのではないかと反問されるかも知れない。確かに形の上では日本にもいたるところの部門に最高の責任者がいることになっている。

しかし、彼等のうち果して何人が自分の職責と真剣に取りくんでいるであろうか。真の責任感をもっているであろうか。

かりに、政治の世界を覗いてみよう。終戦後は民主主義の錦の御旗のもとに、彼等政治の責任者は何々審議会、調査会等々を設けいわゆる学識経験者なるものを集め、困難な問

題はすべてこれ等の機関に押しつけ、もって自らの責任回避の具としているやに思われる。

こうしたことは政治の世界のみではない。形は違っていても、経済界においても無責任な経営者が横行している。資本と経営が多くの場合一致していた戦前—たとえ分離していても資本の発言の強かった戦前—にあっては経営の失敗は自己の生活の危機をももたらしたものである。資本家のみならず経営者にとっても。しかるに、戦後のあの物資不足のインフレ時代にはじめて事業の経営をスタートした人々は、物さえ送れば、物さえ手に入れば、そしてそれを右から左へ売却すれば、それだけで巨万の富を手にすることができたのである。それはほんとうの経営ではなく危険なき賭博遊びのようなものである。それにもかかわらず、彼等はそれが経済界というものだという甘い考えをもつにいたったのである。

従って一度不況が到来すれば、何等為すべもなく、専ら政府または政府機関に泣きつくという他力本願の救いに走るのである。こうした際に戦前ならば当然倒れるべき企業が大きければ大きい程、政府は大眾に迷惑がかかってはという口実のもとに救済に乗り出し、

しかし拓銀時代の小林君（特に昭和四―五年）については、世のなかの人のあまり知らない事柄を通して彼のおもかげを数々聞き知っている。というのは彼が小樽支店在任中、彼と机をならべて仕事をし「不在地主」の原稿整理を一切手伝ってやった織田ムメ子さん（七十一歳）とは私は今日までつき合ってきているからである。彼女を通して私の知っている小林君の市井の人のおもかげの一、二をここに紹介しよう。

小林君は誠に天分に恵まれた青年であって文学的素質のみならず、絵にも、音楽にも、同じ程度の素質があった。そしてそれは彼自身も意識しており、一時はこの三つの方向の何れに進むべきかに迷ったのであったが、結局は文学を選んだのであった。その理由として織田女に語ったところは、「文学は一番金がかからないから」だったそうである。人間の運命は小さな岐路で大きく左右されるものである。もし彼が絵や音楽に志を立てていたなら全く違った小林多喜二が生れていたであろう。

彼の「不在地主」は中央公論社の要請で銀行に勤務しながら約二か月で書き上げたのであるが、その原稿の整理は織田女が一切引受けて自宅に持ち帰って行なった。それが出来上がった時、中央公論社から原稿料五百円也が送られて来た。それを彼は全額母の名義にし

て定期預金にしたのであった。そして織田女にはマルイから態々錦紗の反物を買って御礼に贈ったのであった。彼女はいまも羽織にして大切に保存している。

あの世事には疎く学問一徹に見えた手塚寿郎教授が、高商卒業に際し自分が三年間世話になった二寮の賄に御礼に反物を買って贈ったことと、一脈相通するものがあるのも興味あることである。

小林君はまた「人は本を作るが、本はまた人を作るものだ」としよっちゅう彼女に口癖のようにいい聞かせ、次から次と本を貸してくれたのであるが、彼女にとってははいずれも難解なもの許りなので、意味のわからない当時の新語やかたかな文字をノートに書き抜いて、多喜二君に説明を乞うことにしていた。その度に彼は自らペンをとってそのノートに言葉の意味をやさしく説いて書き入れてくれたのであった。こうしたノートも数冊に及んだ。いまだに彼女は大切に保存している。

以上私は織田女を通して知っている小林君の人柄の一端を述べたにすぎないが、偉大な文学者は、また良識ある市井の人でもあったのである。

（墓目英三編『緑丘』第四二号、昭和四十年三月、一九頁。）

湖ということは、個々の企業の組織が人的資産の資質向上に、その引上げに、どれだけ努力を払っているかに企業経営の将来がかかっている、ということである。

「もう一人の優秀な係員、係長、代理、次長」は経営の責任者、管理者一人一人が作り出すことができるのであって、他から貰うものではない。

「人は城、人は石垣、人は濠」という言葉は、これを現代の企業経営にかんがみるとき、私は、このような努力を要請するものであると考えるのである。

(北洋相互銀行内報『行友』第三〇号、昭和三十九年一月、三六一—三八頁。)

市井の人小林多喜二の片鱗

私は大正十一年の四月に小樽高商の講師として赴任したが、その年の十二月一日から一年志願兵として一年四か月の間兵役に服した。

小林多喜二君は大正十三年の卒業であるから、私が小樽に来たとき彼は高商二年生であり、僅かに八か月あの上で同じ生活をしたに過ぎない。当時初めて教壇に立つ若い連中には原書講読をさせるのが学校の仕来たりであった。私は Esher の The Foreign Exchange Explained を第二学年で講読した。一応皆に一節位ずつ割当てて直訳をさせてからその意義について講義をするのが常であった。全然予習をしてこない者も毎日一人や二人はいた。しかし、小林君は順番が狂って他人のところ当たっても必ず適切な訳をした。したがって、彼にとっては多分興味薄い科目であったろうが、良い点数をとっていた。こんな訳で、一学生としての小林君の印象は温厚で真面目な勉強家というに過ぎない。

を座長とするゼミナールの研究会を続けている。

職業として銀行員を選んだ人は、いわば銀行員のプロになろうとして入行したものであって、本質的にはプロ野球の選手と変わりはないはずである。プロ野球の選手は打率が落ちたりエラーが続出した場合ベンチ入れを命ぜられあるいは二軍入りを命ぜられる。この厳しさは本人としては当然甘受する覚悟が必要である。

したがって良い選手たらんとするものは、常に本人の自覚と責任に基づく勉強によって能力の向上、開発に努めている。銀行員といえどもたゆまぬ努力と勉強によって自己の能力の向上を志すべきである。

けれども、プロ野球の球団にも打撃コーチ、守備コーチがおり、激しい練習のグラウンド・トレーニングがある。本人の自覚による自己研修のみでは、チームの成績は決して向上しないのである。本人の自覚の上に、さまざまなコーチと激しい修練が加えられて始めてチームの優勝も可能となるのである。

したがって、銀行にあっては、行員の一人一人が、自分がプロとして銀行に入ってきたのだという厳しい自覚をもつと同時に、かりにも組織運営上の主管の地位にある人びとは

すべてチーム全体の成績向上のためのコーチとなり、厳しいグラウンド・トレーニングを課する義務をもっているのである。この個人の自覚勉強と管理者によるトレーニングと両者が相まってこそ企業の発展向上を期待することができるのである。

企業の現に有る人びとの資質というものももちろん企業にとって重要な要因である。能力三の人を能力九に引上げることが容易であるまい。しかし能力五の人を能力六ないし七、八に引上げることが可能であろう。

たとえば、どのように優秀な能力の人であっても、たった一人でできる仕事の量には限度がある。ごく普通の能力の人の集団であっても組織としての力は、構成員個々の力の能力の単純総和を越えるのである。

今日、世界最大の企業はアメリカのゼネラル・モーター社である。一九〇八年にW・デュラントによって創設されたG・Mが、数兆円の資産をもつ世界一の企業に発展した秘密は「組織」であるといわれている。G・Mの七百人を越える役員の一一人一人が他社の役員に比較して特に傑出してはいるわけではない。だが、会社あるいは組織としてのG・Mの判断は、どの会社の役員の個人的判断の総和よりもはるかに的確であったのである。